

第2章 1998年度立会調査（排水管・東側溝・南側溝地点）の成果

端野晋平・脇山佳奈

1. 調査にいたる経緯と経過

A 調査にいたる経緯

徳島大学蔵本キャンパスの南東部では、1997年度末から1998年度上半期にかけて、排水管の設置などに伴う工事が実施された。それまでの調査で、工事予定地の付近では、弥生時代前期～近世にかけての遺構・遺物（第10次調査地点）、弥生時代前期の大溝や土坑（第12次調査地点）などが検出されており、これらに関係する遺構・遺物が、予定地の範囲まで広がっている可能性を予測し得た。そのため、1998年3月31日～1998年9月2日の期間で、工事に伴う土地掘削に際し、調査員2名による立会調査を実施した。調査面積は約970㎡である。

B 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 北條芳隆）

調査担当 橋本達也（総合科学部・助手）

中村 豊（開放実践センター・助手）

調査補助 岸本多美子・上田淑子・新谷多賀子・安山かおり・山本愛子（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

C 調査の経過

以下、調査日誌にもとづき、調査実施期間中の経過を記述する。なお、南側溝3地点の経過については、日誌が残されていないため、省略する。

3月31日 本学施設マネジメント部が設定した測量基準点 T15 から T14 を視準し、構内に基準杭 T15 - 1, T15 - 2 を設定した。

4月3日 排水管南側の重機掘削を開始した。X950-960・Y1030-1060 の範囲にあたる。調査は東西方向に延びる排水管の東端から西に向かって進めた。黒褐色シルト上面、黄褐色シルト層、黄褐色シルト下層（暗褐色細砂層）の順に掘り下げを行った。Y1050-1060 で SD01・SK01 を検出した。SK01 の東側で弥生時代前期前葉の壺形土器が出土した。

4月7日 Y1050-1060 の掘り下げを行った。SK02・SD02 の図面作成、SK03・SK04 の検出を行った。

4月8日 Y1040-1050 の調査を行った。SK05 の検出・写真撮影を行った。

4月9日 Y1040 から西側へ向かって遺構検出を行った。

4月13日 Y1040 の西側を重機掘削した。

4月15日 Y1030 の西側を掘り下げた。

4月16日 Y1040-1045 で SK07 を検出し、遺構の掘り下げを行った。Y1030-1035 で SK08 を検出した。

- 4月17日 Y1030より西側の掘り下げを行った。
- 4月22日 Y1040-1045でSD03を検出した。SD03の東側でSK09を検出した。
- 4月24日 排水管南側の実測・写真撮影を行った。
- 4月28日 Y1030より西側の掘り下げを行った。
- 5月1日 Y1005-1030の掘り下げを行ったが、遺構・遺物ともに確認されず、排水管南側の調査を終了した。
- 6月8日 南北に延びる排水管東側の調査を開始した。その範囲はX955-990・Y1005-1020である。排水管東側の北半分に相当するX975-990・Y1010-1020より、SD59・SD44・SD46・SK10を検出した。
- 6月10日 SD59・SD44・SD46・SK10を掘削した。
- 6月11日 SK11を第3遺構面で検出した。SD66・SD67を検出した。
- 6月12日 SK11・SD67を掘削した。
- 6月24日 中央診療棟より南に位置する南側溝1地点Y990-1000の調査を開始し、重機掘削を行った。
- 6月25日 SI01を検出した。
- 6月26日 南側溝1地点Y990-1100の掘り下げを行った。
- 6月29日 南側溝1地点Y960-1100の調査を行い、SK102・SD101を掘削した。
- 6月30日 南側溝1地点Y960-1000の調査を行った。
- 7月1日 南側溝1地点Y950-990の調査を行った。SD104の検出、SP01の実測を行った。
- 7月2日 南側溝1地点Y970-990の調査を行った。SD102を検出した。
- 7月3日 南側溝1地点Y950-990の調査を行った。Y960より西側の重機掘削を行った。
- 7月6日 南側溝1地点Y965-990の調査を行った。SD102・SD103を掘削した。
- 7月7日 南側溝1地点の西側にあたるY880-900の重機掘削を行い、SK105の検出・掘削を行った。
- 7月8日 南側溝1地点Y880-900のSK105の調査を行った。1地点Y900-910で、SK106を検出した。同時に、南側溝2地点の調査を開始した。Y875-880で、1地点で検出されたSK105の続きを検出した。
- 7月9日 南側溝1地点Y900-910のSK106の掘削を引き続き行いつつ、Y920-950の掘削を進め、SK107を検出した。
- 7月10日 南側溝1地点Y900-940で、SD106・SD107・SK108を検出した。南側溝2地点Y890から東へ向かって重機掘削を行った。
- 7月13日 南側溝2地点で、SD107・SD108・SK109・SK110を掘削した。
- 7月14日 南側溝1地点Y920-940の調査を行い、Y920-930でSD107を掘削した。
- 7月15日 南側溝1地点Y920-930でSD107を掘削し、2地点Y890-910でSD108・SK112を検出した。
- 7月17日 南側溝2地点Y930-940の掘り下げを行った。
- 7月21日 南側溝2地点Y900-910のSD106、Y915-920のSD107、Y925-935のSD109、Y930-940のSK113を掘削した。
- 7月22日 南側溝2地点Y940-970で重機掘削を始めた。
- 7月23日 東側溝1・2地点の調査を始めた。東側溝1地点はX940-1010・Y1015-1020、東側溝2地点はX940-1020・Y1020-1025に位置する。東側溝1地点X970-980でSK11を検出した。

- 南側溝2地点 Y930-950 でSK115～118を掘削した。
- 7月24日 東側溝2地点 X970付近でSK120を検出し、東側溝1地点 X975-985でSK121・SK122・SK11を掘削した。排水管東側で検出したSD59の続きを確認した。南側溝2地点 Y960~970の掘り下げを行った。
- 7月28日 南側溝2地点 Y970-980でSD103を掘削した。
- 7月29日 南側溝2地点 Y970-1000でSD103・SK123を掘削した。2地点 Y930-940の掘り下げを行った。
- 7月30日 南側溝2地点 Y930-940・960-970の掘り下げを行った。SK125・SK126を検出した。南側溝1地点 SD103の続きを2地点で確認した。
- 7月31日 南側溝2地点 Y930-950で、SK125・SK126・SK127を掘削した。
- 8月3日 南側溝2地点 Y930-940・980-990を調査した。SK128・SK129を検出した。SK130の掘方は検出できなかった。2地点 Y1000より東側の重機掘削を行った。
- 8月4日 南側溝2地点 Y930-950・980-1000を調査した。Y970-980でSK131を検出した。
- 8月5日 南側溝2地点 Y930-940・990-1010を調査した。Y1005-1010でSD110を検出した。
- 8月6日 南側溝2地点 Y930-950で、SK125・SK126・SK127の遺物を取り上げた。2地点 Y945-950でSK132を検出した。Y985-995でSD102を掘削した。
- 8月7日 南側溝2地点 Y940-950・970-1100を調査した。SD102を完掘し、Y1005-1010でSD110の掘削、Y970-980でSK131、Y975-985でSK129の検出を行った。南側溝1地点 Y1100より東側の重機掘削を行った。
- 8月17日 南側溝2地点 Y1000から東へ向かって掘り下げを行った。南側溝1地点 Y1100から東に向かって重機掘削を行った。
- 8月18日 南側溝2地点 Y1020から東へ向かって重機掘削を行った。1地点 Y1000-1020、2地点 Y1000-1020の掘り下げを行った。
- 8月19日 南側溝2地点 Y1000-1020を掘り下げ、1地点 Y1020-1030・X940-950でSK133を検出した。東側溝1地点 X940-950で重機掘削を行い、SD111・SK134を検出した。
- 8月20日 東側溝1地点 X945-955で、SD111・SK134・SK137を掘削した。東側溝2地点 X940-950の重機掘削を行った。南側溝2地点 Y1020より東側で重機掘削を行った。
- 8月21日 東側溝2地点 X945-955で、SD112（1地点 SK134の続き）を検出した。南側溝2地点 Y1020を掘り下げ、2地点 Y1030より東側で重機掘削を行った。
- 8月24日 東側溝1地点 X940-950で掘り下げを行った。東側溝2地点 X945-955でSK138を検出した。南側溝2地点 Y1010-1030を掘り下げ、SE01・SE02を検出した。
- 8月25日 Y1040-1050の重機掘削を行った。東側溝1地点 X940-950を掘り下げた。南側溝1地点と東側溝2地点の交わる X940-950・Y1020-1030の掘り下げを行った。
- 8月26日 南側溝2地点 Y1010-1030で黒褐色シルト層を掘り下げた。X940-950・Y1020-1030の掘り下げを行った。
- 8月27日 南側溝2地点 Y1010-1030で黄褐色シルト層を検出した。X940-950・Y1020-1030の掘り下げを行った。
- 8月28日 東側溝2地点でSK133を掘削した。南側溝2地点 Y1020-1030の掘り下げを行い、SD114

を検出した。

- 8月31日 南側溝1地点 Y1020-1050 の重機掘削を行った。南側溝2地点 Y1010-1030 の黄褐色シルト層を掘り下げた。SD114 を掘削した。
- 9月1日 南側溝1地点 Y1020-1050 の重機掘削を行った。1地点 Y1020 でSK133の続きを検出した。
- 9月2日 南側溝1地点・東側溝2地点のSK133を掘削し、1地点 Y1020-1040, 2地点 Y1010-1040 の平面図を作成した。南側溝1・2地点, 東側溝2地点の調査を終えた。

2. 調査地点の位置と区割り

A 調査地点の位置

本稿で報告する地点は、徳島市蔵本町2丁目に所在し、蔵本キャンパス東南部に位置する。便宜上、調査地点を次の6つに呼び分けて報告する(図2-1)。すなわち、第13次調査地点の東側に位置し、南北に延びる二条の側溝工事に伴う地点を、西より「東側溝1地点」「東側溝2地点」と呼ぶ。この二つの地点と交わりつつ、第13次調査地点の東側、および第22次調査地点とボイラータンク地点の南側に位置する、L字形の地点を「排水管地点」と呼ぶ。そして、第13次調査地点の南側に位置し、東西に延びる二条の側溝工事に伴う地点を、北より「南側溝1地点」「南側溝2地点」、さらにその南側に展開する地点を「南側溝3地点」と呼ぶ。これらの地点の周辺ではそれまでに、第10・12次調査が実施され、弥生時代前期の遺構・遺物などが確認されていたのは先述の通りである。本報告地点の調査後も、第15・20・22次調査などでこれらに関係する遺構・遺物が確認され、とくに弥生時代前期前葉～中葉の集落域の様相が鮮明になっている。

B 調査地点の区割り

南側溝1～3地点, 東側溝1・2地点の調査にあたっては、本学施設部(現・施設マネジメント部)が構内とその周辺に設置した測量基準点にもとづく5mグリッドを用いた(図2-2～2-8)。このグリッドは、蔵本キャンパス外の南西に設定された原点からの距離で表現され、そのX軸・Y軸はそれぞれ、同キャンパスの南北道路、東西道路にほぼ平行する。排水管地点では調査時には、1-1～5区・2区・3区というように、独自の調査区が設定されていたが、本稿ではこれを用いず、南側溝1～3地点, 東側溝1・2地点と同じ5mグリッドを用いて報告する。また、このグリッドと平面直角座標系(第IV系)との関係については、2017年4月、本学施設マネジメント部が設置した測量基準点の2点を現地で確認し、トータルステーションを用いた測量を行うことによって求めた。

3. 基本層序

本調査地点の基本土層を、排水管・東側溝地点 A-A' 断面(図2-9)にもとづいて、以下、詳述する。なお、現地表面は標高約3.6mであり、そこから標高約2.8mまでは近代以降の造成土が堆積していた。

- 1層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土からなる。上面の標高は約2.9m、厚さは10～20cmを測る。下部にマンガンが沈着し、炭化物を少量含む。

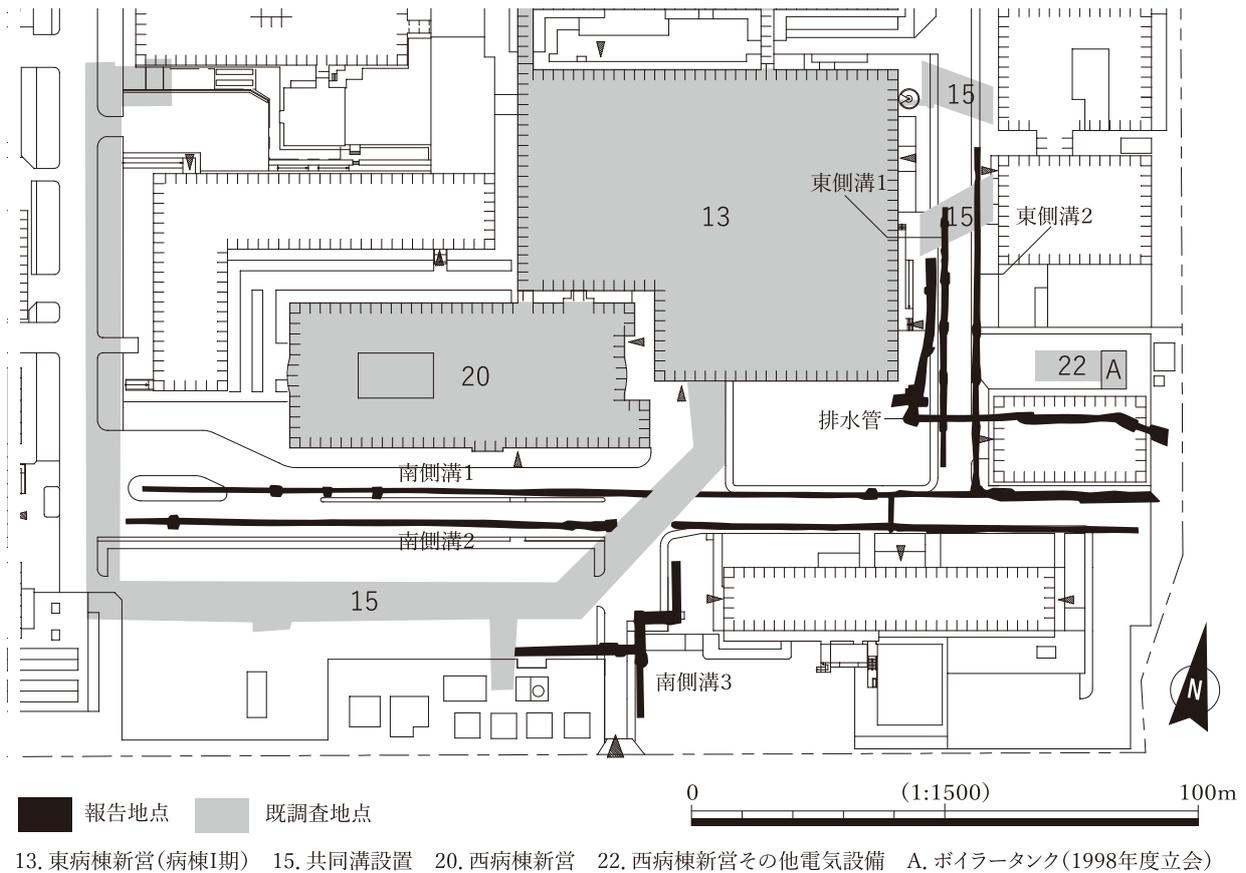


図 2-1 調査地点の区分とその名称

- 2層 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土からなる。上面の標高は約 2.7 m, 厚さは約 10cmを測る。下部に鉄分が沈着する。
- 3層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土からなる。上面の標高は 2.6 ~ 2.65 m, 厚さは約 10cmを測る。マンガン・鉄分を含む。
- 4層 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂からなる。上面の標高は 2.5 ~ 2.55 m, 厚さは約 10cmを測る。マンガンを多量含む。
- 5層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) の細砂を含むシルトからなる。上面の標高は 2.4 ~ 2.6 m, 厚さは 20 ~ 50cmを測る。マンガンを含む。
- 6層 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂からなる。上面の標高は 2.2 ~ 2.6 m, 厚さは約 30cmを測る。鉄分を含む。
- 7層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂からなる。上面の標高は約 2.2 m, 厚さは約 10cmを測る。マンガン・鉄分を多量含む。
- 8層 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂からなる。上面の標高は 2.15 ~ 2.2 m, 厚さは約 10cmを測る。マンガンを多量含む。
- 9層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土からなる。上面の標高は約 2.1 m, 厚さは約 20cmを測る。鉄分を含む
- 10層 暗オリーブ色(5Y4/3)粘土からなる。上面の標高は約 1.9 m, 厚さは約 20cmを測る。鉄分を含む。

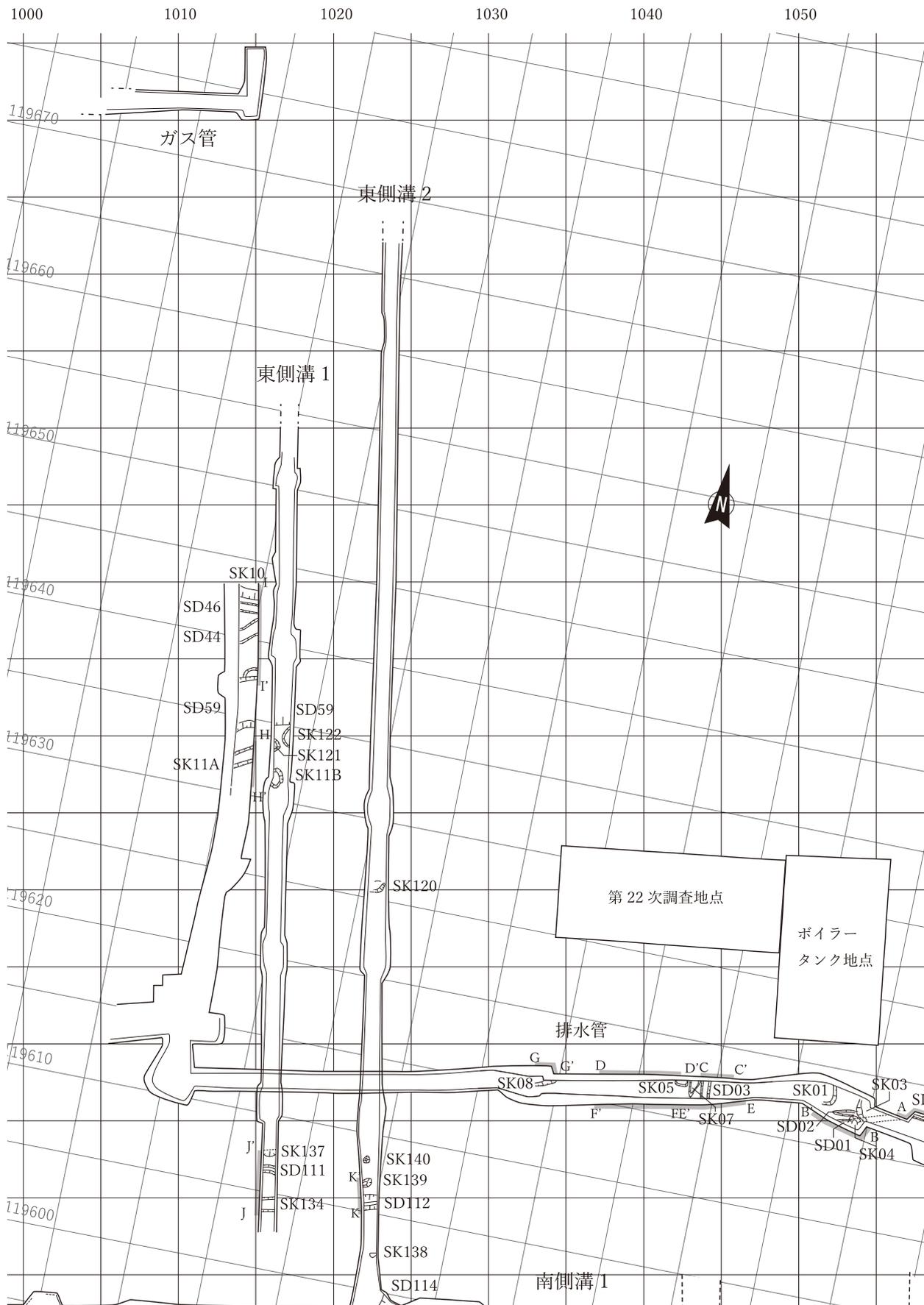


図 2-2 排水管・東側溝地点第 1・2 遺構面全体図

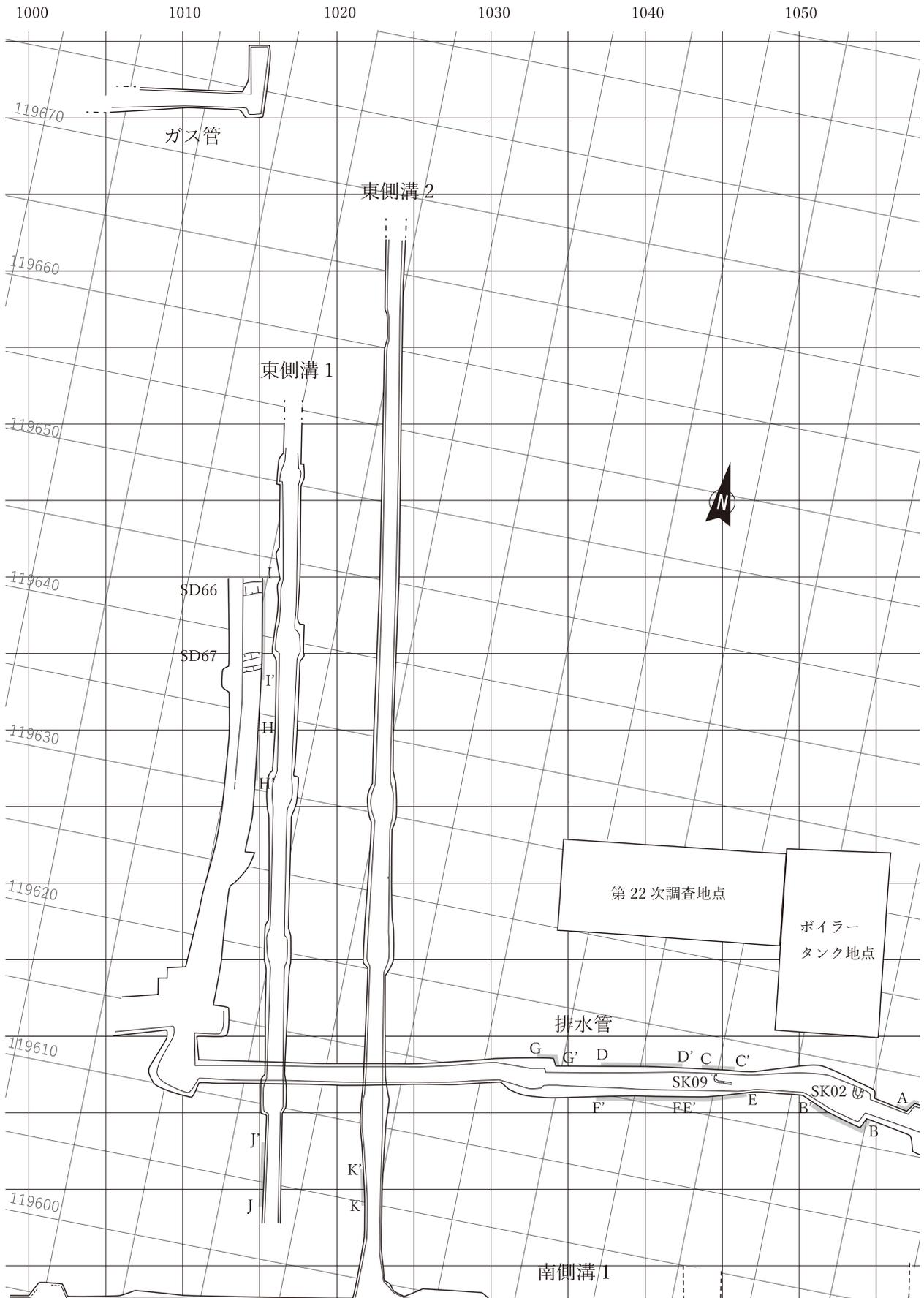


図2-3 排水管・東側溝地点第3遺構面全体図

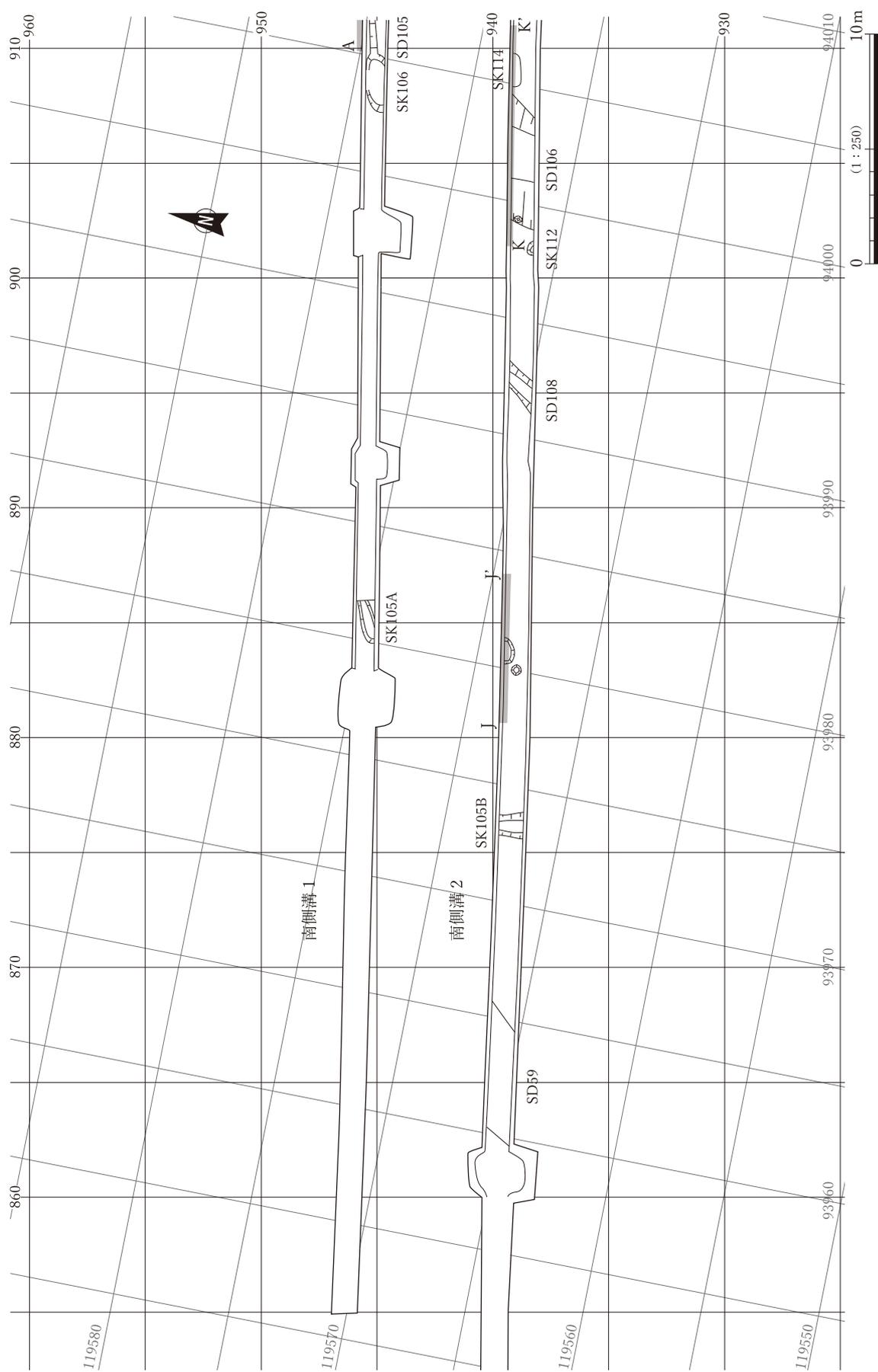


图 2-4 南側溝 1・2 地点遺構面全体図 (1)

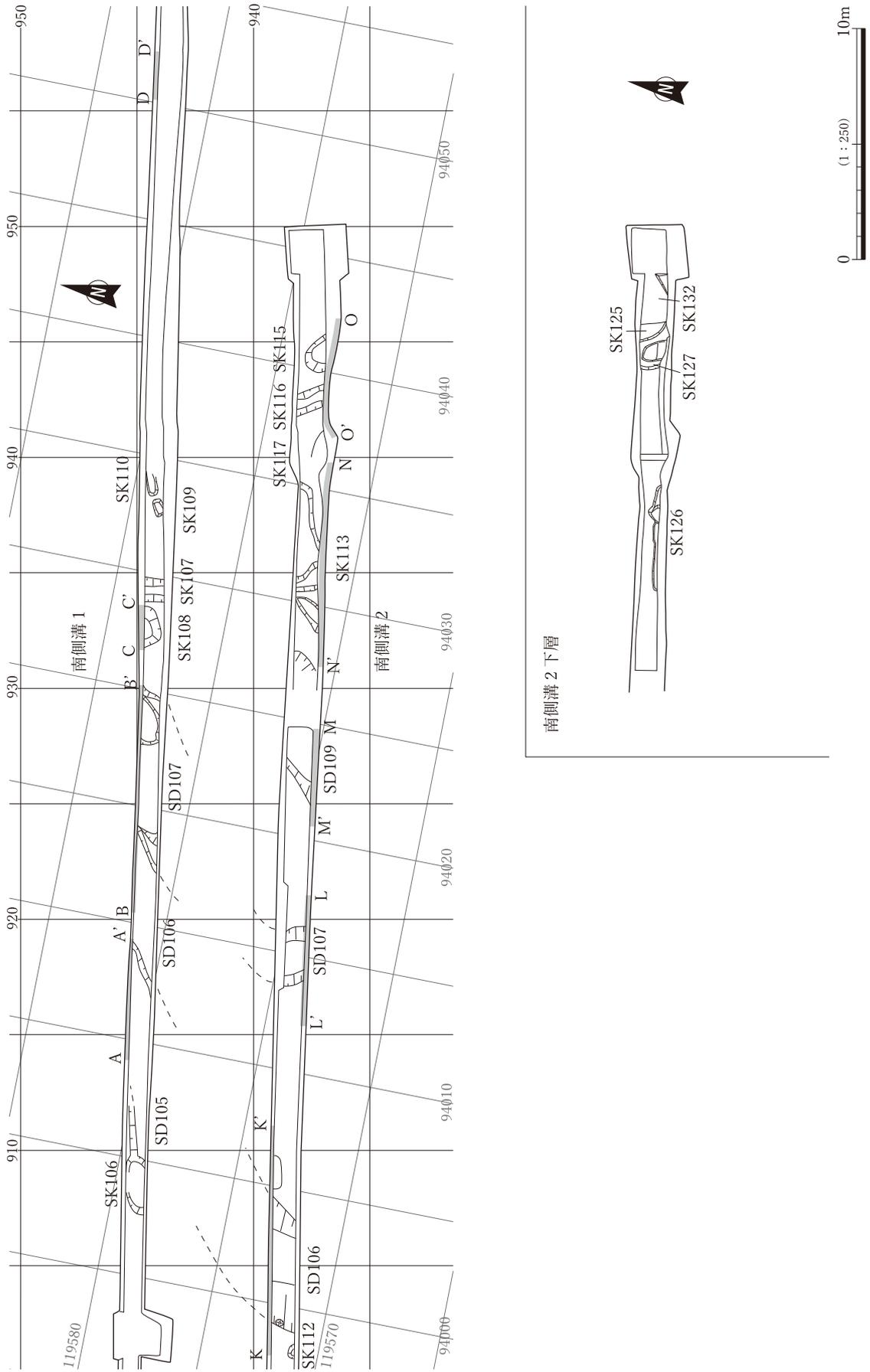


図 2-5 南側溝 1・2 地点遺構面全体図 (2)

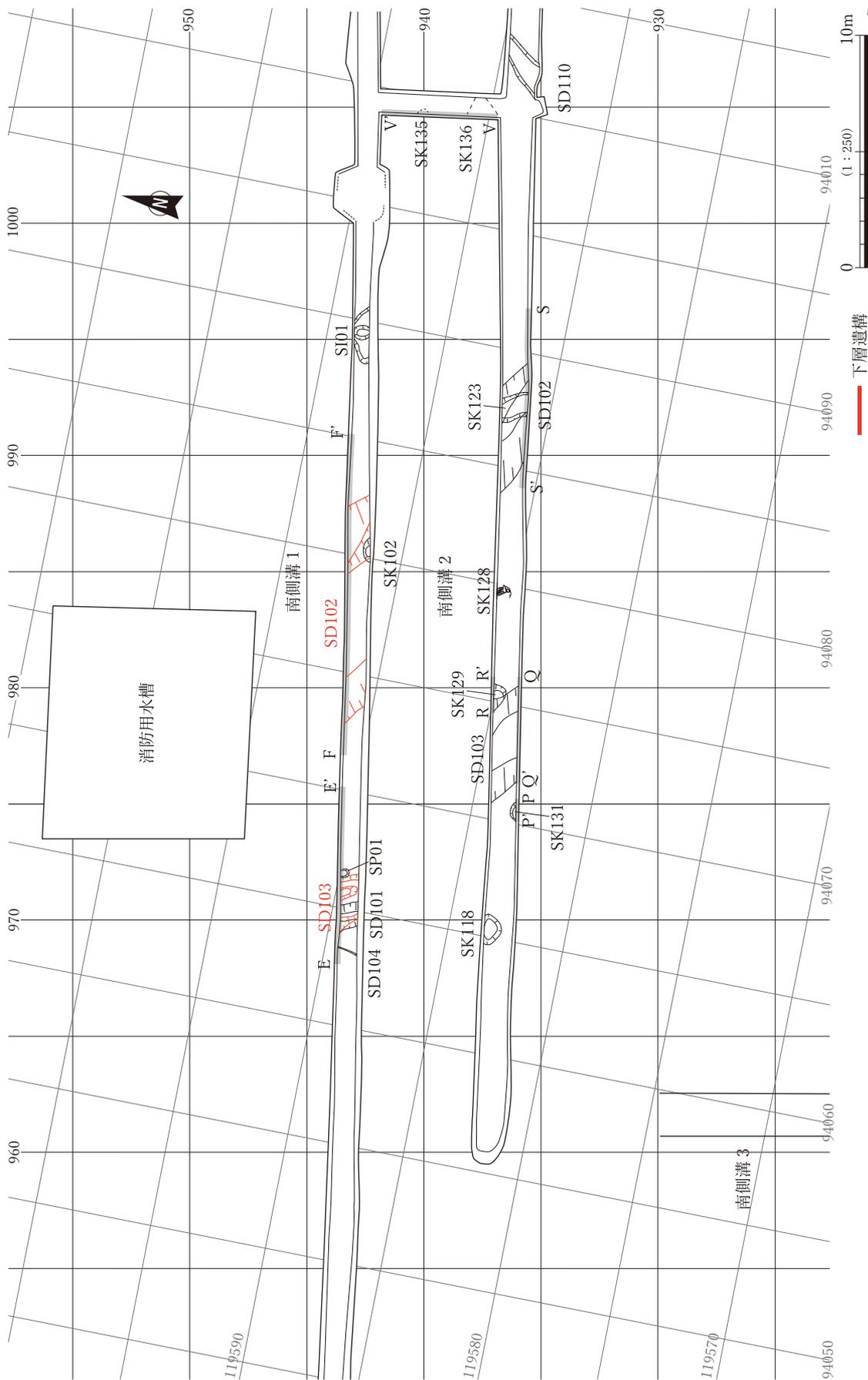


图 2-6 南側溝 1・2 地点遺構面全体图 (3)

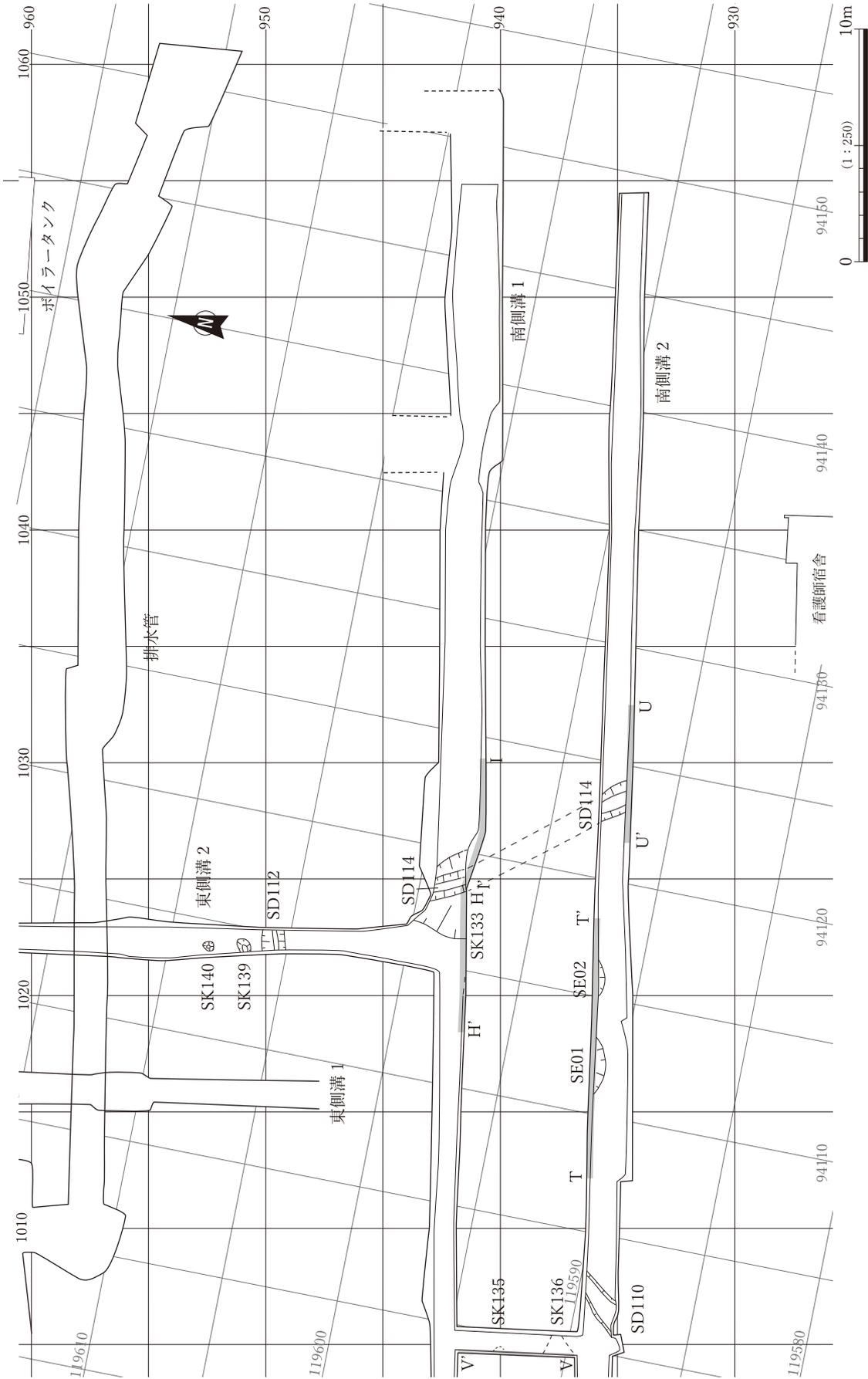


図 2-7 南側溝 1・2 地点遺構面全体図 (4)

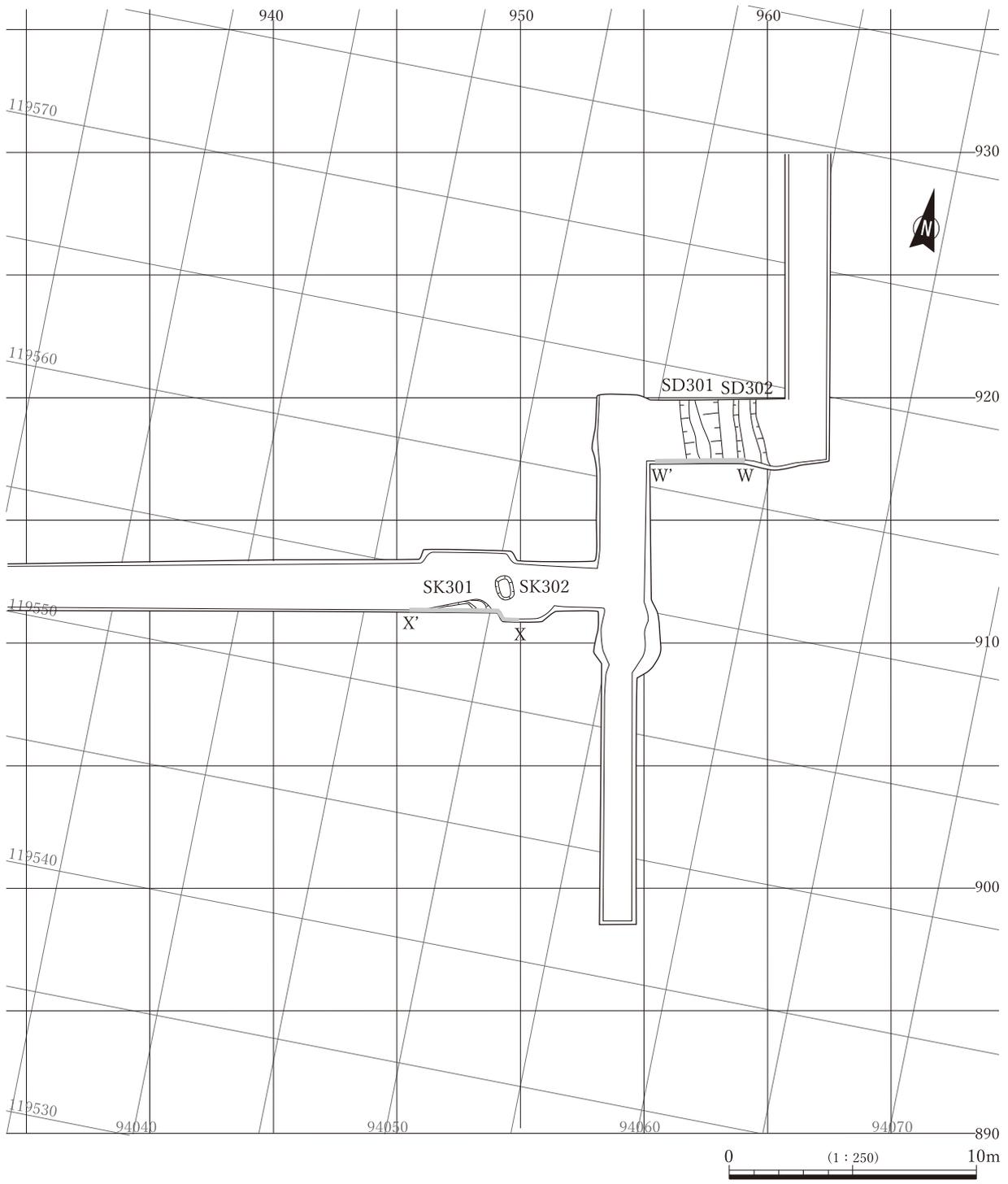
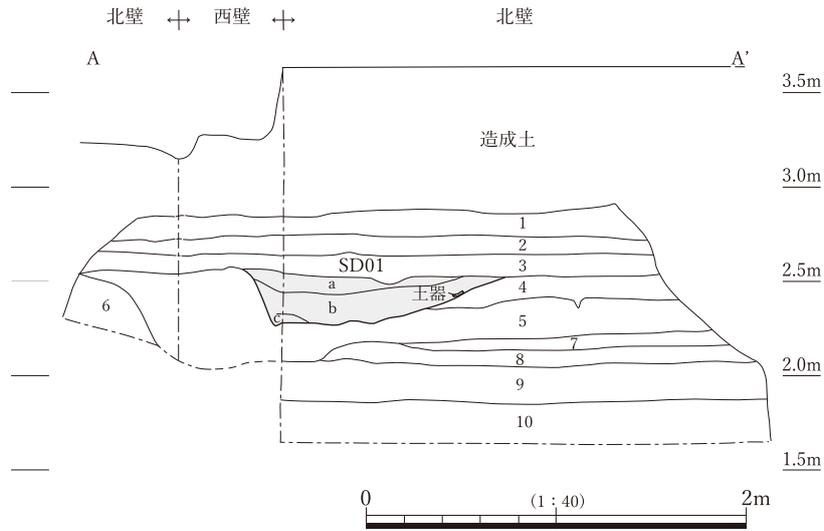


图 2-8 南侧溝 3 地点遺構面全体図

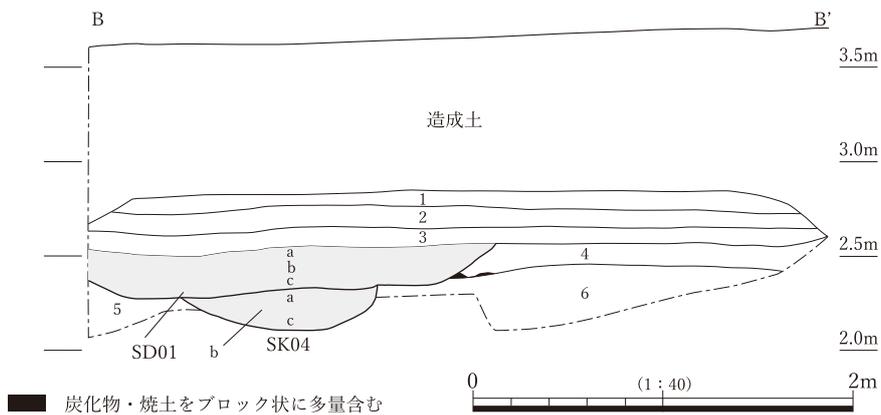


[A-A']

- 1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土, 下部にマンガン沈着, 炭化物少量含む
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土, 下部に鉄分沈着
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土, マンガン・鉄分含む
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂, マンガン多量含む
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂, マンガン含む
- 6 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂, 鉄分含む
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂, マンガン・鉄分多量含む
- 8 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂, マンガン多量含む
- 9 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土, 鉄分含む
- 10 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘土, 鉄分含む

[SD01]

- a 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト, マンガン多量含む
- b 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト, マンガン含む
- c 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土, 砂性あり, 鉄分多量含む



[B-B']

- 1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土, 下面にマンガン沈着
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土, 下半分に鉄分の沈着が顕著
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土
- 4 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト・細砂, 炭化物・土器片含む, 暗褐色 (10YR3/3) 炭化物・焼土ブロック多量含む
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂, マンガン・炭化物含む

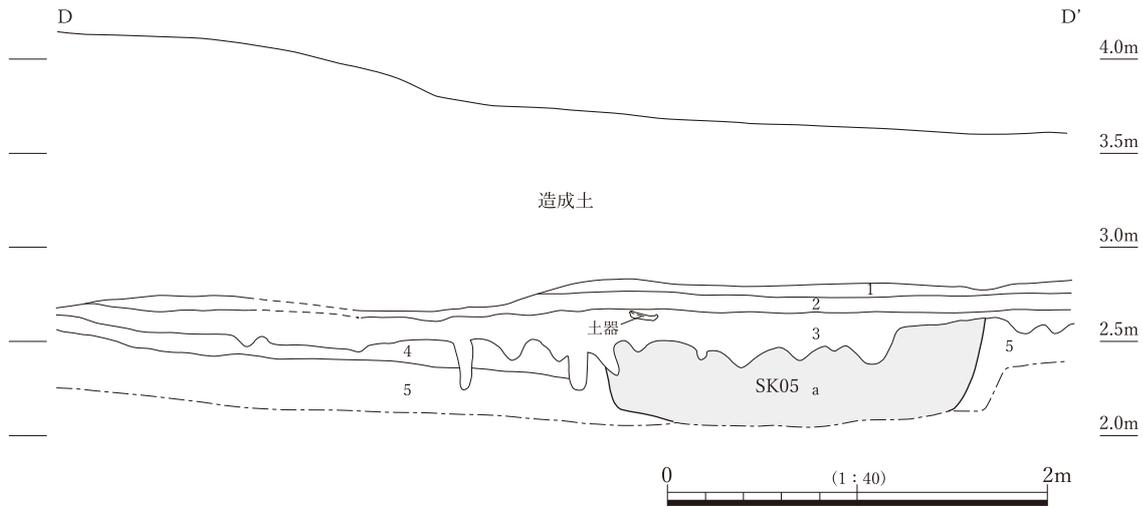
[SD01]

- a 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト
- b 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土, 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土ブロック含む
- c オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト質粘土

[SK04]

- a オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト, 炭化物含む
- b 黒色 (2.5Y2/1) 炭化物
- c 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 中粒砂

図 2-9 排水管地点土層断面図 (1)

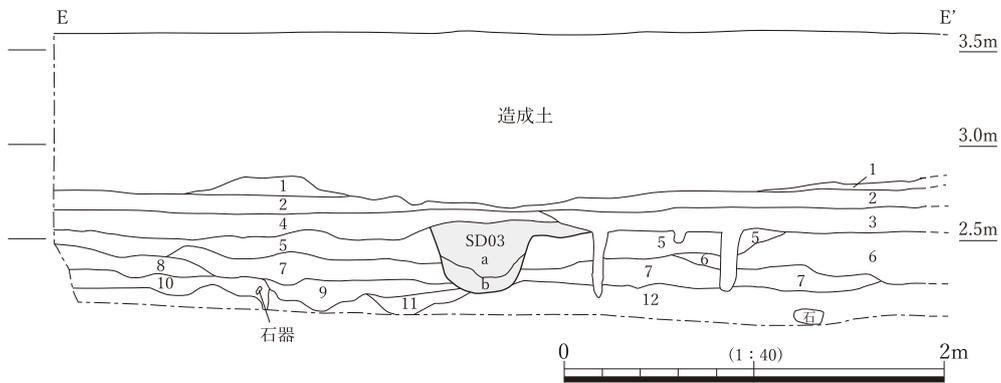


[D-D']

- 1 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土
- 2 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト質粘土, 下層に鉄分沈着
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土, マンガン多量含む, 土器片含む
- 4 暗オリーブ色 (5Y4/3) 砂質土, 細砂含む
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土, 粘性あり

[SK05]

- a 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂, 鉄分含む



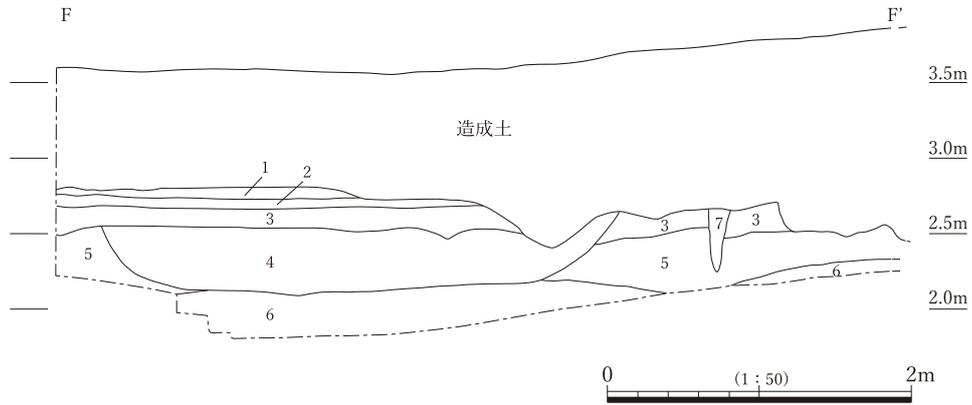
[E-E']

- 1 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土
- 2 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト質粘土, 下部にマンガン沈着
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土, マンガン多量含む
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト, マンガンの沈着が顕著, やや黒色をおびる
- 5 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂
- 7 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂, マンガンの沈着が顕著, シルト質粘土含む
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂, マンガンの沈着が顕著
- 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂・中粒砂, 上面に土器含む
- 10 暗褐色 (10YR3/4) 細砂・シルト質粘土, マンガンの沈着が極めて顕著, 石器含む
- 11 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土含むシルト, 炭化物含む, 遺構内埋土か?
- 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土含む細砂

[SD03]

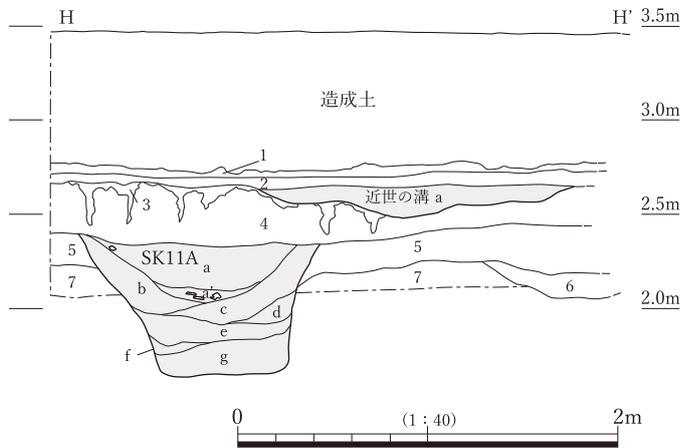
- a オリーブ色 (5Y5/4) 細砂含むシルト
- b 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト含む細砂

図 2-10 排水管地点土層断面図 (2)



[F-F']

- 1 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土
- 2 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト質粘土, 下部にマンガン沈着
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土, マンガン多量含む
- 4 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細砂, 大部分はグライ化している(暗オリーブ灰色2.5GY4/1)
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土, 粘性あり, マンガン含む
- 6 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土, マンガン含む
- 7 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細砂, 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土ブロック含む



[H-H']

- 1 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土
- 2 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 5 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト
- 6 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂含むシルト
- 7 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂含むシルト

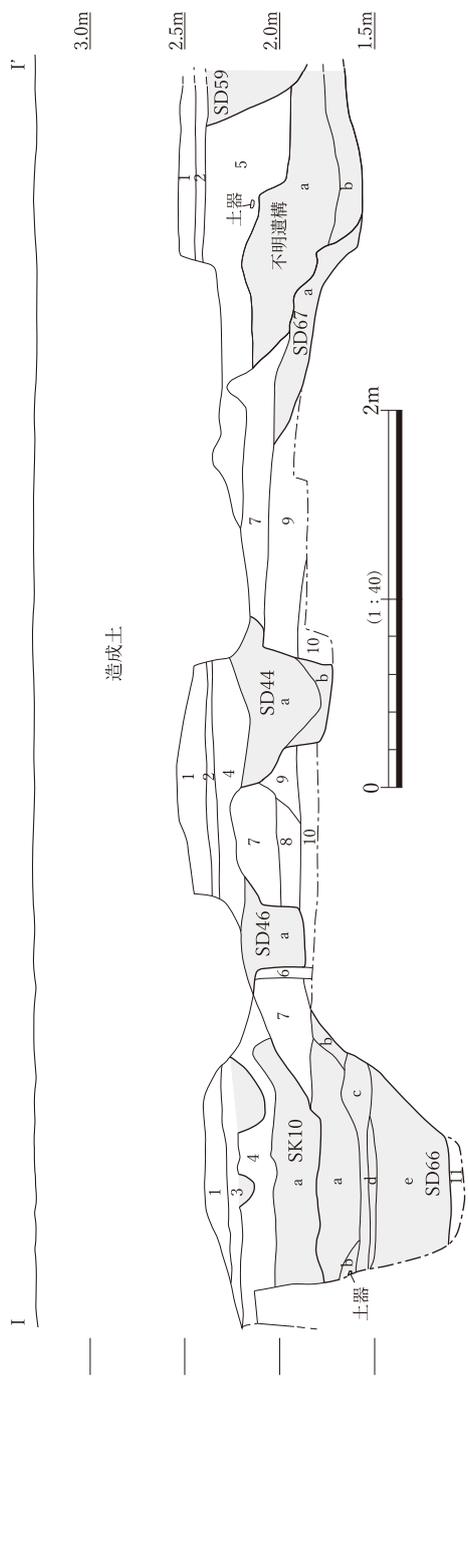
[近世の溝]

- a 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト質粘土

[SK11A]

- a 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂・中粒砂, マンガン含む
- a' 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂・中粒砂, 遺物が集中
- b 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂, 硬くしまる
- c 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土, 細砂ラミナ状に含む
- d 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂・シルト
- e 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト, 細砂ラミナ状に含む
上面に鉄分の沈着顕著
- f 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土・シルト
- g オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗砂・中粒砂

図 2-11 排水管地点土層断面図 (3)



- [I-I']
- 1 灰オリーブ褐色 (7.5Y4/2) 粘質土
 - 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土
 - 3 オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土
 - 4 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト質粘土
 - 5 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト質粘土, 黄褐色シルトを多量含む
 - 6 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土質
 - 7 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト質粘土
 - 8 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 質粘土, 粘性強い
 - 9 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土
 - 10 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂, 鉄分を多量含む
 - 11 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘土, 極細砂含む
- [SK10]
- a 褐色 (2.5Y5/3) シルト, 4層を斑状に含む
- [SD46]
- a 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土, 粘性強い
- [SD44]
- a 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土, 黄褐色シルト斑状に含む
 - b 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
- [不明遺構]
- a 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土
 - b 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂, 鉄分多量含む
- [SD66]
- a オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土, 砂含む
 - b 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土
 - c 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂, 鉄分含む
 - d 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂
 - e 暗緑灰色 (10GY4/1) 細砂
- [SD67]
- a オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土, 砂粒含む



図 2-12 排水管地点土層断面図 (4)

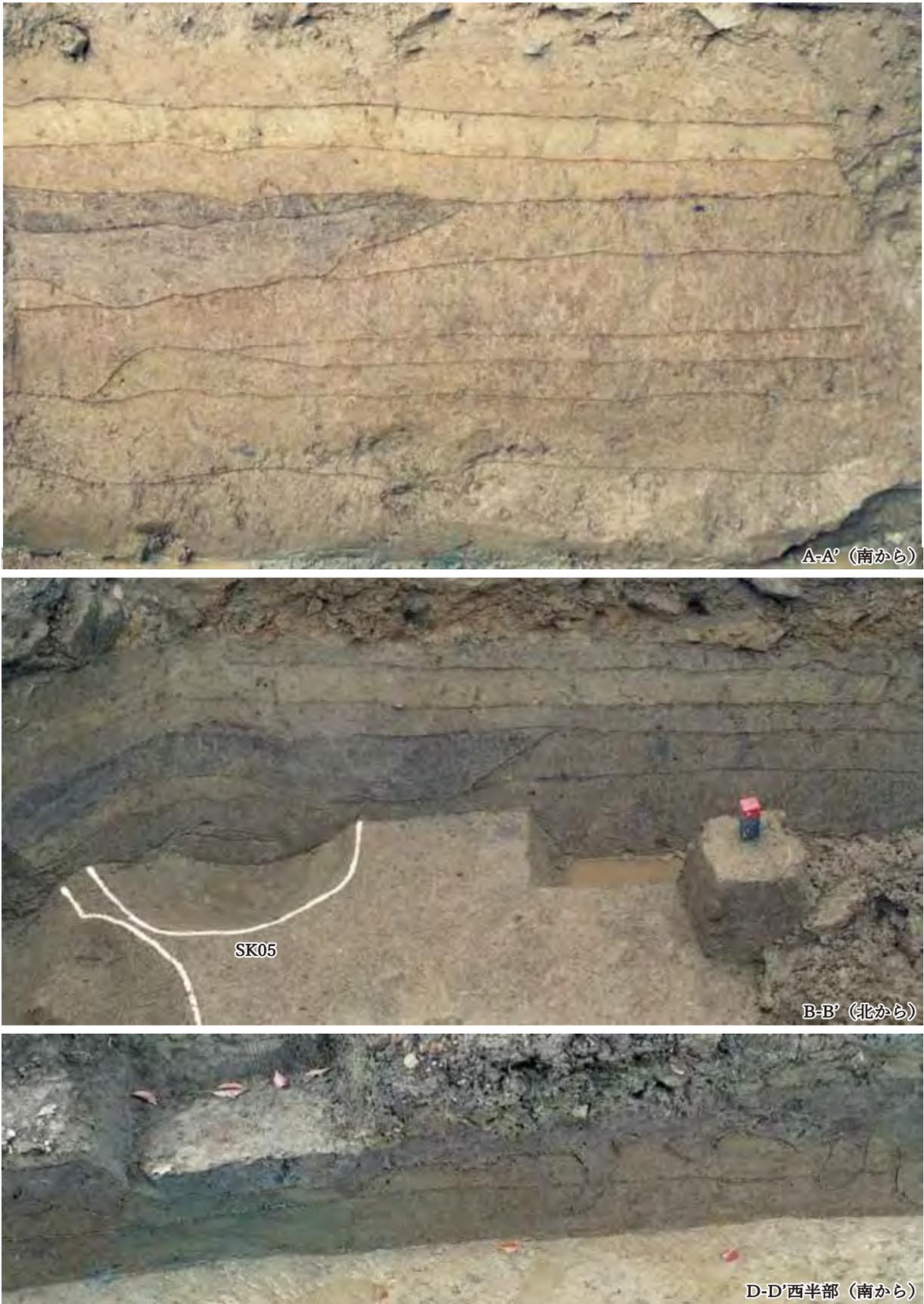


図 2-13 排水管地点土層断面写真 (1)



図 2-14 排水管地点土層断面写真 (2)

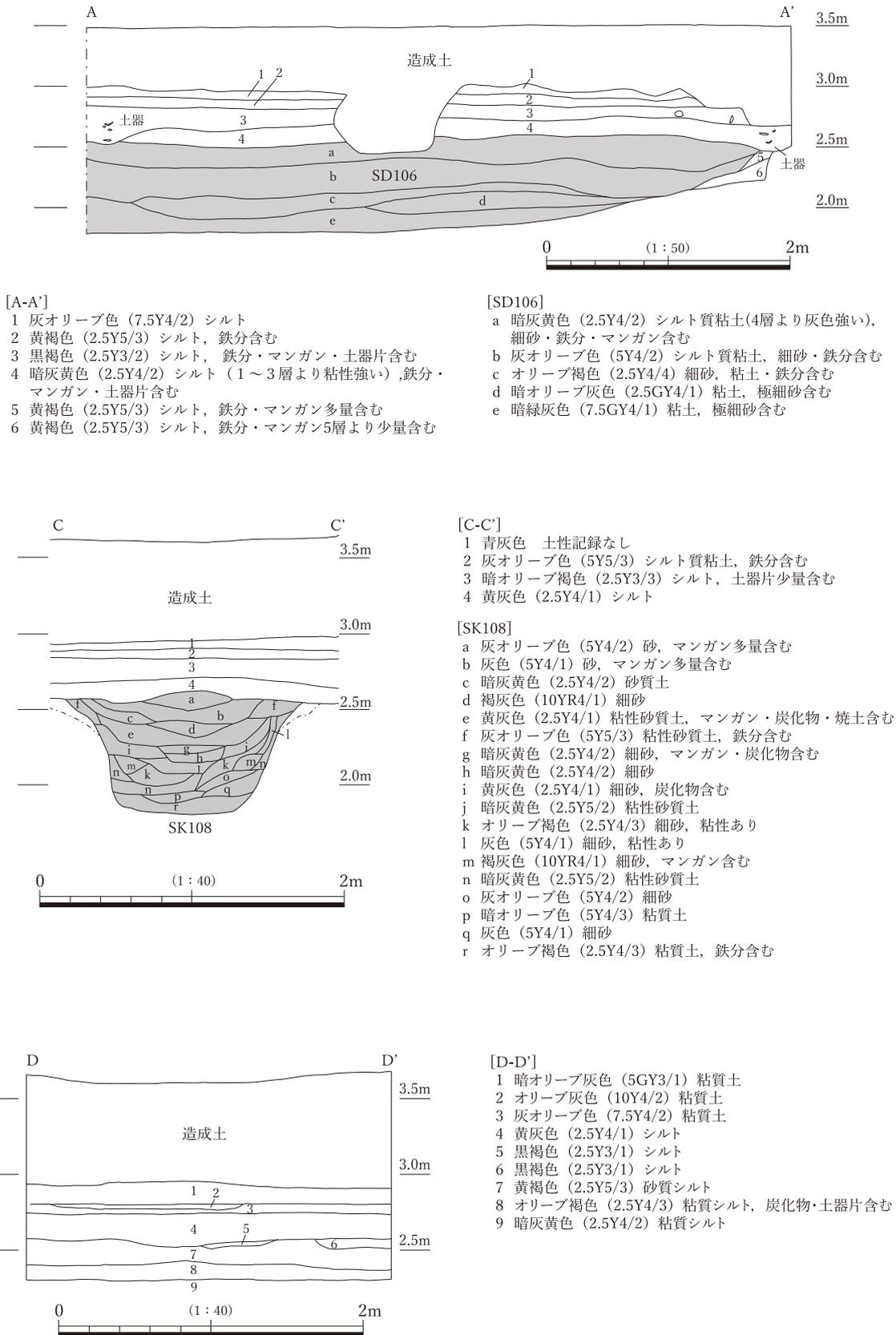


図 2-15 南側溝地点土層断面図 (1)

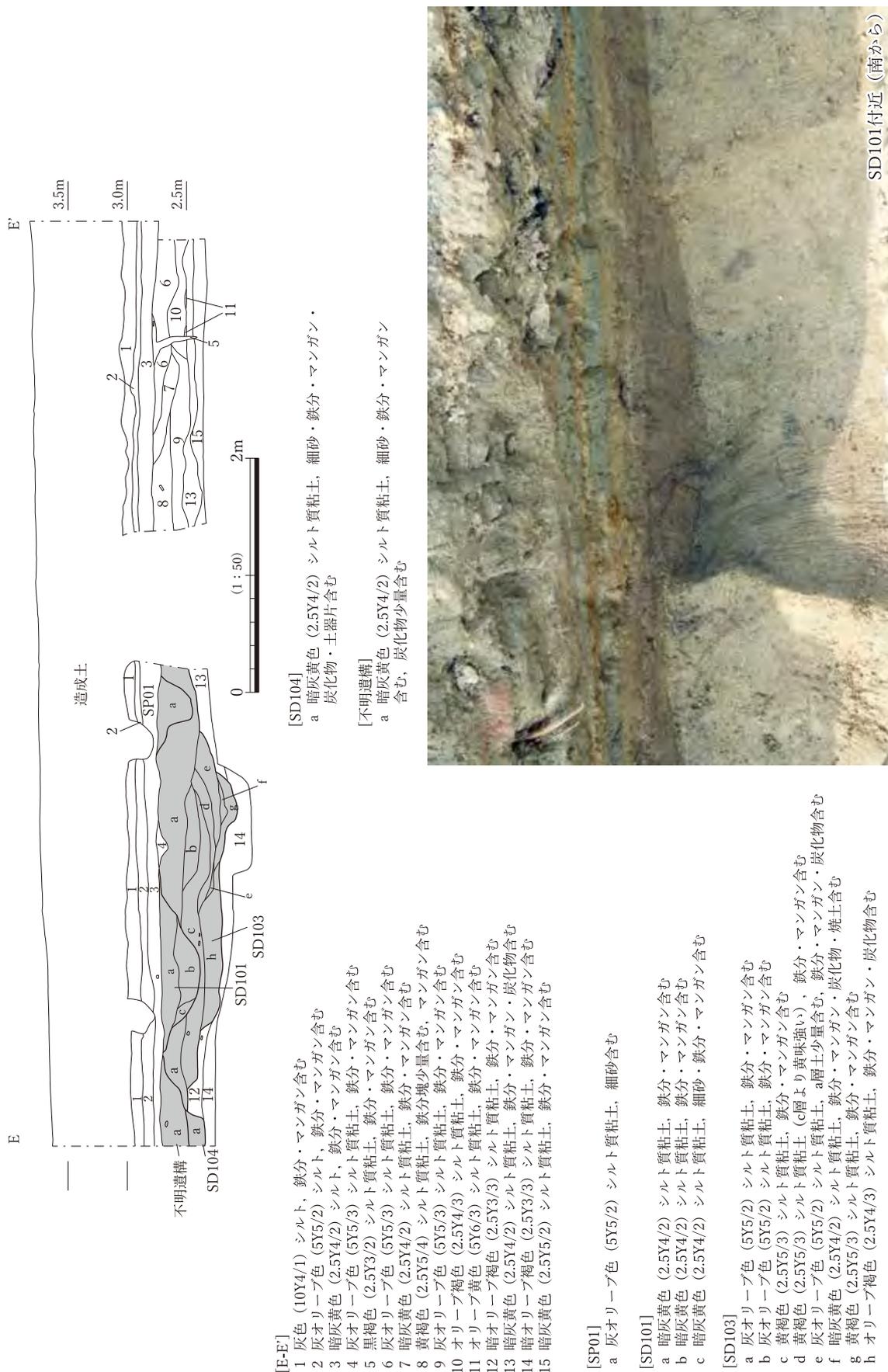


図 2-16 南側溝地点土層断面図 (2)

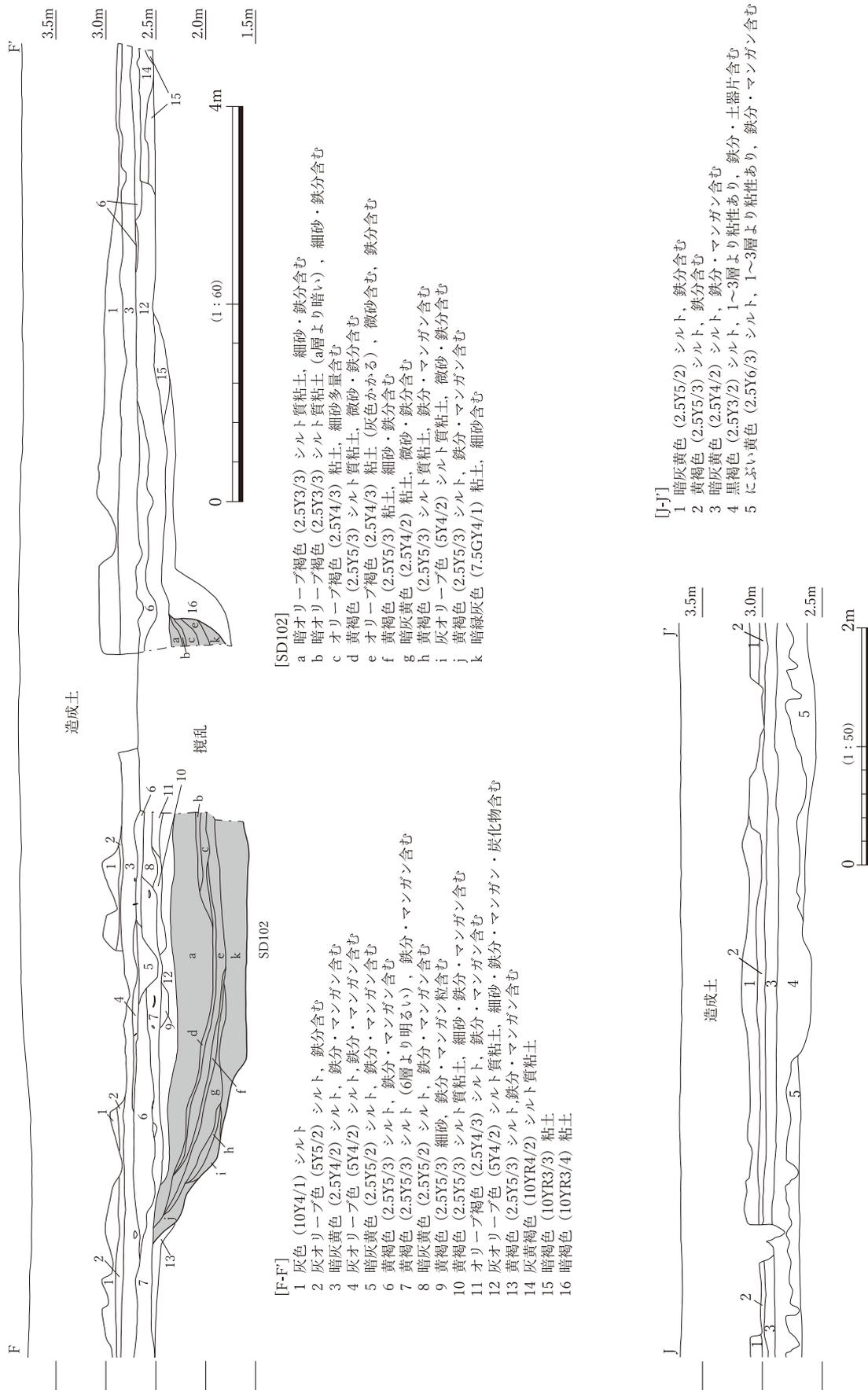


図 2-17 南側溝地点土層断面図 (3)

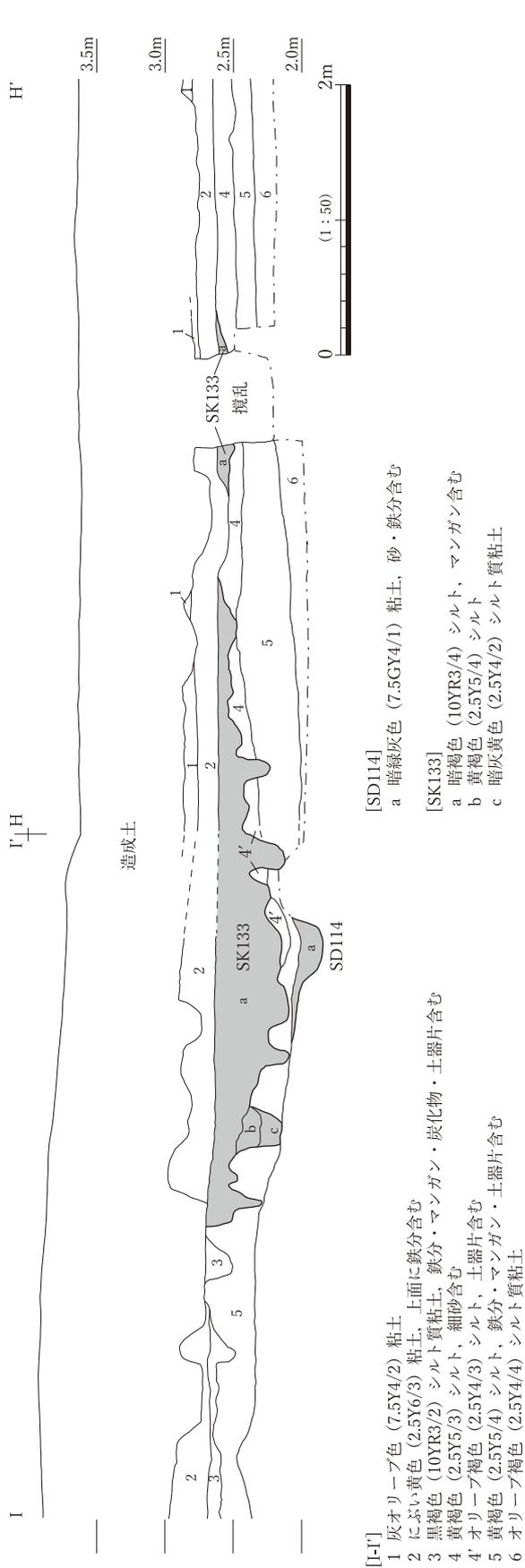


図 2-18 南側溝地点土層断面図 (4)

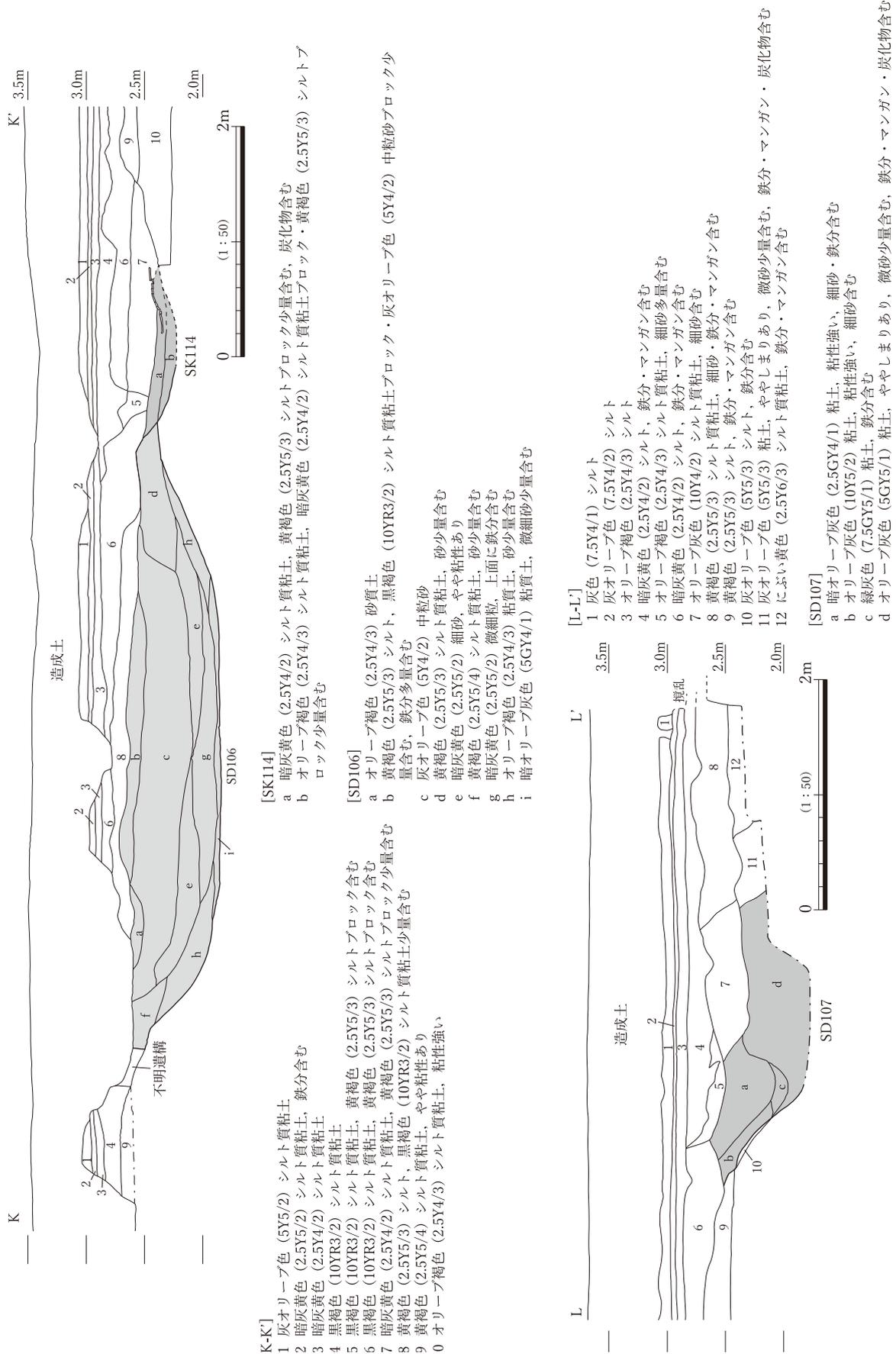


図 2-19 南側溝地点土層断面図 (5)

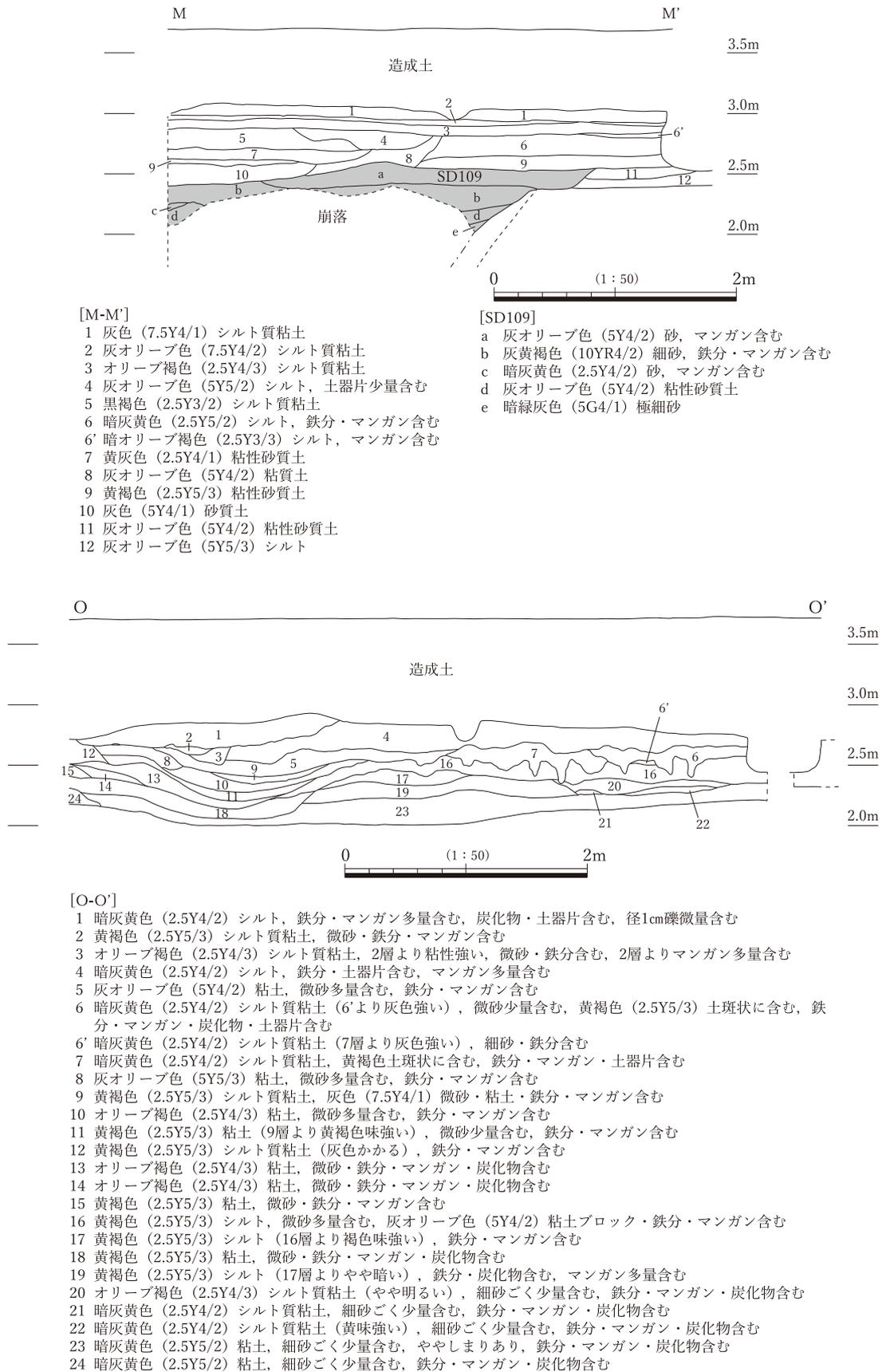


図 2-20 南側溝地点土層断面図 (6)

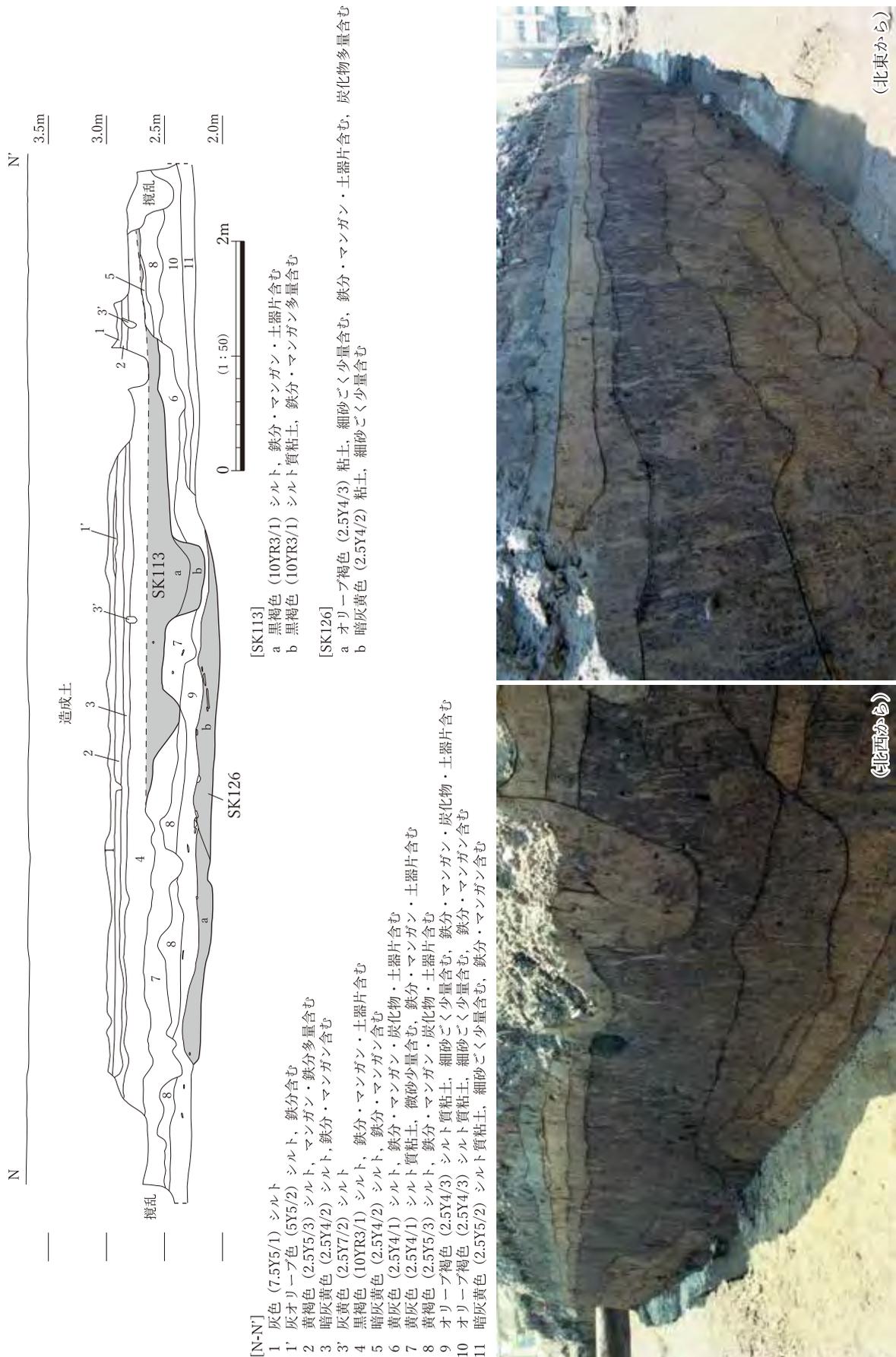
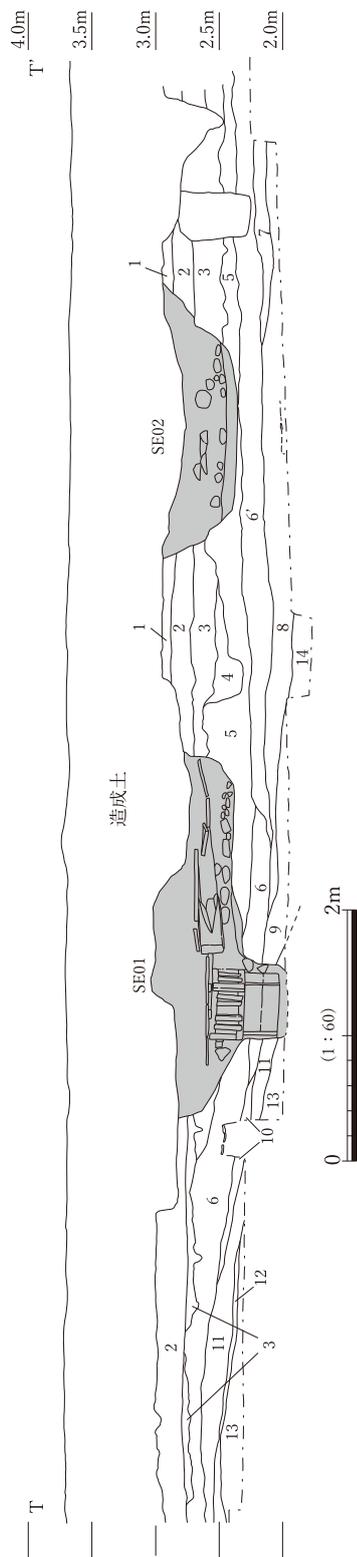


図 2-21 南側溝地点土層断面図 (7)



[T-T']

- 1 記録なし
- 2 灰オリーブ褐色 (5Y5/3) シルト質粘土
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト
- 4 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト, オリーブ色 (5Y5/4) シルトブロック含む
- 5 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト, 細砂含む
- 6 灰オリーブ褐色 (5Y5/3) シルト, バウダー状の部分が目立つ
- 6 灰オリーブ褐色 (5Y5/3) シルト, 特にバウダー状の箇所

- 7 記録なし
- 8 オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト質粘土
- 9 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 中粒砂, 細砂ラミナ状に含む
- 10 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂, 中粒砂含む
- 11 灰オリーブ褐色 (5Y5/3) シルト
- 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト, 粘性やや強い
- 13 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土
- 14 中粒砂



(南西から)



(南東から)

図 2-22 南側溝地点土層断面図 (8)

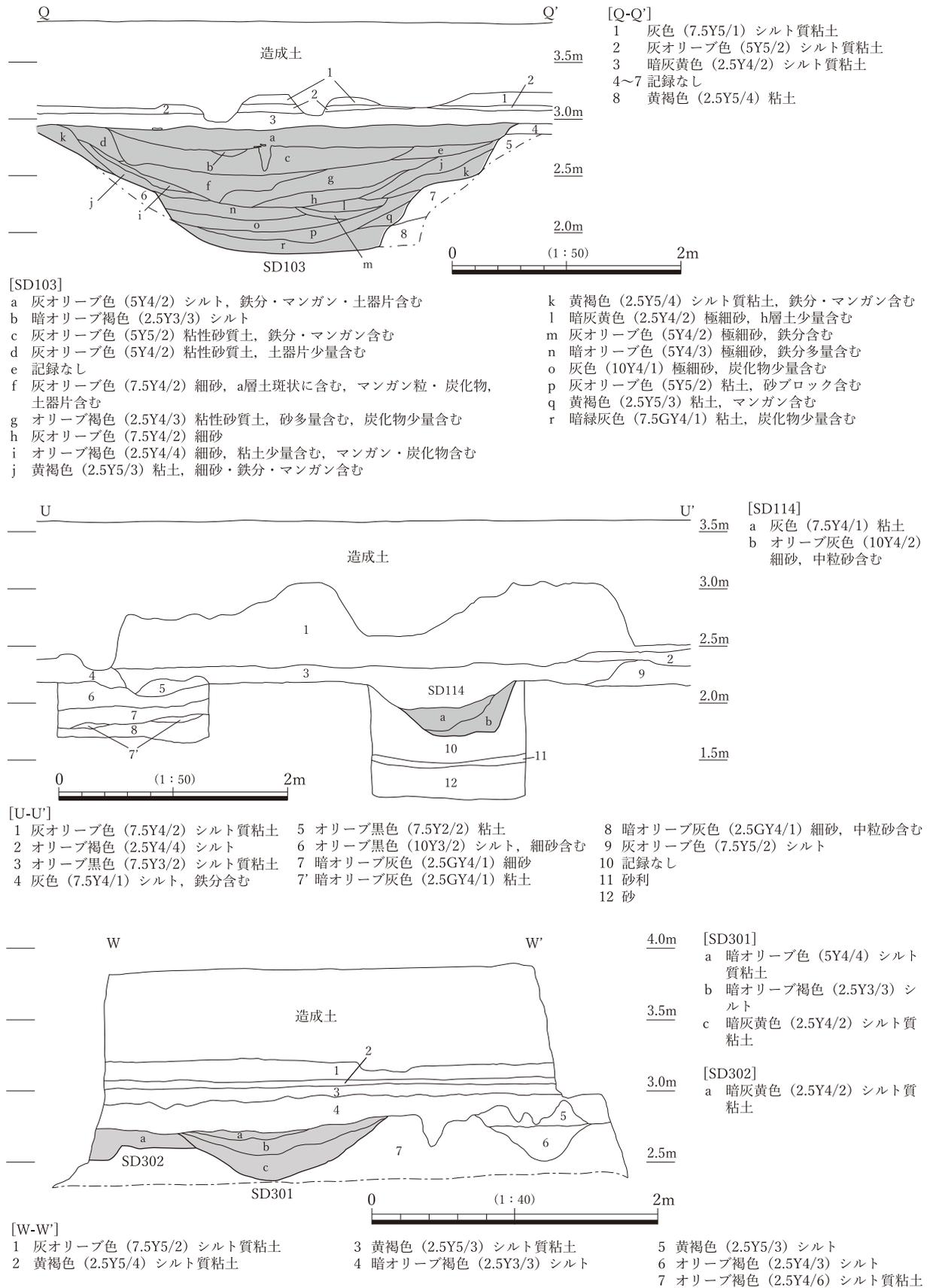


図 2-23 南側溝地点土層断面図 (9)



图 2-24 南侧溝地点土层断面写真 (1)



図 2-25 南側溝地点土層断面写真 (2)



図 2-26 南側溝地点土層断面写真 (3)

周辺地点での層位学的所見（中村 2000 ほか）をふまえると、3層が弥生時代前期末・中期初頭～中世の土壤化層（黒褐色土層）、4層が弥生時代前期末・中期初頭の洪水起源砂層（黄褐色シルト層）、5層が弥生時代前期前葉～中葉に属する遺構の基盤層である暗褐色粘質土層とみなせる。調査にあたっては、3層上面を第1遺構面、4層上面を第2遺構面、5層上面を第3遺構面として、遺構を検出した。

4. 遺 構

A 排水管地点第1・2遺構面

(1) 溝

SD01 (図 2-9・27)

X950-955・Y1050-1055 と X950-955・Y1055-1060 の二か所で検出された溝である。検出面の高さは標高 2.55 m で、東西方向に走る。最大幅 0.4 m、深さ 0.3 m を測り、長さは 6 m 以上と推定される。埋土は B-B' 断面で 3 層確認されており、a 層は暗オリーブ褐色シルト、b 層は暗灰黄色シルト質粘土、c 層はオリーブ褐色シルト質粘土からなる。遺物は、このうちの b 層より出土しており、突帯文土器、弥生時代 I 様式の壺・甕形土器の小片がある。本遺構の所属時期は検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SD02 (図 2-27)

X955-960・Y1050-1055 で検出された溝である。黄褐色シルト層の上面で検出され、検出面の高さは標高約 2.7 m である。東西方向に走り、長さ 1.3 m、幅 0.2 m を測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は検出層位からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

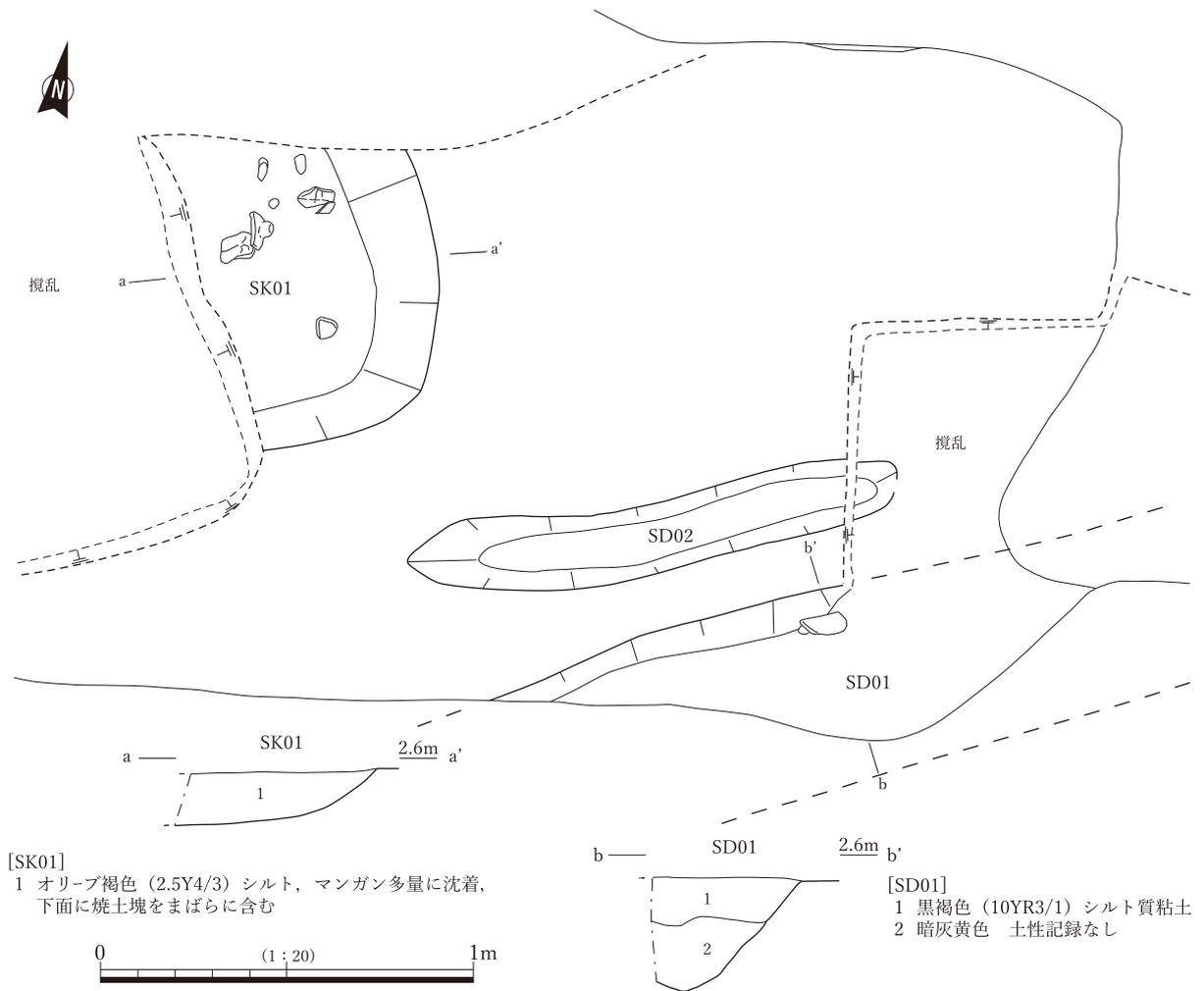


図 2-27 SD01・SD02・SK01

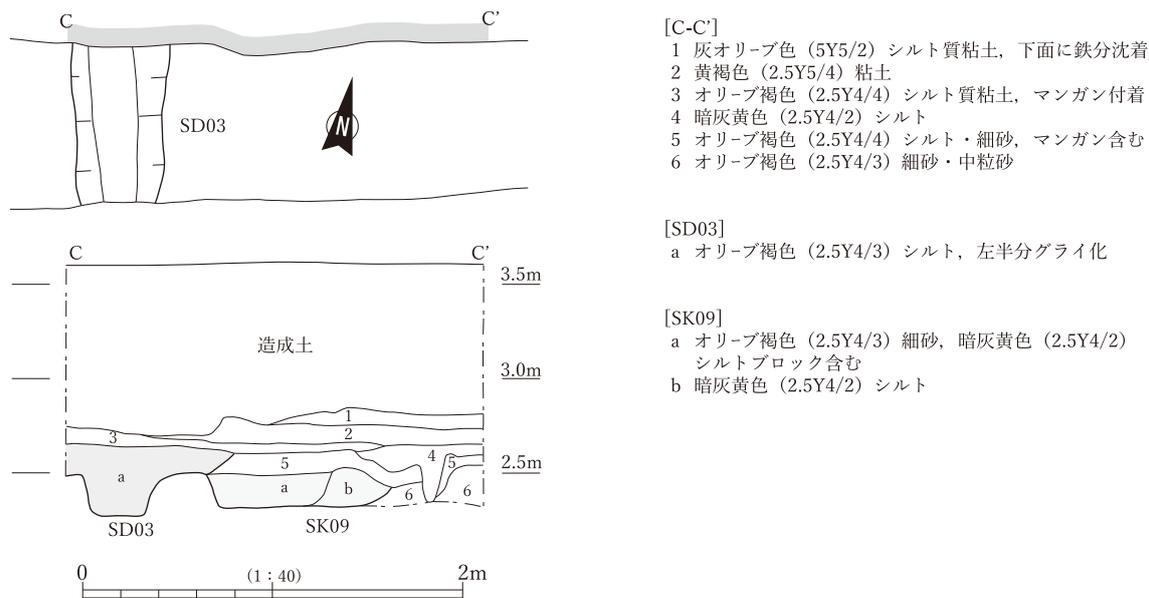


図 2-28 SD03

SD03 (図 2-10・28)

X955-960・Y1040-1055 で検出された溝である。C-C' 断面では、検出面の高さは標高約 2.6 m で、黄褐色シルト層に該当する 5 層の上面で確認されている。南北方向に 0.9 m 分を検出し、最大幅 0.5 m、深さ 0.4 m を測る。断面は U 字形を呈している。埋土はオリーブ褐色シルトの 1 層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SD44 (図 2-12・29)

X985-990・Y1010-1015 で検出された溝である。I-I' 断面では 6 層上面で検出され、上部に 4 層が堆積していた。北東-南西方向に 1.5 m 分を検出し、幅 0.9 m を測る。断面形は V 字形を呈し、深さ 0.5 m を測る。埋土は黒褐色シルト質粘土の 2 層からなる。内部から出土した弥生土器は、いずれも小片で、I 様式、V~VI 様式に該当する。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代後期~終末であろうか。

SD46 (図 2-12・29)

X985-990・Y1010-1015 で検出された溝である。I-I' 断面では 6 層上面で検出され、上部に 4 層が堆積していた。東西方向に 1.3 m 分を検出し、幅 0.6 m を測る。断面形は箱形を呈し、深さ 0.3 m を測る。埋土は暗灰黄色シルト質粘土の 1 層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SD59 (図 2-12・29)

X980-985・Y1010-1015 で検出された溝である。I-I' 断面では 5 層上面で検出され、上部に 2 層が堆積していた。東西方向に 1.2 m 分を検出し、幅 3.5 m、深さ 0.5 m を測る。東側に位置する東側溝 1 地点でも、本遺構の続きが確認された。内部からは弥生土器の破片が出土した。これらのうち、細かな時期を確定できるものには、I-1 様式の壺、I 様式の甕がある。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、古代~中世であろうか。

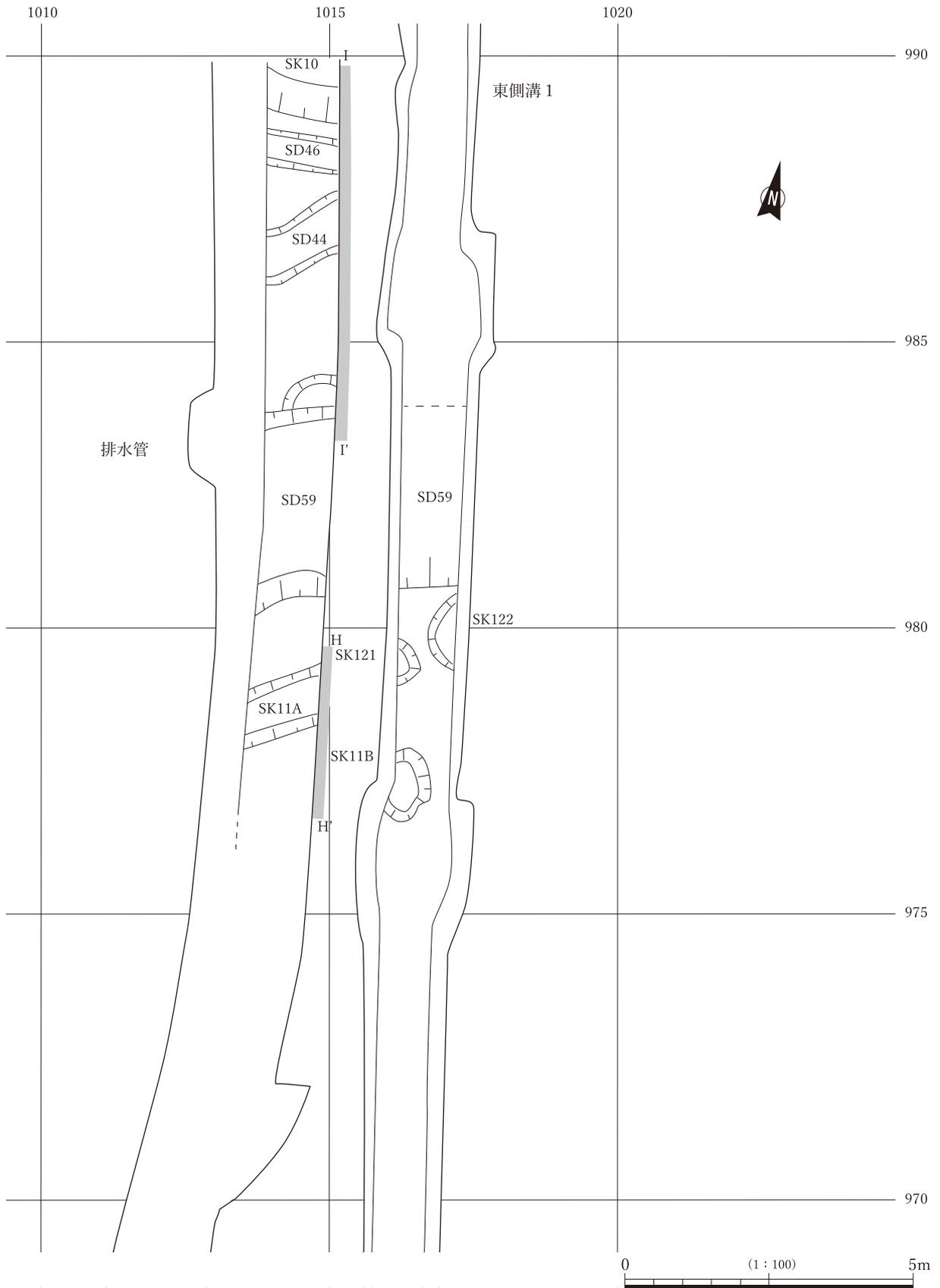


図 2-29 排水管・東側溝 1 地点北西部の遺構

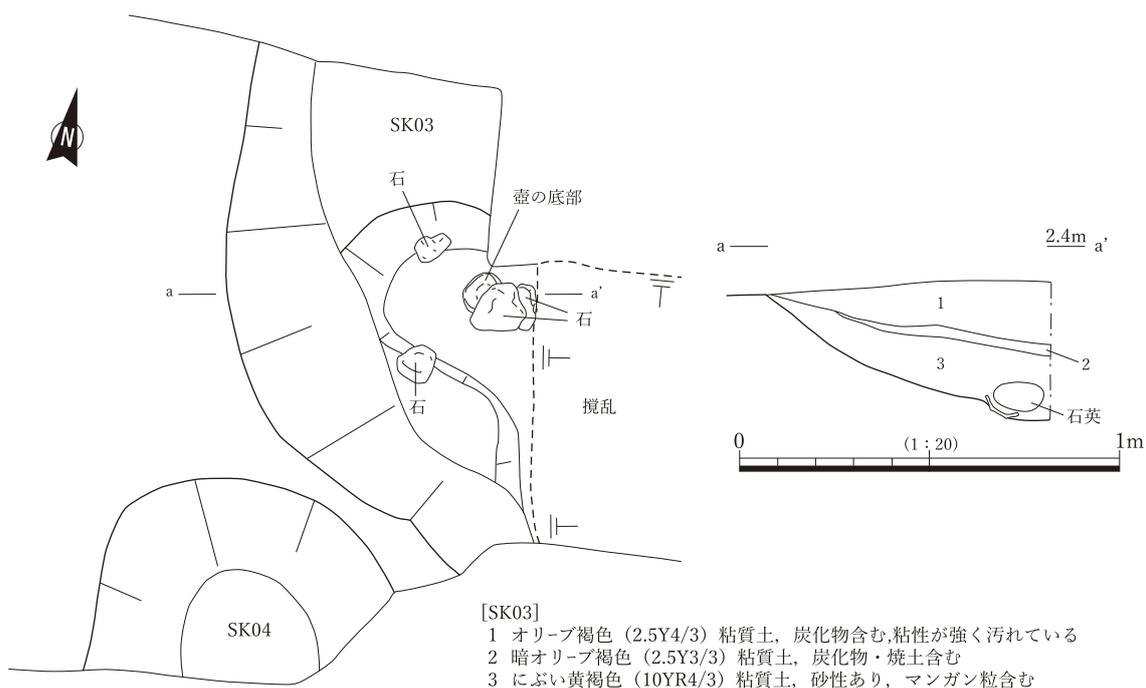


図 2-30 SK03・SK04

(2) 土坑

SK01 (図 2-27)

X955-960・Y1050-1055 で検出された土坑である。北側と西側は大きく破壊され、平面形を正確に知ることにはできないが、隅丸方形であろうか。南北残存長 0.85 m, 東西残存長 0.75 m, 深さ 0.15 m を測る。埋土はオリーブ褐色シルトの 1 層からなる。遺物は I-1・2 様式の弥生土器・壺の小片 2 点と古代の須恵器・壺 1 点が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、古代と判断される。

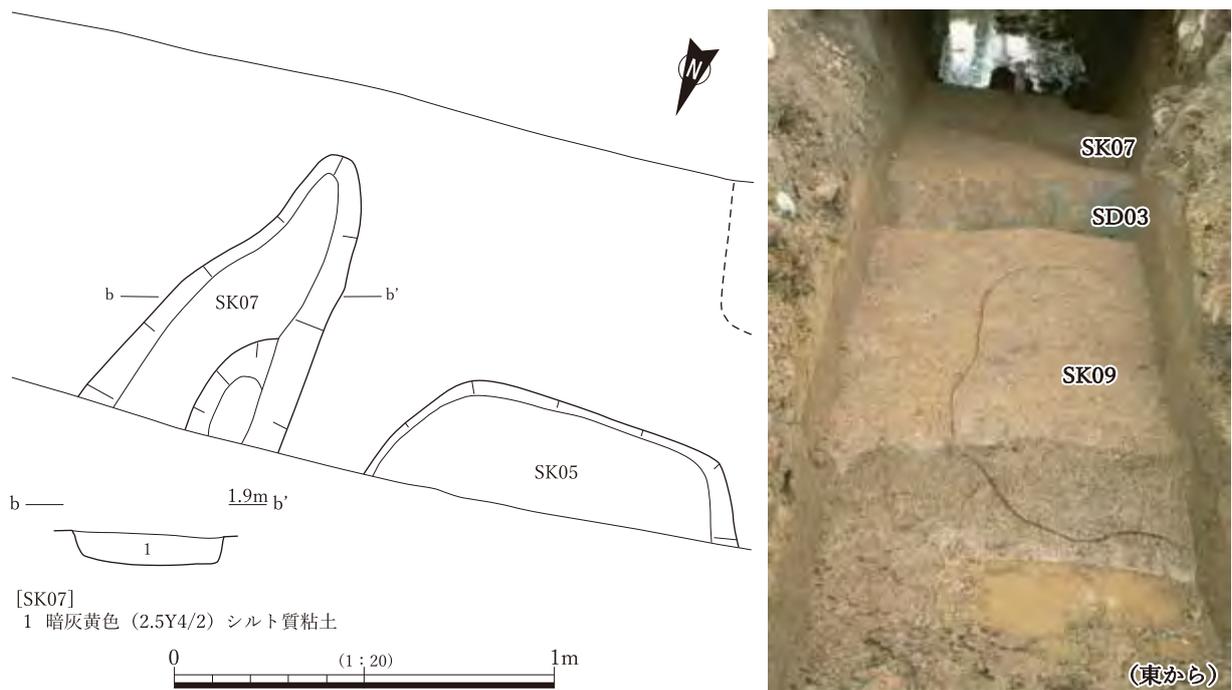


図 2-31 SK05・SK07

SK03 (図 2-30)

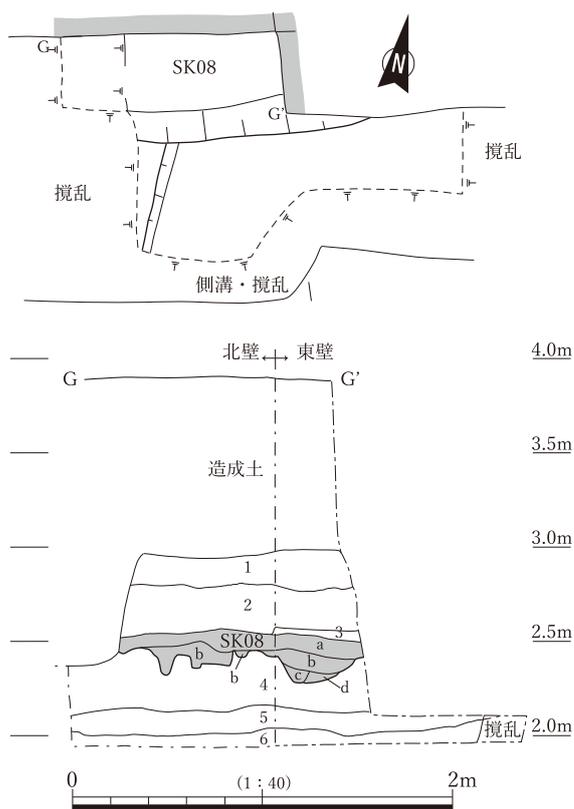
X950-960・Y1050-1055 で検出された土坑である。遺構の東側は攪乱を受け、北側は調査区外までのびて未検出であることから、平面形全体は把握できない。南北長 1.3 m 分、東西長 0.8 m 分が検出された。底面で南北長 0.9 m、東西長 0.5 m の不整形な窪みが検出されており、遺構は二段掘り状を呈している。断面はレンズ形になるかと思われ、深さ 0.35 m を測る。埋土は、オリーブ褐色粘質土、暗オリーブ褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土の 3 層からなる。遺物は最下層から弥生土器の底部が、10～15 cm 大の石数個とともに出土した。そのほか、弥生土器・甕の破片、底部 2 点も出土した。甕は弥生時代 I-3・4 様式に該当する。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK04 (図 2-9・30)

X950-960・Y1050-1055 で検出された土坑である。B-B' 断面で黄褐色シルト層に該当する 5・6 層を切ってつくられており、検出面の高さは標高約 2.35 m である。上部は SD01 により切られ、南側は調査区外までのびている。平面形は円形になるうか。南北長 0.5 m、東西長 0.8 m を測る。断面形はレンズ形を呈し、深さは 0.2 m を測る。埋土は、オリーブ褐色シルト、黒色炭化物層、暗オリーブ褐色中粒砂の 3 層からなる。出土遺物は弥生土器の壺片 2 点を図化し得た。そのうちの 1 点は I-1 様式に該当する。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期であろうか。

SK05 (図 2-10・31)

X955-960・Y1040-1045 で検出された土坑である。D-D' 断面では、黄褐色シルト層に該当する 5 層の上面で検出され、上部に黒褐色土層に該当する 3 層が堆積していた。検出面の高さは標高約 2.6 m で、深さ 0.5 m を測る。断面形は腕形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂の 1 層からなる。遺物は I 様式と思われる弥生土器・壺の小片 1 点が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥



[G-G']

- 1 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト質粘土
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土, やや粘性強い, 鉄分含む
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト, マンガンを非常に多く含む
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト・細砂・粘土, 4層より粘性強い
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト・細砂, 下面是粘性極めて強い

[SK08]

- a 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土
- b 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土
- c b層土にd層土が混入
- d 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト, マンガン含む

図 2-32 SK08

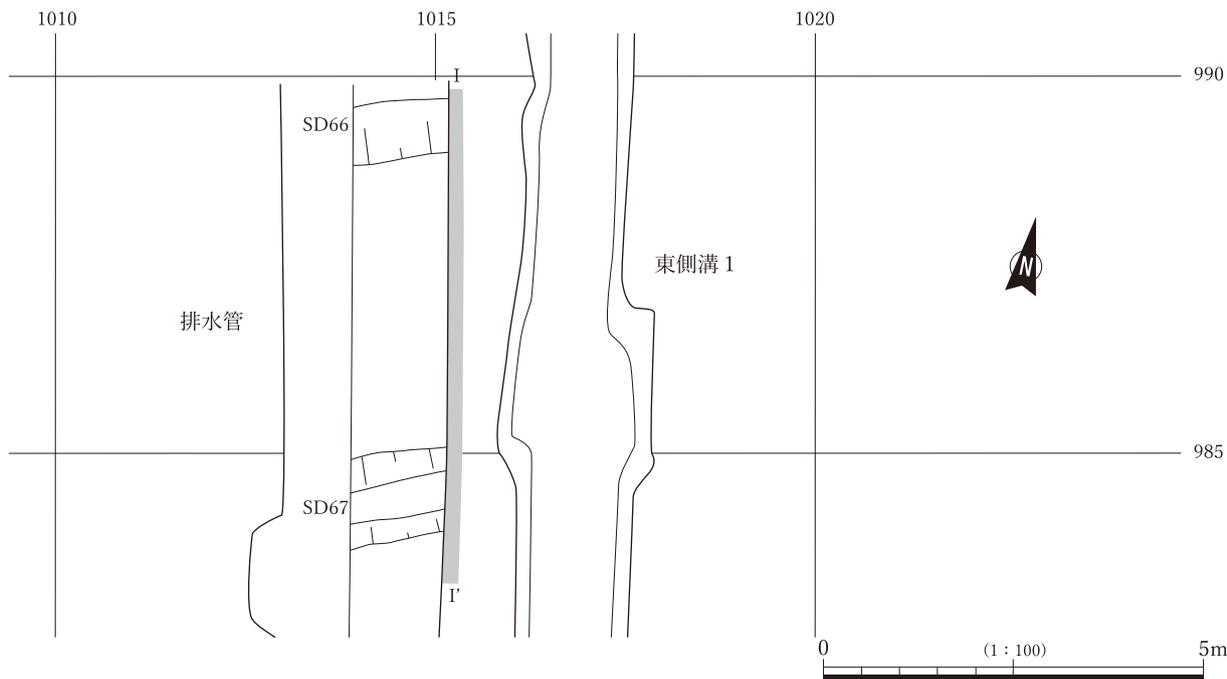


図 2-33 SD66・SD67

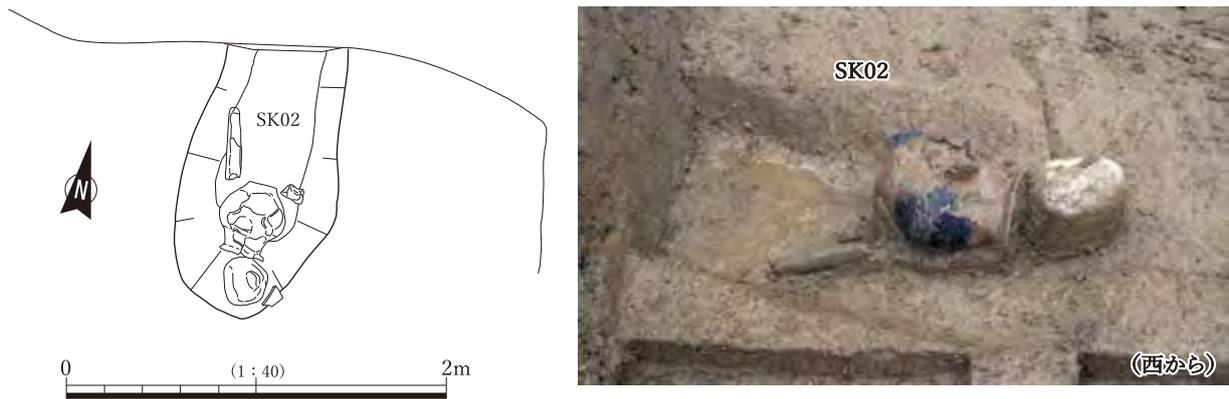


図 2-34 SK02

生時代前期末・中期初頭であろうか。

SK07（図 2-31）

X955-960・Y1035-1040 で検出された土坑である。平面形は南端部が角張った不整形を呈する。検出部位で南北長 0.8 m，東西長 0.5 m，深さ 0.1 m を測る。断面は浅い箱形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトの 1 層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は，検出層位からみて，弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SK08（図 2-32）

X955-960・Y1030-1035 で検出された土坑である。黄褐色シルト層に該当する 4 層上面で検出され，検出面の高さは標高約 2.5 m である。検出部位で南北長 0.6 m，東西長 1.2 m，深さ 0.25 m を測る。G-G' 断面において，断面は東壁でレンズ形，北壁で不整形を呈する。埋土は暗灰黄色シルト質粘土や灰オリーブ色シルトの 4 層からなる。遺物は I 様式の弥生土器・胴部の小片が 1 点出土した。本遺構の所属時期は，検出層位と出土遺物からみて，弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK10（図 2-12・29）

X985-990・Y1010-1015 で検出された土坑である。排水管地点西側の最北端に位置する。平面形は不明であるが，検出部分で南北長 1.1 m，東西長 1.2 m を測る。出土遺物には弥生土器の壺・甕があり，これは I-2～4 様式に該当する。本遺構の所属時期は，出土遺物からみて，弥生時代前期中葉～中期初頭に該当する。

SK11A（図 2-11・29）

X975-985・Y1010-1015 で検出された土坑である。H-H' 断面では，5 層の上面で検出され，検出面の高さは標高約 2.4 m である。上部に 4 層が堆積していた。平面形は部分的な検出にとどまり，不正確であるが，長軸を北東-南西方向にとる細長い隅丸長方形となろうか。検出部分で長さ 3.4 m，幅 1.0 m を測る。断面形は逆台形を呈し，深さ 0.7 m を測る。埋土は灰オリーブ色・細砂・中粒砂，暗灰黄色シルト質粘土・細砂，暗オリーブ灰色粘土・シルト，オリーブ褐色粗砂・中粒砂を基本とする 8 層からなり，自然堆積層とみられる。とくに a' 層から多くの遺物が出土した。遺物には，弥生土器の壺・甕・鉢・底部，敲石，スクレイパーがある。弥生土器は I-1～4 様式に該当する。本遺構の所属時期は，検出層位と出土遺物からみて，弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

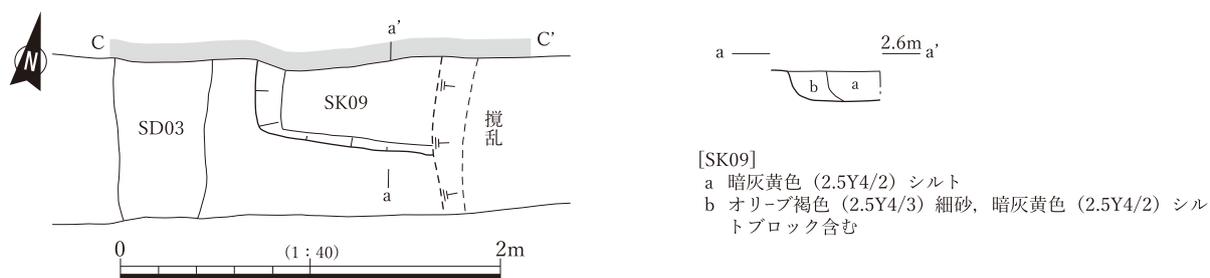


図 2-35 SK09

B 排水管地点第3遺構面

(1) 溝

SD66 (図 2-12・33)

X985-990・Y1010-1015 で検出された溝である。I-I' 断面では、10層上面で検出され、検出面の高さは標高約 1.8 m である。上部に 7 層が堆積し、SK10 に切られる。東西方向に 1.2 m 分を検出し、幅は 1.4 m 以上である。断面形は逆台形と思われ、深さは 0.7 m を測る。埋土は、オリーブ褐色シルト質粘土、暗灰黄色シルト質粘土、灰オリーブ色細砂、暗緑灰色細砂の 5 層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期前葉～中葉と判断される。

SD67 (図 2-12・33)

X980-985・Y1010-1015 で検出された溝である。I-I' 断面では、9層上面で検出され、検出面の高さは標高約 2.0 m である。上部に 7 層が堆積し、「不明遺構」に切られる。東西方向に 1.2 m 分を検出し、幅 1.2 m を測る。断面形は浅い椀形と思われ、深さ 0.4 m 以上となろうか。埋土は、オリーブ褐色シルト質粘土の 1 層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期前葉～中葉と判断される。

(2) 土坑

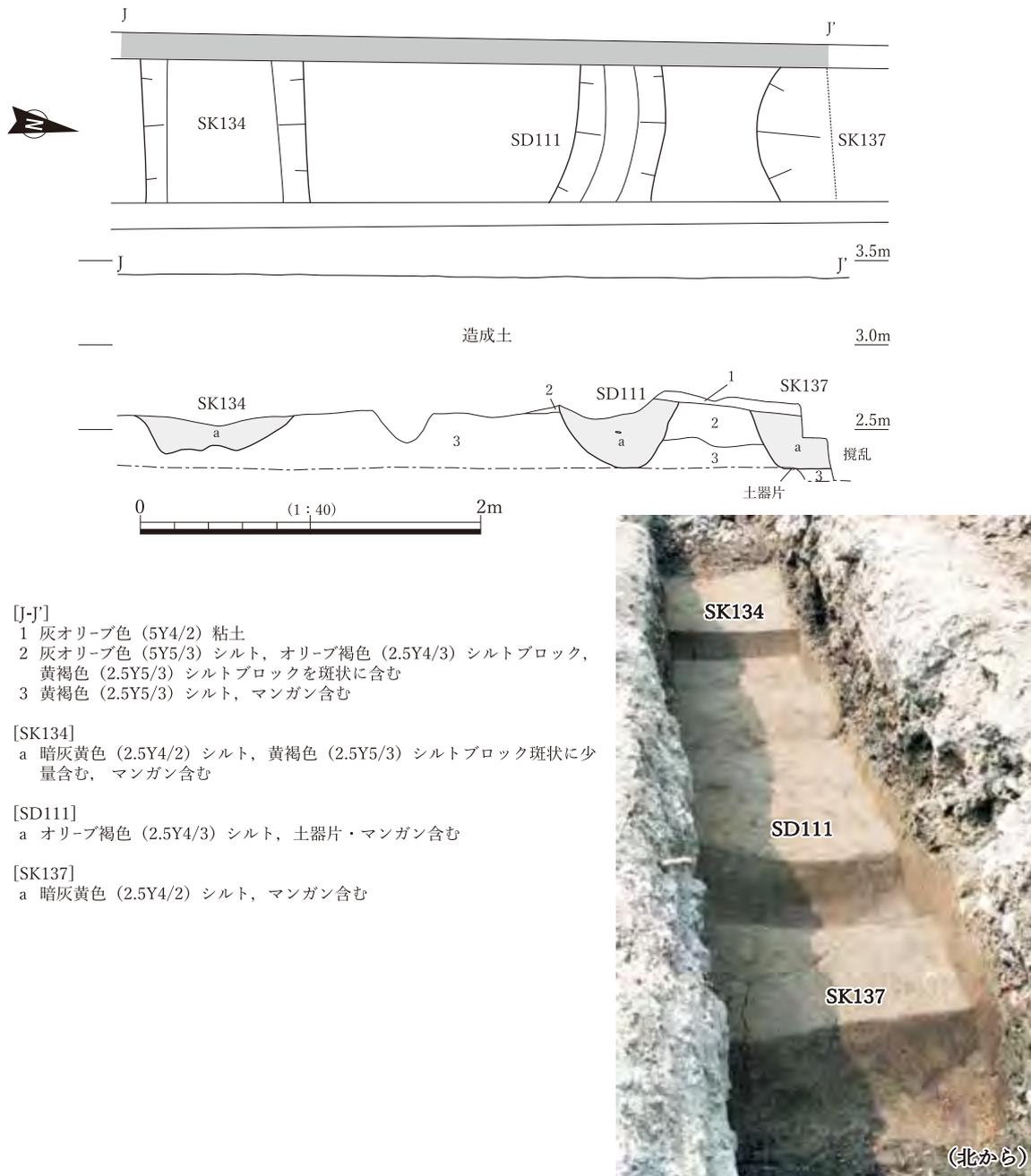


図 2-36 SD111・SK134・SK137

SK02 (図 2-34)

X955-960・Y1050-1055 で検出された土坑である。平面形は北側が未検出のため、正確にはわからないが、長楕円形に近い隅丸方形になろうか。最大幅は 0.42 m を測り、長さは 0.72 m 以上になる。調査日誌には、黄褐色シルト層の掘り下げ時に土器が出土し、その周辺で炭化物と焼土塊が検出されたとある。土坑の南側からは、完形の弥生土器・壺が、10 cm 大の円礫、長さ約 20 cm の棒状石とともに出土した。出土遺物にはこのほかに壺の小片 2 点があるが、本遺構への帰属が確実な遺物は完形の壺であろう。完形壺は弥生時代 I - 1 様式に該当する。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期前葉と判断される。墓の可能性はある。

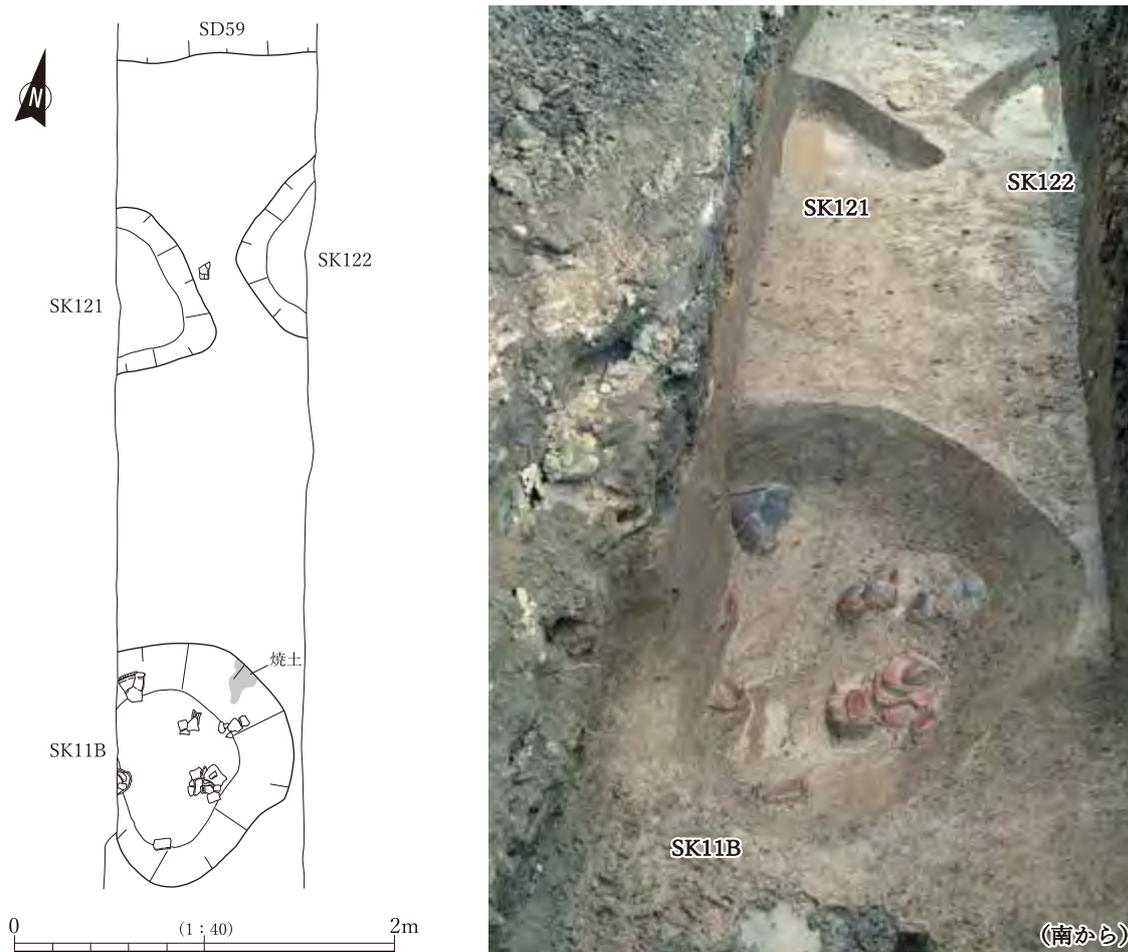


図 2-37 SD59・SK11B・SK121・SK122

SK09 (図 2-35)

X955-960・Y1040-1050 で検出された土坑である。遺構の東側が攪乱を受けているが、平面形は長方形になるかと思われ、南北長 0.5 m 以上、東西長 0.95 m を測る。断面形は箱形になるうか。深さは 0.16 m を測る。埋土は、オリーブ褐色細砂、暗灰黄色シルトの 2 層からなる。内部からは I 様式かと思われる弥生土器・口縁部の小片が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期と判断される。墓の可能性はある。

C 東側溝 1 地点

(1) 溝

SD59 (図 2-37)

X980-985・Y1015-1020 で検出された溝である。東西方向に 1.1 m 分を検出した。北側の肩が確認できなかったが、東側の排水管地点で確認された本遺構の続きの幅からみて、幅 3.5 m 程度と推定される。内部からは、弥生土器の壺・甕・底部の破片が出土した。このうち、壺 3 点は I-3・4 様式に、甕 1 点は I 様式に該当する。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、古代～中世であろうか。

SD111 (図 2-36)

X950-955・Y1015-1020 で検出された溝である。J-J' 断面では、2層上面で検出され、検出面の高さは標高約 2.6 m である。上部に1層が堆積していた。東西方向に約 0.8m 分を検出し、幅 0.6m を測る。断面形はU字形を呈し、深さ 0.4 m を測る。埋土は、オリーブ褐色シルトの1層からなる。内部からは、弥生土器の甕が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK134 (図 2-36)

X945-950・Y1015-1020 で検出された溝である。J-J' 断面では、検出面の高さは標高約 2.6 m で、上部に近世の水田層とみられる1層が堆積していた。東西方向に 0.9 m 分を検出し、幅 1.0 m を測る。東側溝2地点で確認された SD112 と同一遺構と考えられる。断面形はやや不整なU字形を呈し、深さ 0.3 m を測る。埋土は暗灰黄色シルトの1層からなる。内部からは、弥生土器の小片が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末以降と判断される。

(2) 土坑

SK11B (図 2-37)

X975-980・Y1015-1020 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.3 m で、西側の一部が未検出であるものの、おおむね不整な円形を呈するとみてよい。南北長 1.3 m、東西長 0.9 m を測る。埋土からは、I-1～4 様式に該当する弥生土器の壺・甕が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK121 (図 2-37)

X975-980・Y1015-1020 で検出された土坑である。検出面は標高約 2.25 m で、平面形は部分的な検出にとどまり、不正確であるが、隅丸方形であろうか。南北長 0.9 m、東西長 0.5 m を測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期と思われるが、確定しがたい。

SK122 (図 2-37)

X975-985・Y1015-1020 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.2m で、平面形は部分的な検出にとどまり、不正確であるが、隅丸長方形であろうか。南北長 1.0 m、東西長 0.4 m を測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末以降と判断される。

SK137 (図 2-36)

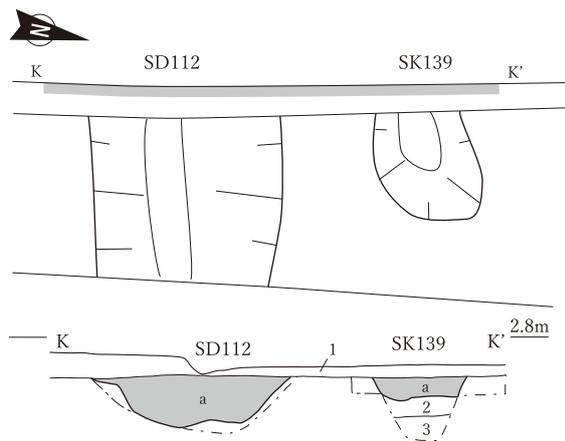
X950-955・Y1015-1020 で検出された土坑である。J-J' 断面では、2層上面で検出され、検出面の高さは標高約 2.6 m である。上部に1層が堆積していた。南側の一部だけの検出にとどまり、平面形は不明である。検出部位で南北長 0.4 m を測る。断面形は逆台形かと思われ、深さ 0.3 m を測る。埋土は暗灰黄色シルトの1層からなる。埋土には土器片が含まれていたが、図示し得るものはない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末以降と判断される。

D 東側溝2地点

(1) 溝

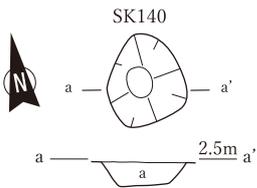
SD112 (図 2-38)

X945-955・Y1020-1025 で検出された溝である。K-K' 断面では、2層上面で検出され、検出面の高さは標高約 2.6 m である。東西方向に 0.8 m 分を検出し、幅 1.0 m を測る。断面形はやや不整な皿形を呈し、深さ 0.2 m を測る。東側溝1地点で検出された SK134 と同一遺構と考えられる。埋土は黒褐色

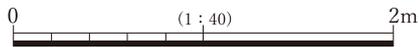


[SD112]
 a 黒褐色 (10YR3/2) シルト, 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルトブロック斑状に少量含む, マンガン含む

[SK139]
 a SD112のa層に同じ



[SK140]
 a 黒褐色 (10YR3/2) シルト, オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルトブロック斑状に少量含む, マンガン含む



[K-K']

- 1 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト・粘土
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト, 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト
 ロックをほぼ半分の割合で斑状に含む, マンガン含む
- 3 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト, 細砂混じりの粘質土, マンガン含む



図 2-38 SD112・SK139・SK140

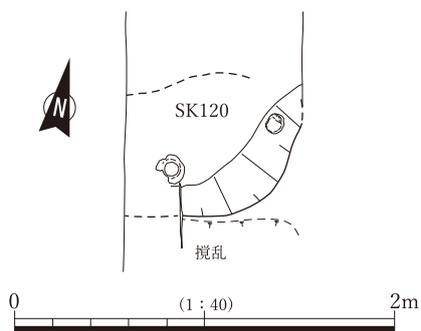


図 2-39 SK120

シルトの1層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末以降と判断される。

(2) 土坑

SK120 (図 2-39)

X965-975・Y1020-1025 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.45 m である。東南部のみ残存していた。平面形は不明であり、東西長 0.9 m を測る。内部から弥生土器の底部が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期であろうか。

SK138 (図 2-2)

X945-950・Y1020-1025 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.55m で、平面形は直径 0.2 m の不整形円形を呈する。内部から石器 1 点出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期であろうか。

SK139 (図 2-38)

X950-955・Y1020-1025 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.45 m である。上部に 1 層が堆積していた。西側の一部が未検出であるが、平面形はおおむね不整形な長楕円形とみてよい。検出部位で南北長 0.6 m、東西長 0.6 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.1 m を測る。埋土は黒褐色シルトの 1 層からなる。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末以降と判断される。

SK140 (図 2-38)

X950-955・Y1020-1025 で検出された土坑である。黄褐色シルト層上面で検出され、検出面の高さは標高約 2.5 m である。平面形は不整形な円形を呈し、南北長 0.5 m、東西長 0.4 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.1 m を測る。埋土は黒褐色シルトの 1 層からなる。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末以降と判断される。

E 南側溝 1 地点

(1) 住居跡

SI01 (図 2-45)

X940-945・Y990-1000 で検出された住居跡である。検出面の高さは標高約 2.6 m を測る。平面形は隅丸方形になるかと思われ、検出部位で東西長 2.4 m、南北長 0.6 m、深さ 0.3m を測る。埋土は黄褐色シルト、暗灰黄色シルト質粘土、オリーブ褐色シルト質粘土の 3 層からなる。床面では、東西長 0.6 m、南北長（検出部位）0.6 m の炉跡が検出された。住居跡の内部からは、I-1（新）～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の壺・甕・底部が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

(2) 溝

SD101 (図 2-6・2-16)

X940-945・Y965-975 で検出された溝である。E-E' 断面で、検出面の高さは標高約 2.8m を測る。南北方向に 0.8 m 分を検出し、幅 1.0 m を測る。断面形はレンズ形を呈し、深さ 0.3 m を測る。埋土は暗灰黄色シルト質粘土の 3 層からなる。内部からは、I-3・4 様式の弥生土器の壺が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SD102 (図 2-17・40)

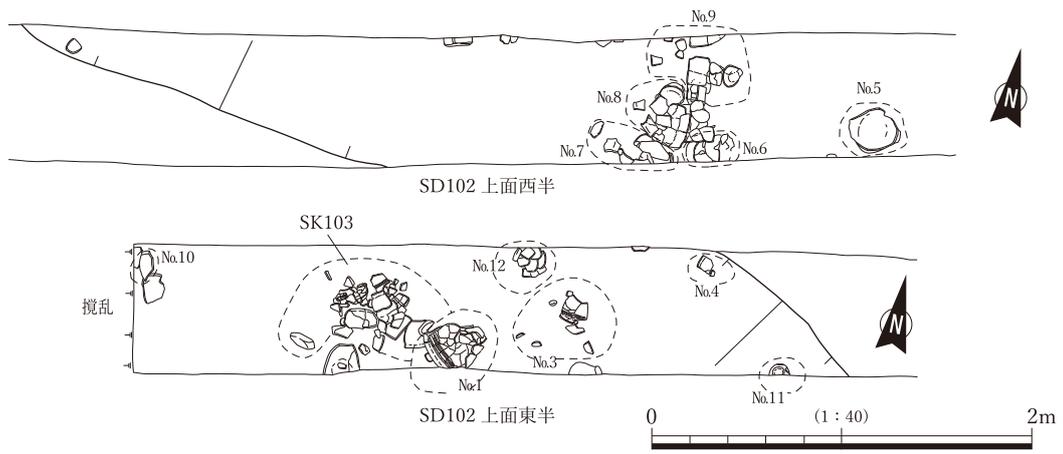


図 2-40 SD102 上面

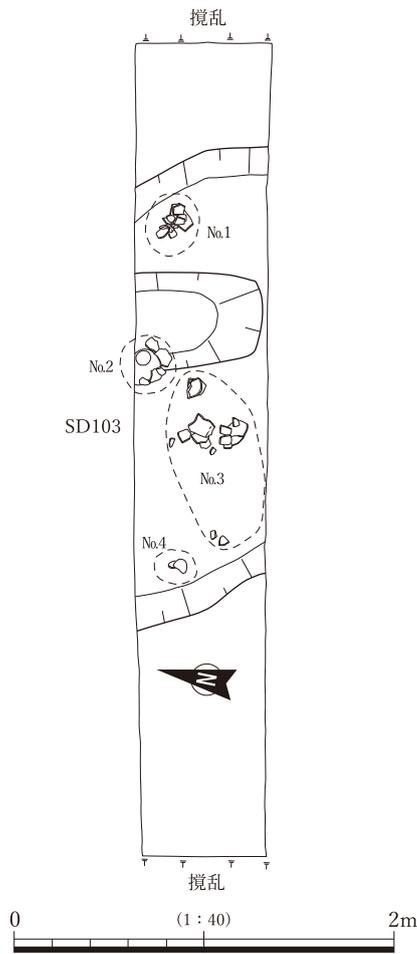
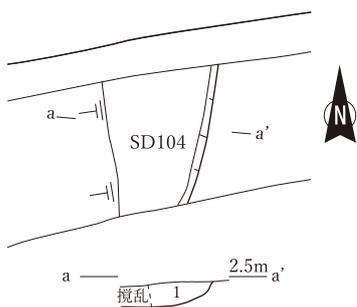


図2-41 SD103

X940-945・Y975-990で検出された溝である。南東-北西方向に2.0 m分検出し、幅8.5 mを測る。南側に位置する南側溝2地点でも、本遺構の続きが確認された。南側溝2地点での埋土は、オリーブ色系の細砂・シルトからなる上層、オリーブ色シルトと灰色中粒砂からなる中層、黄褐色・オリーブ色シルトと灰色粘土層・灰色粗砂・中粒砂の互層からなる下層に大別される。上層からは、I-1（新）～4様式の時期幅に収まる弥生土器、擬朝鮮系無文土器¹⁾の可能性ある甕、打製石斧が出土した。中層からは、I-3・4様式に該当する弥生土器が出土した。下層からは、I-1（新）・2様式に該当する弥生土器の壺が出土した。本遺構は、弥生時代前期前葉に掘削され、前期中葉から前期末～中期初頭にかけて、埋没したものと考えられる。第15・34次調査、1996年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの外溝の一部にあたる。

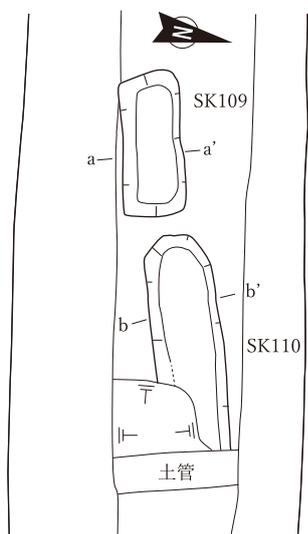
SD103 (図2-16・41・51)

X940-945・Y965-975で検出された溝である。南東-北西方向に0.7 m分検出し、幅2.2 mを測る。南側に位置する南側溝2地点でも、本遺構の続きが確認された。南側溝2地点での埋土は、灰オリーブ色系のシルト、粘性砂質土などからなる上層、オリーブ色系・黄褐色系の極細砂などからなる中層、灰オリーブ色・黄褐色・暗緑灰色の粘土からなる下層に大別される。内部からは、I-2～4様式の時期幅に収まる弥生土器が出土した。本遺構は、第15・34次調査、1996年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの内溝の一部にあたり、その調査所見によれば、弥生時代前期中葉に掘削され、前期末



[SD104]
1 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂

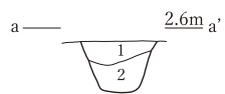
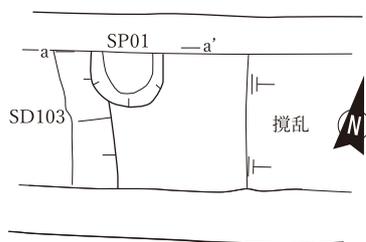
[SD104]
1 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂



[SK109]
1 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト質粘土
2 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土



[SK110]
1 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト質粘土
2 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土, 1層土含む



[SP01]
1 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質土
2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土

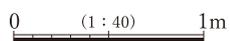
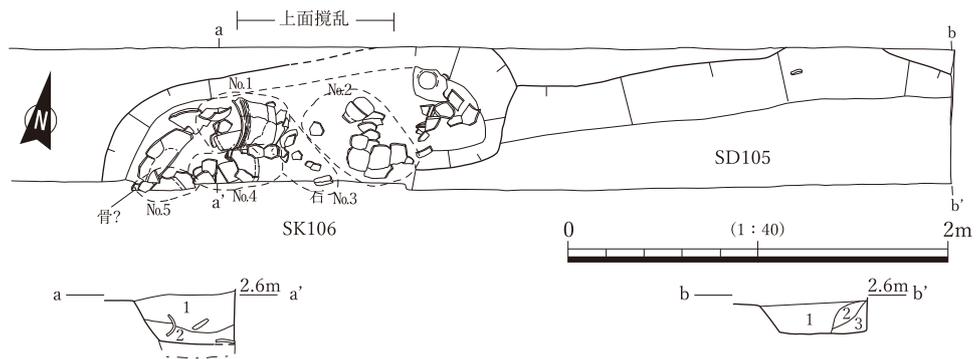


図 2-42 SD104・SK109・SK110・SP01



- [SK106]
 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト
 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト、やや粘性あり

- [SD105]
 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土
 2 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
 3 1層土に2層土が混ざる



図 2-43 SD105・SK106

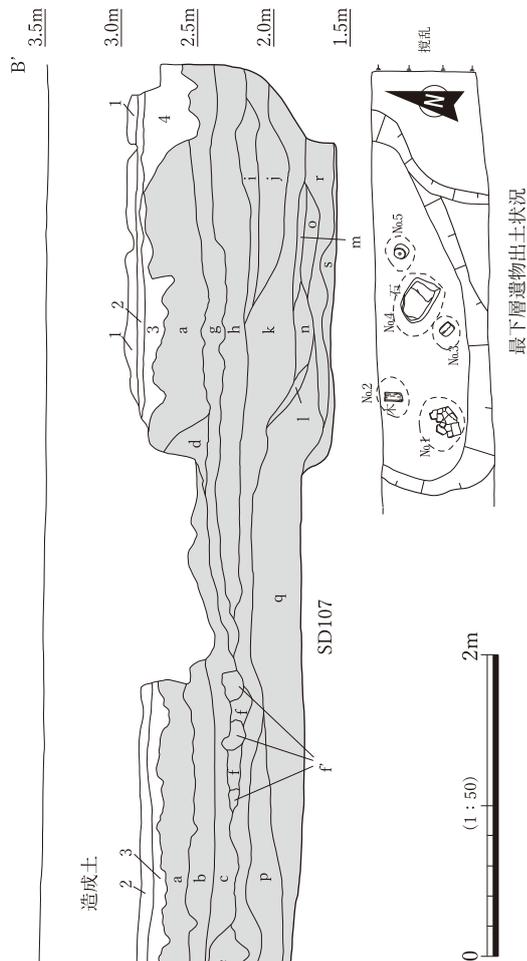


図 2-44 SD107

- [B-B']
- 1 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト
 - 2 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 鉄分含む
 - 3 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト, 鉄分・マンガン・土器片含む
 - 4 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト, 鉄分・マンガン・土器片含む
 - 5 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 鉄分・マンガン含む
 - 6 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 5層より黄み強い, 鉄分・マンガン含む
 - 7 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土, 鉄分・マンガン含む
- [SD107]
- a 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト, 鉄分・マンガン含む
 - b 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質粘土, 微砂・鉄分・マンガン含む
 - c 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土, 微砂含む, 鉄分・マンガン含む
 - d オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト, 微砂含む, 全体鉄分含む
 - e 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 微砂・シルト・鉄分・マンガン含む
 - f 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土, 細砂含む
 - g 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 鉄分・マンガン含む
 - h オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土, 微砂・鉄分・マンガン含む
 - i オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土, 鉄分・マンガン含む
 - j 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土
 - k オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土, 鉄分・マンガン含む
 - l 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土, オリーブ灰色 (10Y6/2) シルト質粘土ブロック・鉄分含む
 - m オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土, 鉄分含む
 - n 崩落のため不明
 - o 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土, 鉄分含む
 - p 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土性記録なし
 - q 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質粘土, 粘性強い, 鉄分含む
 - r 灰色 (10Y4/1) 粘土
 - s 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土, 鉄分含む

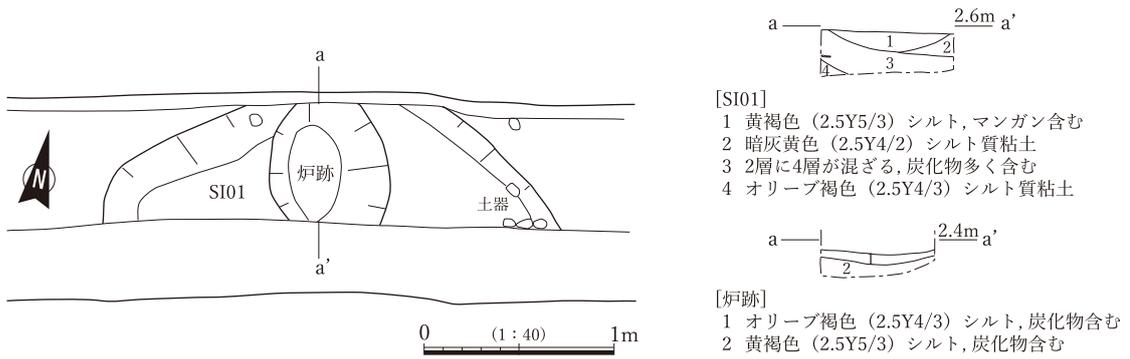


図 2-45 SI01

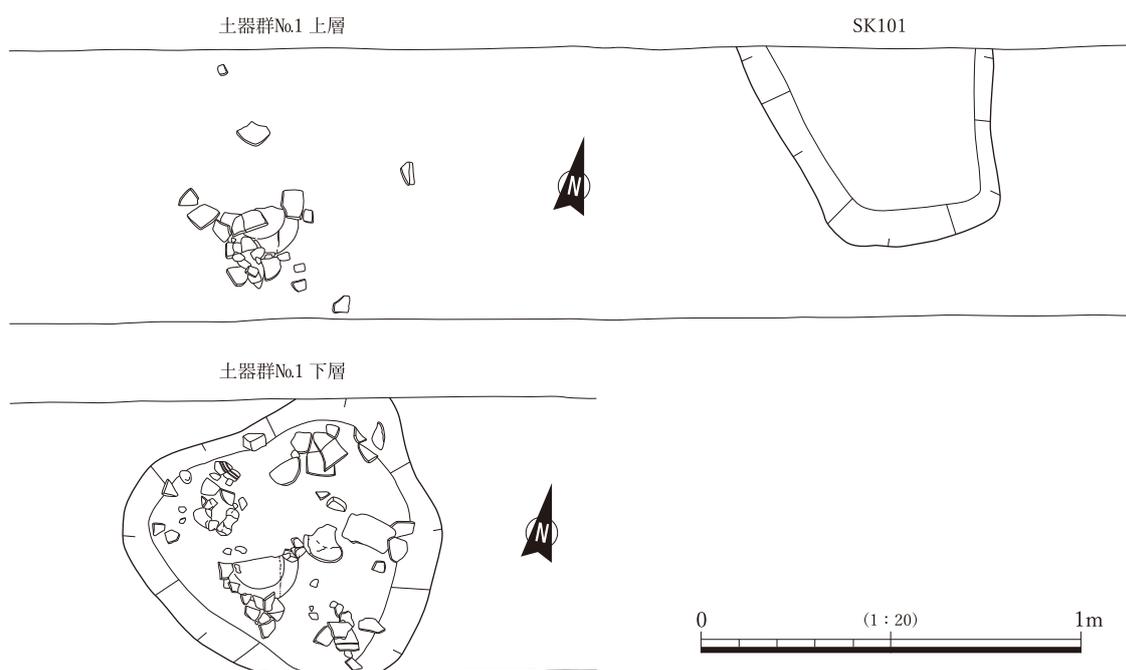


図 2-46 SK101・土器群 No.1

～中期初頭までに埋没したものと考えられる。

SD104（図2-16・42）

X940-945・Y965-970で検出された溝である。E-E'断面で、検出面の高さは標高約2.5mを測る。南北方向に0.8m分を検出したが、西側の肩が未検出であるため、幅は不明である。断面形は逆台形を呈すると思われ、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰黄色シルト質粘土の1層からなる。内部からは、I-3・4様式の弥生土器の壺と底部の破片が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SD105・106（図2-15・43）

X940-950・Y910-920で検出された溝である。検出面の高さは標高約2.5mを測る。南西-北東方向に0.7m分検出し、幅3.0mを測り、SK106に切られる。南側に位置する南側溝2地点でも、本遺構の続きが確認された。断面形は皿形を呈し、深さ0.8mを測る。埋土は、暗灰黄色・灰オリーブ色のシルト質粘土からなる上層(a・b)、オリーブ褐色細砂からなる中層(c)、暗オリーブ灰色・暗緑灰色の粘土からなる下層(d・e)に大別される。上層からは、I-1(新)～4様式の時期幅に収まる弥生土器の甕が出土した。内部からは、スクレイパーも出土した。本遺構は、第15・34次調査、1996年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの外溝の一部にあたり、その調査所見によれば、弥生時代前期前葉に掘削され、前期中葉から前期末～中期初頭にかけて、堆積したものと考えられる。

SD107（図2-19・44）

X940-945・Y920-930で検出された溝である。B-B'断面で、検出面の高さは標高約2.6mを測る。南側に位置する南側溝2地点でも、本遺構の続きが確認された。北東-南西方向に0.8m分を検出し、幅7.5mを測る。断面形は高台付坏形を呈し、深さ1.1mを測る。埋土は、黄褐色系のシルトやシルト質粘土を主体とする上層(a～k)と灰色系の粘土からなる下層(l～s)に大別される。内部からは、I-1(新)～4様式の時期幅に収まる弥生土器の甕・壺・底部の破片、砥石かと思われる石製品が出土した。本遺構は、第15・34次調査、1996年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの内溝の一部にあたる可能性がある。もしそうであるならば、本遺構は弥生時代前期中葉に掘削され、前期末～中期初頭までに埋没したものと思われる。

SD114（図2-7・18）

X940-945・Y1020-1030で検出された溝である。検出面の高さは標高約2.1mを測る。南東-北西方向に1.5m分検出し、幅1.0mを測る。南側に位置する南側溝2地点でも、本遺構の続きが確認された。断面形は不整なU字形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は、暗緑灰色粘土の1層からなる。内部からは、弥生土器の底部片が出土した。本遺構の所属時期は、南側溝2地点で出土した須恵器・土師器の破片からみて、古代であろうか。

(3) 土坑・ピット

SP01（図2-42）

X940-945・Y970-975で検出されたピットである。検出面の高さは標高約2.5mを測る。平面形は円形あるいは楕円形であろうか。検出部位で東西長0.4m、南北長0.3mを測る。断面形は鉢形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は、灰オリーブ色砂質土とオリーブ褐色粘質土の2層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SK101（図2-46）

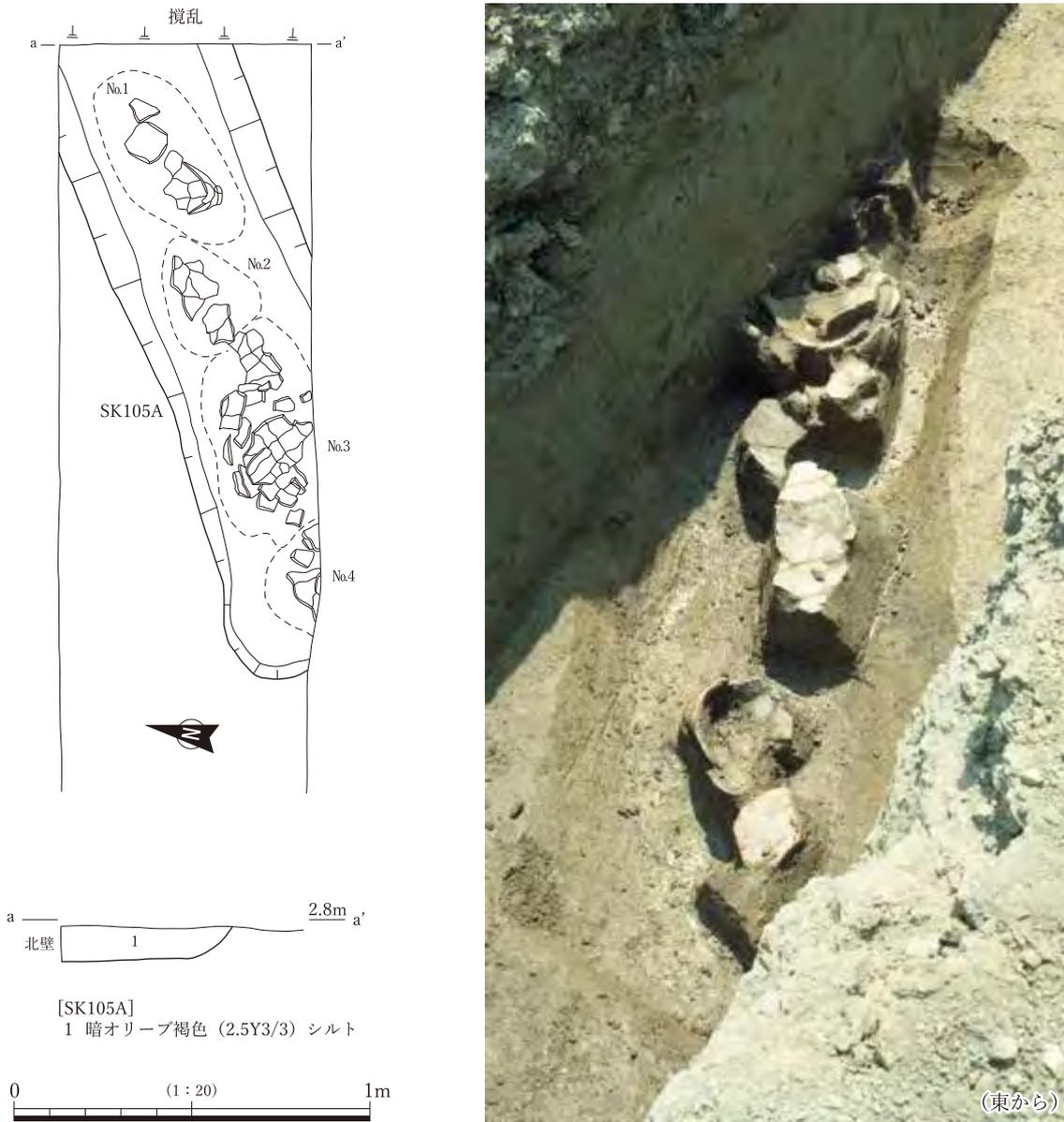


図2-48 SK105A

X940-945・Y980-985で検出された土坑である。SD102の上層で確認された。平面形は長方形であろうか。検出部位で東西長0.7m、南北長0.5mを測る。内部からは、弥生土器の底部片が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SK102 (図2-47)

X940-945・Y985-990で検出された土坑である。SD102の上層で確認された。平面形は楕円形であろうか。検出部位で東西長1.0m、南北長0.15mを測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SK103 (図2-47)

X940-945・Y985-990で検出された土坑である。検出面の高さは標高約2.7mであり、SD102の上層で確認された。平面形は楕円形であろうか。東西長0.75m、南北長(検出部位)0.5mを測る。断面形



図 2-49 SK133

はレンズ形を呈し、深さ 0.1 m 以上を測る。埋土は暗灰黄色シルト質粘土の 1 層からなる。内部からは、I-1（新）～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の壺・甕・底部の破片と砥石が出土した。弥生土器には I-3・4 様式の壺が含まれる。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK104（図 2-47）

X940-945・Y985-990 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.7 m であり、SD102 の上層で確認された。平面形は楕円形であろうか。検出部位で東西長 0.3 m、南北長 0.2 m を測る。断面形はレンズ形を呈し、深さ 0.1 m を測る。埋土は灰オリーブ色シルトの 1 層からなる。内部からは、弥生土器の底部片が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭であろうか。

SK105A（図 2-48）

X945-950・Y880-890 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.8 m を測る。平面形は長方形を呈し、検出部位で長さ 1.8m、幅 0.55m を測る。断面形は坏形と思われ、深さ 0.1 m を測る。埋土は暗オリーブ褐色シルトの 1 層からなる。内部からは、弥生土器の甕・高杯・底部の破片が出土した。そのうち高杯は脚部の破片で、V-2～4 様式の時期幅に収まる。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代後期と判断される。

SK106（図 2-43）

X940-945・Y905-910 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.6 m を測り、SD106 を切る。平面形は隅丸長方形と思われ、検出部位で長さ 2.2 m、幅 0.6 m を測る。断面形は短軸で坏形と思われ、深さ 0.25m を測る。埋土はオリーブ褐色シルトと暗灰黄色シルトの 2 層からなる。内部からは、I-3・4 様式に該当する弥生土器の壺・甕などが出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK107（図 2-5）

X940-945・Y930-935 で検出された土坑である。平面形は不明で、主軸を南北方向にとる。検出部位で東西長 1.0 m、南北長 0.8 m を測る。内部からは、I 様式と V・VI 様式に該当する弥生土器の甕、古墳時代～古代の所産と思われる須恵器の破片などが出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、古墳時代～古代と判断される。

SK108（図 2-5・15）

X940-945・Y930-935 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.6 m を測る。平面形はやや不整な円形と思われ、検出部位で東西長 1.8 m、南北長 0.7 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.75 m を測る。埋土は、灰色・黄褐色系の砂・細砂・砂質土・粘性砂質土・粘質土 18 層からなる。内部からは、弥生土器の壺・甕の破片、敲石などが出土した。図化した弥生土器 2 点のうち、甕は I-2～4 様式の時期幅に収まる。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK109（図 2-42）

X940-945・Y935-940 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.5 m を測る。平面形は長方形で、長さ 0.8 m、幅 0.3 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.1 m を測る。埋土は、黒褐色シルト質粘土、黄褐色シルト質粘土の 2 層からなる。出土遺物は、弥生土器の壺 2 点と底部 1 点を図化した。

壺は I-1 (新)・2 様式に該当するかと思われるものと、I-3 様式に該当するものである。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK110 (図 2-42)

X940-945・Y935-940 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.5 m を測る。平面形は隅丸長方形と思われ、残存長 1.15 m、幅 0.4 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.2 m を測る。埋土は、黒褐色シルト質粘土の 2 層からなる。出土遺物は、弥生土器の壺・甕各 1 点を図化した。両方とも、I 様式の範疇に収まる。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK133 (図 2-18・49)

X940-945・Y1020-1030 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.7 m を測り、黄褐色シルト層で検出された。検出部位に限られるため、平面形全体は不明で、西側と東側の肩だけが確認された。断面形は不整なレンズ形を呈し、深さ 0.5 m を測る。埋土は、暗褐色シルト、黄褐色シルト、暗灰黄色シルト質粘土の 3 層からなる。内部からは、I-1 (新)～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の甕・壺などが出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

F 南側溝 2 地点

(1) 井戸

SE01 (図 2-7・22)

X935-940・Y1015-1020 で検出された井戸である。検出面の高さは標高約 3.0 m を測る。掘り方の平面形は円形と思われ、検出部位で東西長 2.5 m、南北長 0.5 m を測る。断面形は逆凸字形を呈し、深さ 1.1 m を測る。内部に直径 0.6 m の井戸枠と積石の一部が遺存していた。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、近世～近代と判断される。

SE02 (図 2-7・22)

X935-940・Y1020-1025 で検出された井戸である。検出面の高さは標高約 3.0 m を測る。掘り方の平面形は円形と思われ、検出部位で東西長 1.5 m、南北長 0.25 m を測る。断面形は環形を呈し、深さ 0.6 m を測る。内部に積石の一部が遺存していた。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、検出層位からみて、近世～近代と判断される。

(2) 溝

SD59 (図 2-4)

X935-945・Y860-870 で検出された溝である。南西-北東方向に 1.0m 分検出し、幅 4.0 m を測る。内部は未掘である。

SD102 (図 2-50)

X935-940・Y985-995 で検出された溝である。北側に位置する南側溝 1 地点でも、本遺構の続きが確認された。検出面の高さは標高 2.5～2.6 m を測る。南東-北西方向に 2.0 m 分検出し、幅 2.0 m を測る。断面形は V 字形に近く、深さ 1.5 m を測る。埋土は、崩落のため一部情報が欠落しているが、オリーブ色系の細砂・シルトからなる上層 (a～g)、オリーブ色シルトと灰色中粒砂からなる中層 (h・i)、黄褐色・オリーブ色シルトと灰色粘土層・灰色粗砂・中粒砂の互層からなる下層 (j・k など) に大

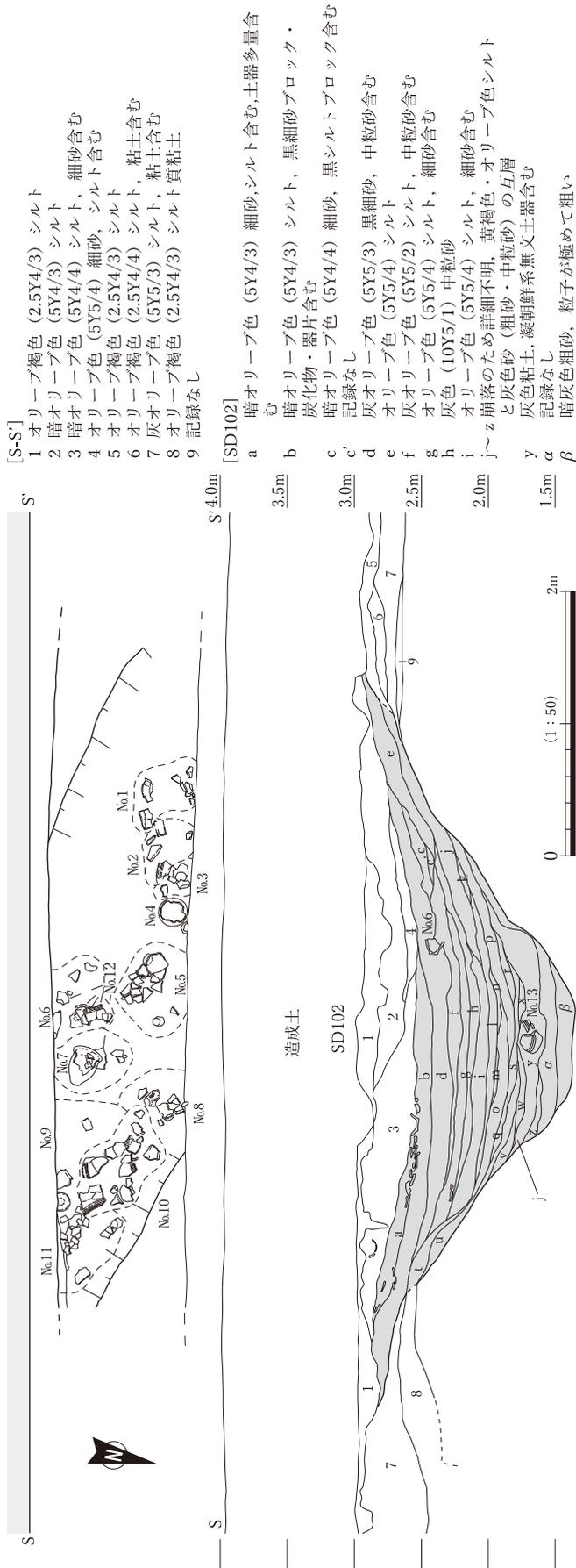
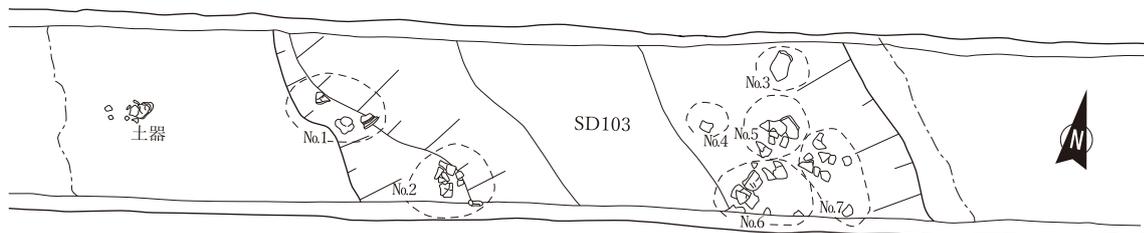
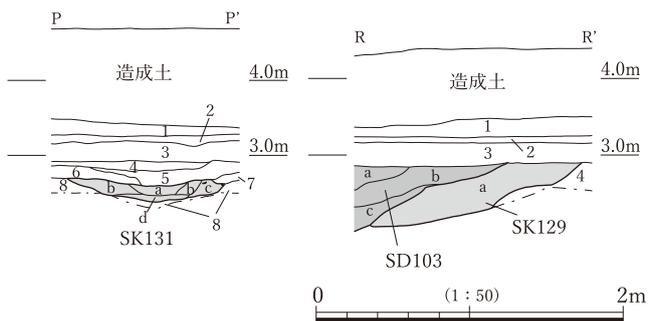
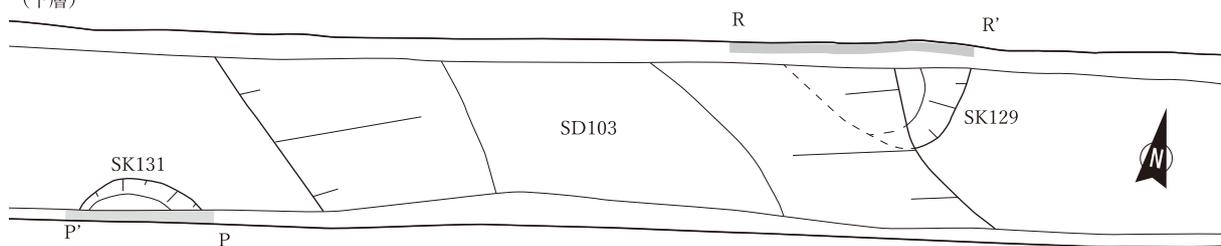


図 2-50 SD102

(上層)



(下層)



[P-P']

- 1 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘土
- 2 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土, 鉄分・マンガン含む
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土
- 5 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト質粘土, マンガン含む
- 6 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土
- 7 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土
- 8 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土

[R-R']

- 1 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘土
- 2 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土, 土器片少量含む
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 土性記録なし

[SK131]

- a 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土性記録なし, 焼土多量含む
- b 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土, 焼土・炭化物・マンガン含む
- c 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土, 土器片少量含む
- d 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土, 焼土・マンガン少量粒含む

[SD103]

- a 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 砂質土
- b 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト
- c 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト質粘土

[SK129]

- a 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土, 土器片・炭化物・マンガン少量含む

SD103(東から)

図 2-51 SD103・SK129・SK131

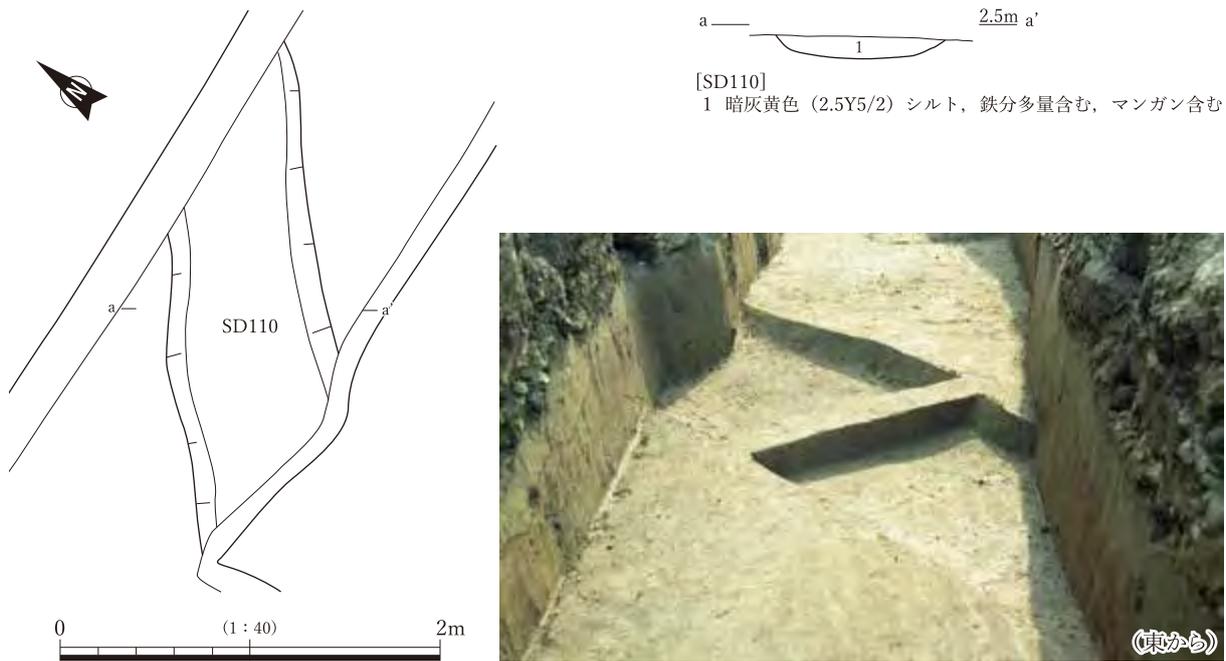


図 2-52 SD110

別される。上層からは、縄文晩期土器、I-1（新）～4様式の時期幅に収まる弥生土器、打製石庖丁、磨製石庖丁、蛤刃石斧未成品（？）が出土した。中層からは、I-1（新）～4様式の時期幅に収まる弥生土器、敲石が出土した。下層からは、I-1（新）・2様式、I-3・4様式に該当する弥生土器の壺、擬朝鮮系無文土器の甕、縄文時代晩期後半の氷I式土器、敲石（？）が出土した。中・下層では、擬朝鮮系無文土器の可能性のある甕も出土した。本遺構は、弥生時代前期前葉に掘削され、前期中葉から前期末～中期初頭にかけて、埋没したものと考えられる。第15・34次調査、1996年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの外溝の一部にあたる。

SD103 (図 2-23・51)

X935-940・Y975-980で検出された溝である。北側に位置する南側溝1地点でも、本遺構の続きが確認された。検出面の高さは標高約2.9mを測る。南東-北西方向に1.1m分検出し、幅3.5～3.8mを測り、SK129を切る。断面形は逆台形を呈し、深さ1.1mを測る。埋土は、オリーブ色系のシルト・粘性砂質土などからなる上層（a～f）、オリーブ色系・暗灰黄色・灰色の極細砂などからなる中層（g～o）、灰オリーブ色・黄褐色・暗緑灰色の粘土からなる下層（p～r）に大別される。上層からは縄文晩期土器、I-1（新）～4様式の時期幅に収まる弥生土器、スクレイパー・砥石・敲石・打製石庖丁未成品といった石器、下層からはI様式の弥生土器が出土した。本遺構は、第15・34次調査、1996年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの内溝の一部にあたり、その調査所見によれば、弥生時代前期中葉に掘削され、前期末～中期初頭までに埋没したものと考えられる。

SK105B (図 2-4)

X935-940・Y875-880で検出された溝である。南北方向に1.0m分検出し、幅1.0mを測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は不明である。

SD106 (図 2-4・5・19)

X935-940・Y900-910 で検出された溝である。検出面の高さは標高約 2.6 m を測る。南西－北東方向に 1.0 m 分検出し、幅 4.5 m を測り、SK114 に切られる。北側に位置する南側溝 1 地点でも、本遺構の続きが確認された。断面形は皿形を呈し、深さ 0.9 m を測る。埋土は、オリーブ褐色・黄褐色・灰オリーブ色の砂質土・シルト・中粒砂からなる上層 (a～c)、黄褐色・オリーブ色系のシルト質粘土・粘質土などからなる下層 (d～i) に大別される。本遺構は、第 15・34 次調査、1996 年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの外溝の一部にあたり、その調査所見によれば、弥生時代前期前葉に掘削され、前期中葉から前期末～中期初頭にかけて、堆積したものと考えられる。

SD107 (図 2-5・19)

X935-940・Y915-920 で検出された溝である。検出面の高さは標高約 2.5 m を測る。南西－北東方向に 1.0 m 分検出し、幅 4.5 m を測る。北側に位置する南側溝 1 地点でも、本遺構の続きが確認された。断面形は逆台形と思われ、深さ 0.9 m を測る。埋土は灰色系の粘土の 4 層からなる。出土遺物はない。本遺構は、第 15・34 次調査、1996 年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの内溝の一部にあたる可能性がある。もしそうであるならば、本遺構は弥生時代前期中葉に掘削され、前期末～中期初頭までに埋没したものとみられる。

SD114 (図 2-7・18・23)

X930-940・Y1025-1030 で検出された溝である。検出面の高さは標高約 2.1 m を測る。南東－北西方向に 1.0 m 分検出し、幅 1.3 m を測る。北側に位置する南側溝 1 地点でも、本遺構の続きが確認された。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.4 m を測る。埋土は、灰色粘土・オリーブ灰色細砂の 2 層からなる。内部からは、弥生土器、須恵器、土師器の破片と凹石、敲石が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、古代であろうか。

SD108 (図 2-4)

X935-940・Y890-900 で検出された溝である。南西－北東方向に 1.0m 分検出し、幅 1.0 m を測る。内部からは弥生土器と敲石の破片が出土した。弥生土器は I-3・4 様式に該当する壺と、底部を図化した。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、弥生時代前期末～中期初頭と判断される。

SD109 (図 2-5・20)

X935-940・Y925-935 で検出された溝である。南西－北東方向に 1.0 m 分検出し、幅 3.5～4 m を測る。内部からは弥生土器が出土し、I-2～4 様式と思われる土器を図化した。本遺構は、第 15・34 次調査、1996 年度立会の各地点で確認された二条大溝のうちの内溝の一部にあたる可能性がある。もしそうであるならば、本遺構は弥生時代前期中葉に掘削され、前期末～中期初頭までに埋没したものとみられる。

SD110 (図 2-52)

X935-940・Y1005-1010 で検出された溝である。検出面の高さは標高約 2.4 m を測る。南西－北東方向に 1.2 m 分検出し、幅 0.9 m を測る。断面形はレンズ形を呈し、深さ 0.1 m を測る。埋土は暗灰黄色シルトの 1 層からなる。内部からは弥生土器が出土し、I-1 (新)～4 様式の時期幅に収まる土器を図化した。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、弥生前期前葉～中期初頭のどこかに求められる。

(3) 土坑

SK112 (図 2-4・5)

X935-940・Y900-905 で検出された土坑である。平面形は円形か楕円形と思われ、検出部位で東西長 0.6 m、南北長 0.2 m を測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は不明である。

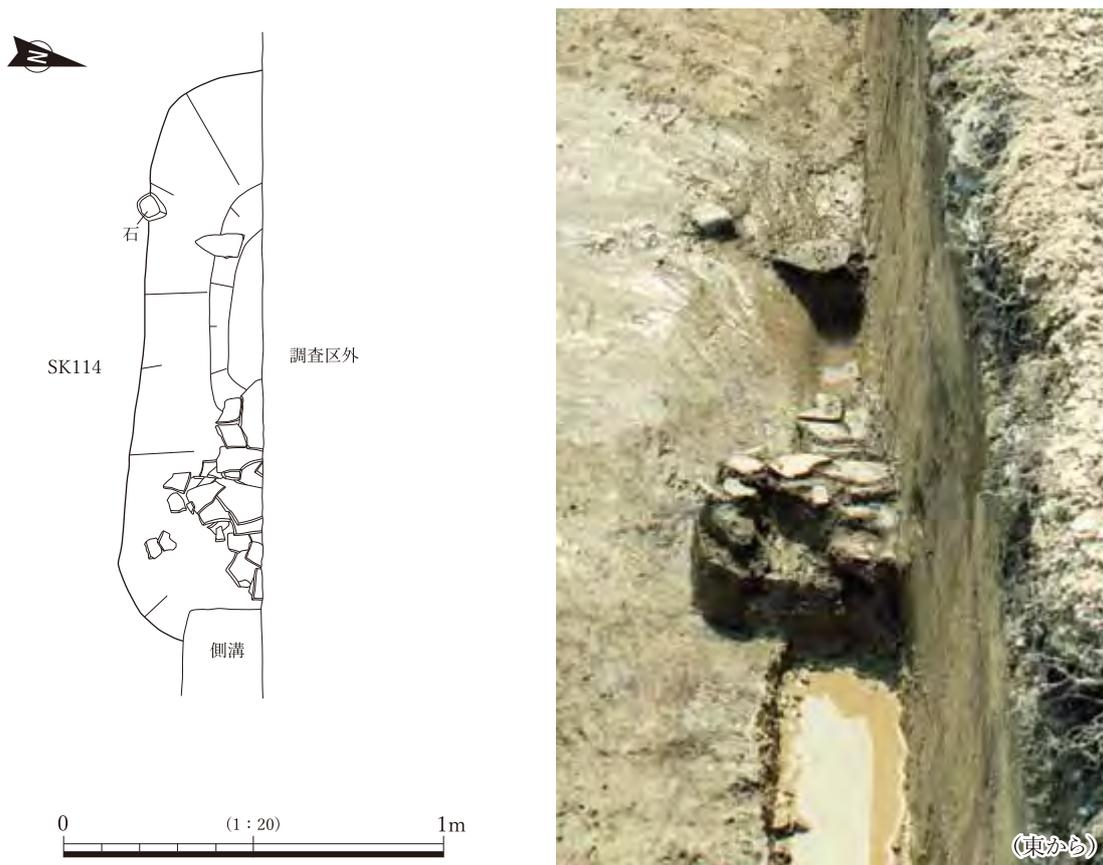


図 2-53 SK114

SK113 (図 2-5・21)

X935-940・Y930-940 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.7 m を測る。平面形の全体は不明であり、検出部位で東西長 4.5 m、南北長 1.0 m を測る。断面形は不整な逆凸字形を呈し、深さ 0.5 m を測る。埋土は、黒褐色系のシルト・シルト質粘土の 2 層からなる。内部からは、I-3・4 様式に該当する弥生土器の壺・甕などが出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK114 (図 2-19・53)

X935-940・Y905-910 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.5 m を測る。平面形は楕円形と思われ、検出部位で東西長 1.5 m、南北長 0.3 m を測り、SD106 を切る。断面形はレンズ形を呈し、深さ 0.2 m を測る。埋土は、暗灰黄色シルト質粘土・オリーブ褐色シルト質粘土の 2 層からなる。内部からは、I-1 (新)～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の甕などが出土した。本遺構の所属時期は、切り合い関係、出土遺物からみて、弥生時代前期末～中期初頭と判断される。

SK115 (図 2-54)

X935-940・Y940-950 で検出された土坑である。平面形は円形と思われ、検出部位で東西長 1.9 m、南北長 0.8 m を測る。周辺からは、I-1 (新)～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の甕が出土した。本遺構の所属時期は不明である。

SK116 (図 2-54)

X935-940・Y940-945 で検出された土坑である。平面形の全体は不明であり、検出部位で東西長 1.1 m、

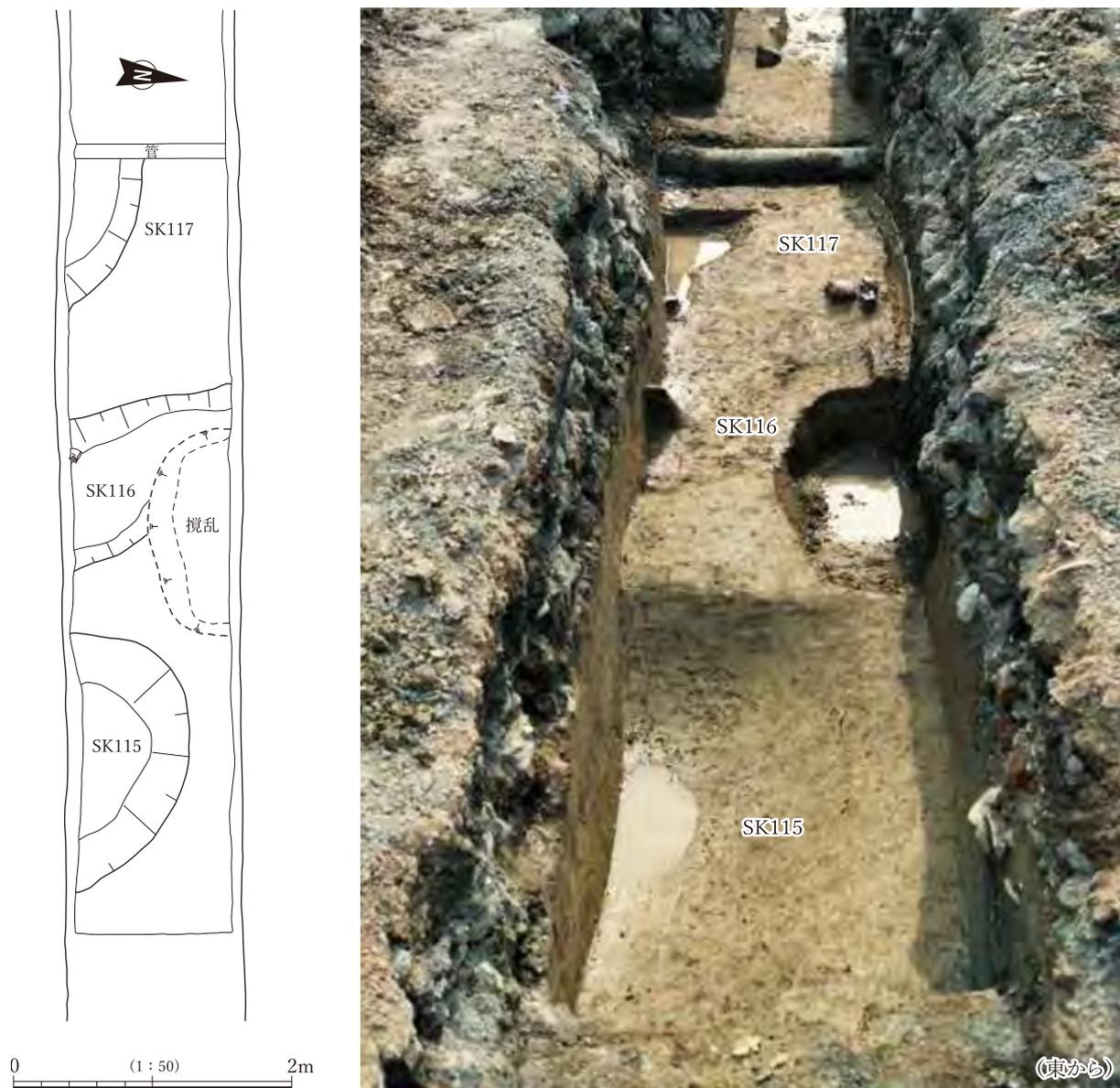


図 2-54 SK115・SK116・SK117

南北長 1.2 m を測る。内部からは、I-3 様式に該当する弥生土器の壺が出土した。東側の肩付近からは、動物の歯牙が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、弥生時代前期末と判断される。

SK117 (図 2-54)

X935-940・Y940-945 で検出された土坑である。平面形の全体は不明であり、検出部位で東西長 1.0 m、南北長 0.5 m を測る。出土遺物はない。本遺構の所属時期は不明である。

SK118 (図 2-6)

X935-940・Y965-975 で検出された土坑である。平面形は楕円形と思われ、検出部位で東西長 1.1 m、南北長 0.3 m を測る。内部からは、I-2～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の甕などが出土した。本遺構の所属時期は、弥生時代前期中葉～中期初頭のどこかに求められる。

SK123 (図 2-55)

X935-940・Y990-995 で検出された土坑である。平面形の全体は不明で、南北に長い楕円形であろうか。

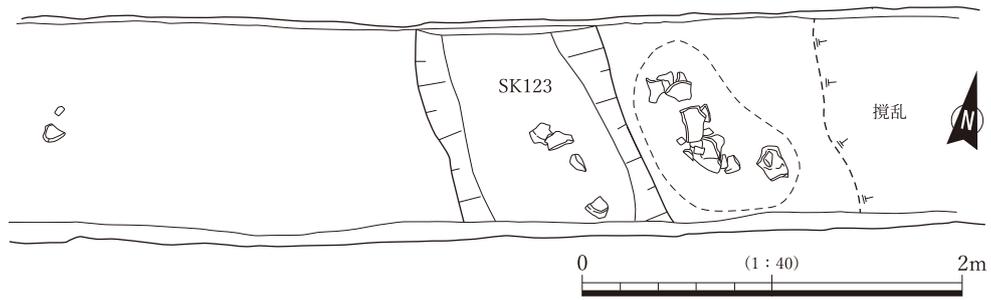


図 2-55 SK123

検出部位で東西長 1.0 m，南北長 1.1 m を測る。内部からは，I - 3・4 様式に該当する弥生土器の壺などが出土した。本遺構の東側からは，I - 3・4 様式に該当する弥生土器の蓋をはじめ，I - 1（新）～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の破片と敲石が出土した。本遺構の所属時期は，出土遺物からみて，弥生時代前期末・中期初頭と判断される。

SK125（図 2-56）

X935-940・Y945-950 で検出された土坑である。平面形の全体は不明であり，検出部位で東西長 0.8 m，南北長 1.1 m を測る。断面形の全体も不明で，深さ 0.1 m を測る。埋土は暗灰黄色粘土の 1 層からなる。内部からは，I - 2～4 様式の時期幅に収まる弥生時代の甕が出土した。本遺構の所属時期は，出土遺物からみて，弥生時代前期中葉～中期初頭のどこかに求められる。

SK126（図 2-21・57）

X935-940・Y930-940 で検出された土坑である。検出されたのは北側の肩だけで，平面形の全体は不明である。検出部位で東西長 4.5 m，南北長 0.5 m を測る。内部からは，弥生土器，打製石庖丁の破片と敲石が出土した。弥生土器の時期幅は I - 1（新）～4 様式に収まり，細かな時期が確定できるもの

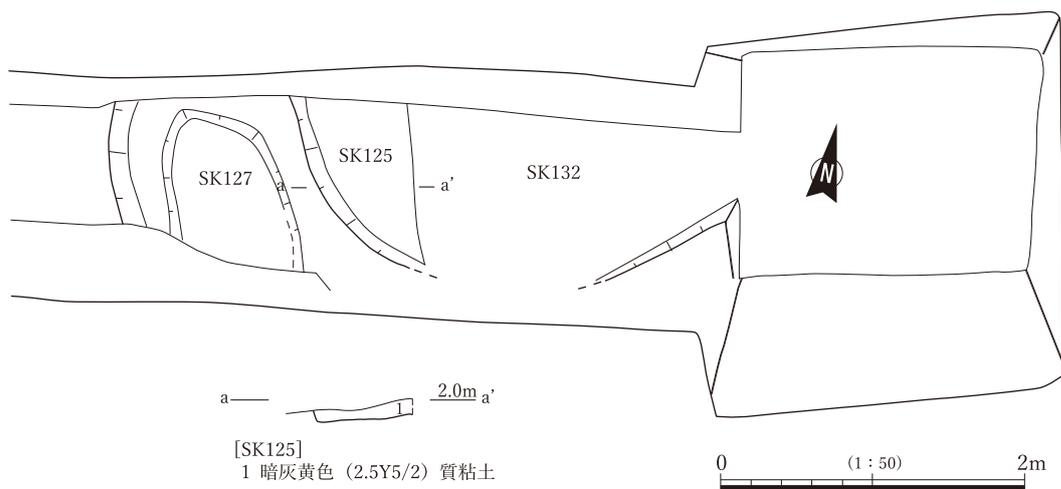


図 2-56 SK125・SK127・SK132

には、I-1(新)・2様式の壺がある。直上からは、敲石が出土した。本遺構の所属時期は、弥生時代前期前葉～中期初頭のどこかに求められる。

SK127 (図 2-56)

X935-940・Y940-945 で検出された土坑である。二段掘りで、一段目は西側の肩だけが確認された。二段目の平面形は楕円形と思われる、検出部位で東西長 0.8 m、南北長 1.1 m を測る。内部からは、I 様式の範疇に収まる弥生土器が出土した。細かな時期を確定できるものには、I-1(新)・2 様式に該当する壺がある。本遺構の所属時期は、弥生時代前期前葉～中期初頭のどこかに求められる。

SK128 (図 2-58)

X935-940・Y980-985 で検出された土坑である。平面形は不明であり、検出部位で東西長 0.5 m、南北長 0.6 m を測る。内部には、10～30 cm 大の石が 5 個以上配されていた。I-1(新)～4 様式の時

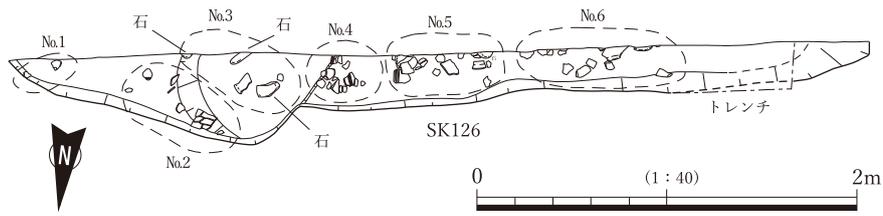


図 2-57 SK126

期幅に収まる弥生土器の胴部片が出土した。本遺構の所属時期は、弥生時代前期前葉～中期初頭のどこかに求められる。SK129 (図 2-51)

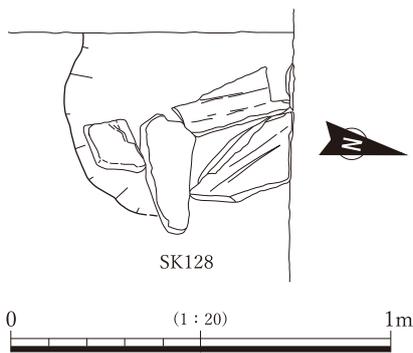


図 2-58 SK128

X935-940・Y975-985 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.9 m を測り、SD103 に切られる。平面形は不明で、検出部位で東西長 0.4 m、南北長 0.5 m を測る。断面形はレンズ形と思われ、深さ 0.4 m を測る。埋土は暗灰黄色シルト質粘土の 1 層からなる。内部からは、I-2～4 様式の時期幅に収まる弥生土器の甕が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と切り合い関係、出土遺物からみて、弥生時代前期中葉と判断される。

SK131 (図 2-51)

X935-940・Y970-980 で検出された土坑である。検出面の高さは標高約 2.9 m を測る。検出されたのは北側の肩だけで、平面形の全体は不明である。検出部位で東西長 0.8 m、南北長 0.2 m を測る。断面形はレンズ形を呈し、深さ 0.1 m を測る。埋土は暗灰黄色焼土、暗灰黄色・黄褐色シルト質粘土の 4 層からなる。出土遺物はない。



図 2-59 SK132

SK132 (図 2-56・59)

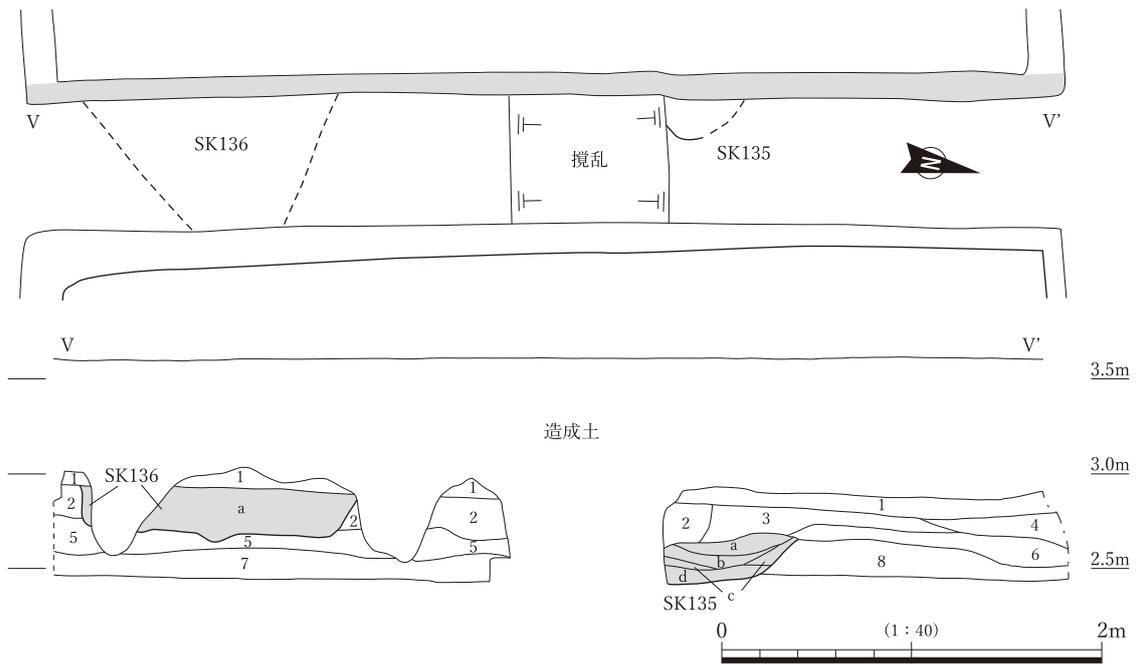
X935-940・Y945-950 で検出された土坑である。検出されたのは南側の肩の一部だけで、平面形の全体は不明である。肩の一部が検出された西側と平面プランが未検出の東側とに分けて遺物を取り上げられた。内部からは、I-1(新)～4様式の時期幅に収まる弥生土器が多数出土した。細かな時期を確定できるものには、I-1(新)・2様式の壺、I-2様式の蓋がある。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、弥生前期中葉と判断される。

SK135 (図 2-60)

X935-945・Y1000-1005 で検出された土坑である。掘り込み面の高さは標高約 2.6 m を測る。検出されたのは東側の肩だけで、平面形の全体は不明である。検出部位で東西長 0.2 m、南北長 0.4 m を測る。断面形は逆台形と思われ、深さ 0.2 m を測る。埋土は、灰オリーブ色・暗灰黄色・黄褐色シルト質粘土の 4 層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は、層位学的にみて、弥生時代前期末～中世のどこかに求められる。

SK136 (図 2-60)

X935-940・Y1000-1010 で検出された土坑である。掘り込み面の高さは標高約 2.9 m を測る。平面形は不明で、東西長 0.7 m、南北長 1.3 m を測る。断面形はやや不整な逆台形を呈し、深さ 0.2 m を測る。



[V-V']

- 1 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト, 鉄分含む
- 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト, 鉄分・マンガン含む
- 3 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト, 鉄分・マンガン含む
- 4 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト, 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトブロック斑状に含む, 鉄分・マンガン含む
- 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 鉄分・マンガン含む
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト, 鉄分・マンガン含む
- 7 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土, 微砂・鉄分・マンガン含む
- 8 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト, 鉄分・マンガン含む

[SK135]

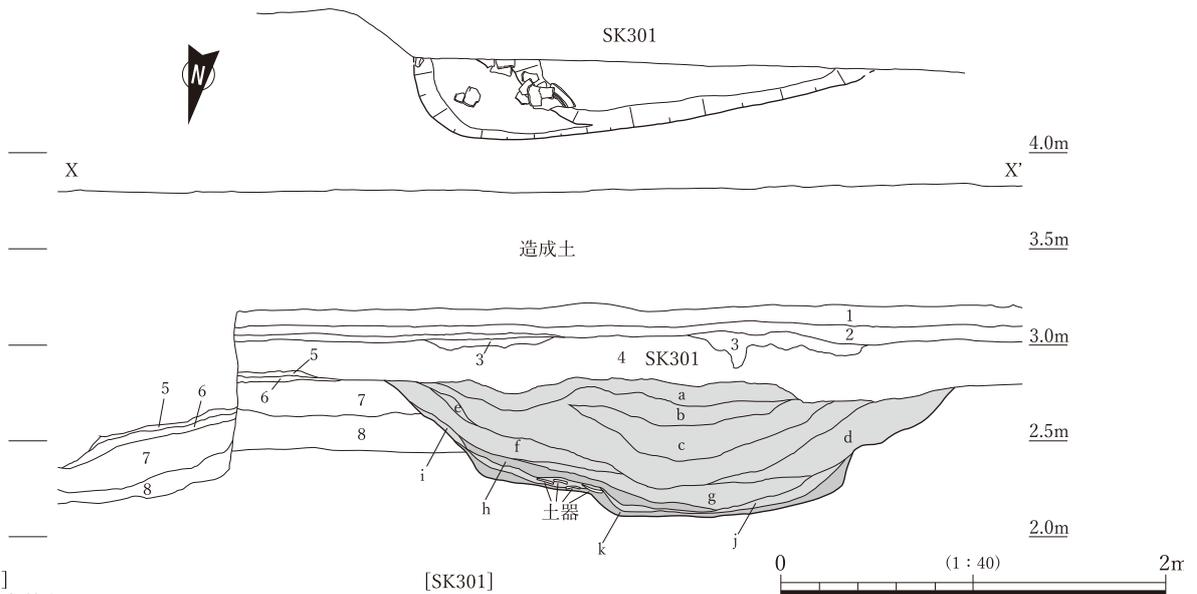
- a 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト質粘土, 微砂・鉄分・マンガン・炭化物・土器片含む
- b 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土, 鉄分・マンガン多量含む, 炭化物含む
- c 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土, 鉄分・マンガン・炭化物含む
- d 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト質粘土, 砂・鉄分・マンガン・炭化物含む

[SK136]

- a 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト, 鉄分・マンガン・土器片含む



図 2-60 SK135・SK136



[X-X']

- 1 灰色粘土
- 2 淡黄色シルト質粘土
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト
- 4 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト
- 5 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト, 焼土含む
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト質粘土, 炭化物含む
- 7 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト, 細砂・遺物含む
- 8 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土

[SK301]

- a オリーブ黄色 (5Y6/4) シルト
- b 暗オリーブ色 (5Y4/4) 中粒砂
- c オリーブ色 (5Y5/4) シルト, 細砂含む
- d 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 中粒砂, 細砂含む
- e 記録なし
- f オリーブ黄色 (5Y6/4) シルト
- g 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 細砂・中粒砂
- h 記録なし
- i オリーブ色 (5Y5/4) シルト, 細砂含む
- j オリーブ色 (5Y5/4) シルト, 土器片含む
- k 黒色炭化物



図 2-61 SK301

埋土は黒褐色シルトの1層からなる。出土遺物はない。本遺構の所属時期は層位的にみて、弥生時代前期末以降と考えられる。

G 南側溝3地点

(1) 溝

SD301 (図2-8・23)

X915-920・Y955-960で検出された溝である。検出面の高さは標高約2.8mを測る。南北方向に約2.5m分を検出し、幅1.5mを測る。SD302を切りつつ、それに平行する。断面形はレンズ形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は、暗オリーブ色シルト質粘土・暗オリーブ褐色シルト・暗灰黄色シルト質粘土の3層からなる。内部からは、弥生土器が出土し、細かな時期を確定できるものには、I-4様式に該当する甕がある。本遺構の埋没時期は、検出層位と切り合い関係、出土遺物からみて、中世であろうか。

SD302 (図2-8・23)

X915-920・Y955-960で検出された溝である。検出面の高さは標高約2.8mを測る。南北方向に約2.5m分を検出し、幅1.2mを測る。SD301に切れつつ、それに平行する。断面形は不整形で、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黄色シルト質粘土の1層からなる。内部からは、弥生土器の底部片、中世の所産と思われる土師器片が出土した。本遺構の所属時期は、検出層位と出土遺物からみて、中世であろうか。

(2) 土坑

SK301 (図2-61)

X910-915・Y945-950で検出された土坑である。掘り込み面の高さは標高約2.8mを測る。検出されたのは北側の肩だけで、平面形の全体は不明である。検出部位で東西長2.4m、南北長0.4mを測る。断面形は不整なレンズ形を呈し、深さ0.7mを測る。埋土は、オリーブ色系のシルト・中粒砂、黒色炭化物層などの11層からなる。黒色炭化物層は底面付近に2層堆積し、間に弥生土器片を含むシルト層を挟む。内部からは、I-1(新)～4様式の時期幅に収まる弥生土器の破片が出土した。細かな時期を確定できるものには、I-1(新)・2様式の壺がある。本遺構の所属時期は、層位と出土遺物からみて、弥生時代前期前葉～中葉と判断される。

SK302 (図2-8)

X910-915・Y945-950で検出された土坑である。平面形は隅丸長方形で、長さ1.0m、幅0.7mを測る。内部からは、弥生土器の壺の破片が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物からみて、弥生時代の可能性があるが、確定し得ない。

5. 遺物

A 土器 (図2-62～103, 表2-1～14)

(1) 排水管・東側溝1・2地点

1～3はSD01から出土した。1は弥生土器の甕の口縁部片、2は弥生土器の壺の肩部片で、両方もI様式の範疇に収まる。3は刻目突帯文土器の口縁部片で、I-1(古)様式に該当するか。4～6はSK01から出土した。4・5は弥生土器の壺の肩部片で、I-1・2様式に該当する。6は須恵器の壺の頸部から肩部にかけての破片で、時期は古代である。7～9はSK02から出土した。7は弥生土器

の壺の胴部片で、I-3・4様式に該当する。8は弥生土器の壺の頸部・肩部の境界付近の破片で、I-1様式に該当する。9は完形の弥生土器の壺で、I-1様式に該当する。10～13はSK03から出土した。10は弥生土器の甕の口縁部から胴部上半の破片で、I-3・4様式に該当する。11～13は弥生土器の底部片である。14はSK09から出土した弥生土器の口縁部片で、I様式に該当するか。15～18、20・21はSD44から出土した。15は弥生土器の壺の頸部から肩部にかけての破片で、I様式の範疇に収まる。16は弥生土器の甕の口縁部片で、I-2～4様式に該当する。17は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。18は弥生土器の底部片である。20は弥生土器の高杯の脚部片で、V～VI様式に該当する。21は器種不明の弥生土器片で、I-4様式に該当する。19・23はSD67から出土した。19は弥生土器の壺の胴部片で、I-1・2様式に該当する。23は弥生土器の甕の胴部上半の破片で、I様式の範疇に収まる。22はSD66から出土した弥生土器の壺の肩部片で、I-3・4様式に該当する。24・25はSK10から出土した。24は弥生土器の甕で、I-2～4様式に該当する。25は弥生土器の壺の頸部片で、I-3・4様式に該当する。26・28はSK04から出土した。26は弥生土器の壺の肩部片である。28は弥生土器の壺の頸部・肩部の境界付近の破片で、I-1様式に該当する。27・29・30・32・34～38はSK11Aから出土した。27は完形の弥生土器の鉢で、I-1・2様式に該当する。29は弥生土器の甕の口縁部から胴部上半にかけての破片で、I-2～4様式に該当する。30は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。32は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。34は弥生土器の甕の口縁部から胴部上半にかけての破片で、I-2～4様式に該当する。35は弥生土器の壺の肩部片で、I-3・4様式に該当する。36は弥生土器の壺の口縁部から肩部にかけての破片で、I-3・4様式に該当する。37・38は弥生土器の底部片である。31はSK05から出土した弥生土器の壺の肩部片で、I様式に該当するか。33はSK08から出土した弥生土器の胴部片で、I様式の範疇に収まる。39・41・43・45～47・49・52～54・57～59・73～75は黄褐色シルト層から出土した。39は弥生土器の壺の肩部片で、I-1（新）様式に該当する。41は弥生土器の壺の口縁部片で、I-1・2様式に該当する。43は弥生土器の壺の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。45は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I-2～4様式に該当する。46・47は弥生土器の甕の口縁部片で、I-1（新）～4様式に該当する。49は弥生土器の壺の口縁部片である。52・53は弥生土器の底部片である。54は古代の土師器の坏である。57・58は弥生土器の甕の口縁部片で、両方ともI様式の範疇に収まる。59は弥生土器の口縁部片である。73は弥生土器の壺の口縁部片である。74は弥生土器の口縁部片である。75は弥生土器の壺の肩部片で、I-1様式に該当する。40・44・48・55は暗褐色細砂層から出土した。40は弥生土器の壺の肩部片で、I-1様式に該当する。44は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I-1（新）～4様式に該当する。48は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。55は弥生土器の底部片である。42は出土遺構・層位不明の弥生土器の壺の頸部・肩部の境界付近の破片で、I-1様式に該当する。50は黄灰色粘土層から出土した弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。51は土器群No.1から出土した弥生土器の壺の口縁部から胴部上半にかけての破片で、I-3・4様式に該当する。56は黒褐色土層から出土した弥生土器の口縁部片である。60は黒色シルト層から出土した須恵器の坏の底部片で、時期は古代である。61～68はSD59から出土した。61は弥生土器の壺の肩部片で、I-1様式に該当する。62は弥生土器の壺の頸部片で、I-3・4様式に該当する。63は弥生土器の壺の口縁部片で、I-3・4様式に該当する。64は弥生土器の壺の頸部片で、I-3・4様式に該当する。65は弥生土器の甕の

口縁部片で、I様式の範疇に収まる。66は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。67は弥生土器の底部片である。68は弥生土器の蓋の破片であろうか。69はSD111から出土した弥生土器の甕の口縁部片である。70はSK134から出土した弥生土器片で、器種は蓋あるいは高坏とみられる。71・72・76～84はSK11Bから出土した。71は弥生土器の底部片である。72は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式の範疇に収まる。76は弥生土器の壺の胴部片で、I-1様式に該当する。77は弥生土器の壺の肩部片で、I-1・2様式に該当する。78は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I-3・4様式に該当する。79は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I-1（新）～4様式に該当する。80は弥生土器の甕の口縁部片で、I-3・4様式に該当する。81は弥生土器の甕で、I-1（新）・2様式に該当する。82は弥生土器の甕で、I-3・4様式に該当する。83は弥生土器の壺の胴部片で、I-3・4様式に該当するか。84は弥生土器の壺の口頸部片で、I-3・4様式に該当する。

(2) 南側溝1～3地点

85～90はSI01から出土した。85・86は弥生土器の壺の胴部片で、85はI-1（新）～4様式、86はI-1（新）様式に該当する。87は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式に該当する。88は弥生土器の壺の口縁部片で、I-3様式に該当する。89・90は弥生土器の底部片である。91はSD59から出土した弥生土器片で、I-3・4様式に該当するか。92はSD101から出土した弥生土器の壺の頸部片で、I-3・4様式に該当する。93～217はSD102から出土した。93～119は弥生土器の壺で、I様式の範疇に収まる。120は縄文土器（突帯文土器）の深鉢の口縁部片で、I-1様式に該当する。121は擬朝鮮系無文土器の可能性のある甕で、口縁部に断面長方形の粘土帯を貼り付ける。122～157は弥生土器の甕で、I様式の範疇に収まる。158～163は弥生土器の鉢で、I様式の範疇に収まる。164は縄文土器の浅鉢の口縁部片で、縄文晩期中葉に属するか。165～181は弥生土器の底部片である。182～184は弥生土器の蓋の破片である。182・183はI-2様式に該当する。184はI-3・4様式に該当するか。185～187は弥生土器の壺の破片で、185・187はI-3・4様式、186はI-1（新）～4様式に該当する。188は弥生土器の甕の破片で、口縁部に粘土帯を貼り付ける点の特異で、擬朝鮮系無文土器の可能性がある。189～191は弥生土器の甕の破片で、189～190はI-1（新）～4様式に該当する。191は弥生土器の甕の胴部から底部にかけての破片である。192～195は弥生土器の底部片である。196は弥生土器の蓋で、I-2様式に該当するか。197は弥生土器の壺で、I-3・4様式に該当する。198は弥生土器の底部片である。199は弥生土器の高坏の坏部から脚部にかけての破片である。200・201は弥生土器の壺の破片で、200はI-1（新）・2様式、201はI様式に該当する。202は擬朝鮮系無文土器の甕で、口縁部に断面楕円形の粘土帯を貼り付ける。203～208は弥生土器の壺で、I-1（新）様式～I-4様式の範疇に収まる。209は弥生土器の底部片である。210～212は弥生土器の甕で、210・211はI-2～4様式、212はI-1（新）～4様式に該当する。213～217は弥生土器の底部片である。218～233はSD103から出土した。218・219は弥生土器の壺である。218はI-1（新）・2様式に該当する。219はI-1（新）・2様式に該当するか。220は弥生土器の甕で、I-2～4様式に該当する。221は縄文土器（突帯文土器）の深鉢の口縁部片で、I-1様式に該当する。222は弥生土器の甕の口縁部片で、I様式に該当する。223は弥生土器の壺の頸部から肩部にかけての破片で、I-1（新）・2様式に該当するか。224は弥生土器の底部片である。225～228は弥生土器の甕で、I-2～4様式に該当する。229は弥生土器の底部片、230は弥生土器の鉢である。231

は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I 様式に該当する。232・233 は弥生土器の鉢で、233 は I 様式に該当する。234・235 は SD104 から出土した。234 は弥生土器の壺の頸部から肩部にかけての破片で、I - 3・4 様式に該当する。235 は弥生土器の底部片である。236 は SD105 から出土した弥生土器の底部片である。237 は SD106 から出土した弥生土器の甕の胴部片で、I - 1 (新) ~ 4 様式に該当する。238・240 は SD108 から出土した。238 は弥生土器の壺の肩部片で、I - 3・4 様式に該当する。240 は弥生土器の底部片である。239 は SD110 から出土した弥生土器の甕か壺の破片で、I - 1 (新) ~ 4 様式に該当する。241 は SD109 から出土した。弥生土器の甕の胴部片か。I - 2 ~ 4 様式に該当するか。242 は SD113 から出土した弥生土器の底部片である。243 ~ 247 は SD114 から出土した。243 は弥生土器の壺の口縁部片か。244 は須恵器の壺の胴部片で、時期は古代か。245・246 は弥生土器の底部片である。247 は土師器の坏の底部片か。時期は古代か。248・249 は SD302 から出土した。248 は弥生土器の底部片である。249 は土師器の小皿の破片か。時期は中世か。250 ~ 258 は SD107 から出土した。250 ~ 252 は弥生土器の壺で、250・251 は I - 1 (新)・2 様式、252 は III - 3 様式に該当する。253 ~ 255 は弥生土器の甕で、253 は I - 1 (新) ~ 4 様式、254 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。256 ~ 258 は弥生土器の底部片である。259 ~ 263 は SD301 から出土した。259 は弥生土器の甕の口縁部片で、I - 4 様式に該当する。260 ~ 263 は弥生土器の鉢の口縁部片である。264 は SK101 から出土した弥生土器の底部片である。265 ~ 268 は SK107 から出土した。265・266 は弥生土器の甕で、265 は I 様式、266 は V・VI 様式に該当する。267 は弥生土器の底部片である。268 は須恵器の胴部で、時期は古墳時代から古代か。269・272 は SK108 から出土した。269 は弥生土器の壺の肩部片で、I 様式に該当するか。272 は弥生土器の甕の口縁部片で、I - 2 ~ 4 様式に該当する。270・271・273 は SK109 から出土した。270・271 は弥生土器の壺の肩部片である。270 は I - 1 (新)・2 様式に該当するか。271 は I - 3 様式に該当する。273 は弥生土器の底部片である。274・275 は SK110 から出土した。274 は弥生土器の壺の肩部片で、I - 3・4 様式に該当するか。275 は弥生土器の甕の口縁部片で、I 様式に該当する。276 ~ 285 は SK113 から出土した。276・277 は弥生土器の壺の胴部片で、276 が I - 3・4 様式、277 は I - 4 様式に該当する。278 ~ 281 は弥生土器の甕の口縁部片で、278・279 は I 様式、280・281 は I - 3・4 様式に該当する。282 ~ 284 は弥生土器の底部片である。285 は弥生土器の鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。286 は SK103 から出土した弥生土器の壺で、I - 3・4 様式に該当する。287・288 は SD102 から出土した弥生土器の壺で、287 は I - 3・4 様式、288 は I 様式に該当する。289 ~ 294 は SK103 から出土した。289 は弥生土器の壺の胴部から底部にかけての破片で、I - 3・4 様式に該当するか。290・291 は弥生土器の甕で、290 は I - 2 ~ 4 様式、291 は I 様式に該当する。292 は弥生土器の底部片である。293・294 は弥生土器の甕で、293 は I - 4 様式、294 は I - 1 (新) ~ 4 様式に該当する。295 ~ 305 は SK105 から出土した。295 は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、V・VI 様式に該当する。296 は弥生土器の鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、V・VI 様式に該当する。297 ~ 299 は弥生土器の甕で、297 は V・VI 様式に該当する。300 は弥生土器の鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、V・VI 様式に該当する。301 は弥生土器の甕の胴部から底部にかけての破片である。302 は弥生土器の鉢か高坏の口縁部片で、V・VI 様式に該当する。303 は弥生土器の高坏で、V - 2 ~ 4 様式に該当する。304 は弥生土器の底部片である。305 は弥生土器の鉢で、V - 2 ~ 4 様式に該当する。306 ~ 335 は SK106 から出土した。306 ~ 309 は弥生土器の甕で、306 は I - 1 (新) ~ 4 様式、307・309 は I - 3・4 様式、

308 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。310 は弥生土器の胴部片である。311・312 は弥生土器の甕で、311 は I - 3 様式、312 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。313 ~ 315 は弥生土器の壺で、313・314 は I - 3・4 様式、315 は I - 4 様式に該当する。316 は弥生土器の底部片である。317 ~ 321 は弥生土器の壺で、317 ~ 319・321 は I - 3・4 様式、320 は I - 4 様式に該当する。322・323 は弥生土器の底部片である。324 は弥生土器の壺の胴部片で、I - 3・4 様式に該当する。325 ~ 330 は弥生土器の底部片である。331 は弥生土器の壺の胴部片である。332 は弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I - 3・4 様式に該当する。333・334 は弥生土器の鉢である。335 は弥生土器の脚部である。336 ~ 341 は SK 111 から出土した。336 ~ 340 は弥生土器の甕で、336・339 は I - 1（新）~ 4 様式、337・338 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。340 は I 様式か。341 は弥生土器の蓋の摘み部から胴部にかけての破片で、I - 2 様式に該当する。342 ~ 345 は SK114 から出土した。342 ~ 344 は弥生土器の甕で、342・343 は I - 1（新）~ 4 様式、344 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。346 は SK115・周辺清掃・排土から出土した弥生土器の甕の胴部片で、I - 1（新）~ 4 様式に該当する。347 は SK116 から出土した弥生土器の壺の口頸部片で、I - 3 様式に該当する。348 ~ 350 は SK118 から出土した。348・350 は弥生土器の甕で、348 は I 様式、350 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。349 は弥生土器の底部片である。351・353 は SK119 から出土した弥生土器の甕で、351 は I 様式に該当する。352 は SK123 から出土した弥生土器の壺の口頸部片で、I - 3・4 様式に該当する。354 ~ 358 は SK123 から出土した。354・355・358 は弥生土器の甕である。354・355 は I - 1（新）~ 4 様式に該当する。385 は I 様式に該当するか。356 は弥生土器の底部片である。357 は弥生土器の蓋で、I - 3・4 様式に該当する。359 は SK125 から出土した弥生土器の甕の口縁部片で、I - 2 ~ 4 様式に該当する。360 ~ 373 は SK126 から出土した。360 ~ 363 は弥生土器の壺である。360・361 は I - 1（新）・2 様式に該当する。362・363 は I - 3・4 様式に該当するか。364 ~ 369・371 は弥生土器の甕で、364・371 は I 様式、365 ~ 367 は I - 1（新）~ 4 様式、368・369 は I - 2 ~ 4 様式に該当する。370・372 は弥生土器の底部片である。373 は弥生土器の胴部片である。374 ~ 376 は SK127 から出土した。374・375 は弥生土器の壺である。374 は I - 1（新）・2 様式に該当する。375 は I - 3・4 様式に該当するか。376 は弥生土器の甕の口縁部片で、I 様式に該当する。377 は SK128 から出土した弥生土器の胴部片で、I - 1（新）~ 4 様式に該当する。378 は SK129 から出土した弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I - 2 ~ 4 様式に該当する。379 は SK130 から出土した弥生土器の底部片である。380 ~ 391 は SK132 から出土した。380・381・383・385 は弥生土器の甕で、380・381・383 は I - 1（新）~ 4 様式、385 は I 様式に該当する。382・384・386・387 は弥生土器の底部片である。388・390・391 は弥生土器の壺で、388 は I - 1（新）・2 様式に該当する。389 は弥生土器の蓋で、I - 2 様式に該当する。392 ~ 399 は SK133 から出土した。392 は弥生土器の壺の肩部片で、I - 1（新）・2 様式に該当するか。393 ~ 396 は弥生土器の甕で、393 は I - 1（新）~ 4 様式、394・396 は I - 2 ~ 4 様式、395 は I 様式に該当する。397 ~ 399 は弥生土器の底部片である。400 ~ 404 は SK301 から出土した。400 は弥生土器の壺の口縁部片で、I - 1（新）・2 様式に該当する。401・402 は弥生土器の甕で、401 は I - 2 ~ 4 様式、402 は I - 1（新）~ 4 様式に該当する。403 は弥生土器の底部片である。404 は弥生土器の鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、I - 2 ~ 4 様式に該当するか。405 は SK302 から出土した弥生土器の壺の頸部片である。406 は土器群 No.3 から出土した弥生土器の甕の口縁部から胴部にかけての破片で、I - 1（新）~ 4 様式に該当する。407 は土器群 No.4 から出土した弥生土器の甕

の口縁部片で、I-2～4様式に該当する。408は土器群No.6から出土した弥生土器の甕で、I-3・4様式に該当するか。409～411は土器群No.1から出土した。409は弥生土器の壺の胴部片、410・411は弥生土器の底部片である。412～459は包含層などから出土した遺物で、縄文土器の深鉢、弥生土器の壺・甕・高坏・鉢・底部片、土師器の坏・埴・小皿、須恵器の壺などからなる。縄文土器はI-1（古）様式に該当する突帯文土器である。弥生土器はI様式の範疇に収まるものがほとんどで、II様式、V・VI様式に該当する可能性をもつものもある。土師器・須恵器は古代～中世にかけてのものである。460・461はSD102から出土した縄文土器の浅鉢で、縄文時代晩期後半の浮線文土器、氷I式である。

B 石器・土製品・木器（図2-104～110、表2-15）

(1) 排水管・東側溝1・2地点

462はSK138から出土した石器で、石庖丁の未成品か。463・464はSK11Aから出土した敲石、スクレイパーである。465はSD59より北から出土した土製紡錘車である。466は黄褐色シルト層から出土した土製円盤である。467は黄褐色シルト層の下層から出土した磨製石錐である。

(2) 南側溝1～3地点

468はSD104から出土したスクレイパーである。469～476はSD102から出土した。469は打製石斧、470・471は打製石庖丁、472磨製石庖丁、474は敲石、476は木製網杵である。473は敲石、475は蛤刃石斧の未成品か。477～479・483はSD103から出土した。477は砥石、478はスクレイパー、479は打製石庖丁の未成品、483は敲石である。480はSD106から出土したスクレイパーである。481はSD107から出土した石器で、砥石の小片か。482はSD108から出土した敲石の小片である。484はSD113から出土した磨製石庖丁である。485・486はSD114から出土した。485は凹石、486は敲石である。487がSK103から出土した砥石である。488はSK108から出土した敲石である。489はSK123から出土した敲石である。490～492はSK126から出土した。490・492は敲石、491は打製石庖丁である。493・495・496は黄褐色シルト層から出土した。493は砥石、495・496はスクレイパーである。494は黄褐色シルト層土器群No.3下から出土した敲石である。497～500・502・503は黒褐色シルト層から出土した。497は鑿状石器、498・500は打製石庖丁、502・503は敲石である。499は石槍か。501は黒褐色シルト層まで掘り下げ時に出土した打製石庖丁である。

6. ま と め

本報告地点では、縄文時代晩期～中世にかけての遺構・遺物が多数確認された。なかでも、弥生時代前期に関する成果は特筆に値するので、以下、詳述する。

遺構では、弥生時代前期前葉～中葉の居住域を囲む大溝の一部と、弥生時代前期の墓の可能性のある土坑が検出された。南側溝1・2地点のSD102・SD103・SD105・SD106はこれまで第15・34次調査地点、1996年度立会地点で確認された二重大溝の一部で、SD102・SD105・SD106は外溝、SD103は内溝にそれぞれ該当する。南側溝1・2地点のSD107・SD109も内溝の一部に該当する可能性がある。排水管地点で確認されたSK02・SK09^{註2)}は墓の可能性のある土坑で、とくにSK02からは弥生時代I-1様式に該当する完形の壺が出土しており、その可能性は高い。近接するボイラータンク地点、第22次調査地点、南蔵本遺跡県立中央病院地点では、石棺墓や墓の可能性のある土坑が確認されており、

この辺り一帯は弥生時代前期前葉～中葉において墓域であったと考えられる（端野編 2018）。

注目される遺物としては、弥生時代最古段階の突帯文土器・壺形土器、浮線網状文系土器、擬朝鮮系無文土器とその可能性がある土器がある。41 は口頸部境界に段をもつ壺、8・9・39・40・42・61・75 は頸胸部境界に段をもつ壺で、北部九州の板付Ⅰ式土器に類似する、Ⅰ－1 様式でも古い要素をもつ土器である。こうした特徴をもつ土器は、第22次調査地点 SK02 下層でも出土している（中村 2010, 端野編 2018）。120・221・428 は突帯文土器の小片で、これらもこの時期に属する可能性が高い。第22次調査地点 SK03 でも、同時期の突帯文土器が出土している（端野編 2018）。460・461 は縄文土器の浅鉢の小片で、中部高地に分布する浮線網状文系土器の離山式段階に位置づけられている（小林編 1999）。この土器は SD102 下層から出土し、Ⅰ－2 様式の土器と共伴しているから、その所属時期は弥生時代前期中葉とみなせる。後述する擬朝鮮系無文土器とも共伴している点は興味深い。浮線網状文系土器は、第9次調査地点旧河道でも出土しており（北條編 1998）、こちらは氷Ⅰ式中段階に位置づけられている（小林 1998, 小林編 1999）。これらの土器はそうした地域と徳島平野との間のつながりを示す貴重な資料である。121・188・202 は、擬朝鮮系無文土器あるいはその可能性がある土器で、このうち 188・202 については、すでに報告されている（橋本 2001）。202 は口縁部に断面円形あるいは楕円形の粘土帯を貼り付け、無文土器時代後期前半の水石里式（円形粘土帯）土器に類似した特徴をもつが、胴部や底部の形態は水石里式に通有なそれとは異なり、胎土も在地の弥生土器と変わらない。188 は弥生土器の範疇に収まる器形をもつが、口縁部に粘土帯を貼り付ける点で、水石里式（系）土器の影響を受けた可能性があるだろうか。202 は SD102 最下層、188 は SD102 中・下層から出土し、Ⅰ－2 様式の土器と共伴しているから、その所属時期は弥生時代前期中葉とみなせる。弥生前期中葉のⅠ－2 様式は、北部九州土器編年の板付Ⅱ a 式期～板付Ⅱ b 式期に併行すると考えられるので、北部九州での水石里式系土器の上限が板付Ⅱ a 式期である事実と矛盾しない（武末 2011, 端野 2018）。水石里式系土器は、北部九州での出現からさほど時をおかずして、徳島平野に伝わったのであろうか。121 は、口縁部以外の器形・調整・胎土については在地の弥生土器に通有な特徴をもつが、口縁部に断面長方形の粘土帯を貼り付けた点は、明らかに特異である。徳島平野以外の四国地方では、高知県田村遺跡で断面円形の粘土帯を巻き込んで口縁を成形し、その上面を横ナデで平坦面をつくる土器が確認されており（片岡 1991）、異論はあるであろうが、こうした例を水石里式系土器の在変異型と認めるならば、本例も擬朝鮮系無文土器の可能性はなかろうか。121 は SD102 上面から出土し、Ⅰ－3 様式土器と共伴することから、弥生時代前期末に属する可能性が高い。そのほか、水石里式系土器の可能性のある土器は第9次調査地点の旧河道からも出土しており（北條編 1998）、今後も類例が増加する可能性がある。

なお本稿は、脇山の作成した草稿をもとに、端野が大幅に加筆・修正を行い仕上げたものである。

註

1. 用語の定義は、片岡（1990）に従う。片岡のいう「朝鮮系無文土器」「擬朝鮮系無文土器」それぞれの定義を改めて筆者の言葉に直すと、前者は朝鮮半島の無文土器との形態的・技術的な違いが認められない列島出土土器、後者は朝鮮半島の無文土器、あるいは朝鮮系無文土器の形態的・技術的要素を有しつつも、弥生土器的要素を含め、無文土器とは異なる要素が認められる列島出土土器となる。これらを製作者の観点からみると、「朝鮮系無文土器」は朝鮮半島からの搬入品（無文土器人による製作品）、あるいは朝鮮半島からの渡来人による製作品、「擬朝鮮系無文土器」は弥生人と接触した渡来人やその子孫、あるいは渡来人と接触した弥生人などによる製作品となるだろうか。

最近、これまで「朝鮮系無文土器」「擬朝鮮系無文土器」と呼ばれてきた土器を、無文土器か弥生土器のいずれかに区別しようとする研究(山崎 2021)も提出された。こうした試みが妥当かどうかはともかく、「擬朝鮮系無文土器」の中には、無文土器的要素が優勢な例と、弥生土器的要素が優勢な例の二者があるのは確かである。このうち、弥生土器的要素が優勢な例は、研究者によっては「擬朝鮮系無文土器」の範疇に入れたり、入れなかったりと差異が認められる。本稿では、在来の土器製作伝統からは説明のつかない要素をもち、それが無文土器的要素との類似性を有する例についても、「擬朝鮮系無文土器」の可能性を探りつつ、報告する。

2. 端野(2018)では、整理作業の過程で、SK02を「土坑3」、SK09を「土坑11」と変更して報告したが、今後の公開の便宜を考慮し、本稿では調査時の遺構名に戻して報告した。

文献

- 片岡宏二, 1990. 日本出土の朝鮮系無文土器. 西谷正(編), 古代朝鮮と日本. 名著出版, 東京, pp.75-116.
- 片岡宏二, 1991. 日本出土の無文土器系土器. 小田 富士雄・韓 炳三(編), 日韓交渉の考古学 弥生時代篇. 六興出版, 東京, pp.181-188.
- 小林青樹, 1998. 中国・四国地方の浮線網状文系土器. 永峯光一・氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会(編), 氷遺跡発掘調査資料図譜第3分冊, 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会, 東京, pp.339-342.
- 小林青樹編, 1999. 縄文・弥生移行期の東日本系土器. 国立歴史民俗博物館 春成研究室, 千葉.
- 武末純一, 2011. 弥生時代前半期の暦年代再論. 高倉 洋彰・田中 良之(編), AMS年代と考古学. 学生社, 東京, pp.89-130.
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之(編), 突帯文と御賀川. 土器持寄論文集刊行会, 松山, pp.417-498.
- 中村豊, 2010. 庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査. 年報2, 11-21.
- 端野晋平, 2018. 庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討. 徳島大学埋蔵文化財調査室(編), 庄・蔵本遺跡3. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島, pp.91-116.
- 端野晋平編, 2018. 庄・蔵本遺跡3-ボイラータンク地点(1998年度立会)・第22・30次調査地点-, 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 橋本達也, 2001. 弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島. 青山考古18, 167-176.
- 北條芳隆編, 1998. 庄・蔵本遺跡1, 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 山崎頼人, 2021. 無文土器・弥生土器の変容過程について. 考古学研究268, 49-58.